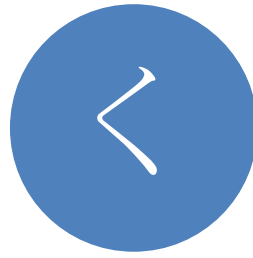


調 査 編

農林水産省 平成 27 年度 消費者ニーズ対応型食育活動モデル事業

食生活の実態・意識調査 アンケート



調査の概要

- ・ 配布および回収方法 調査-2
- ・ 調査内容 調査-2
- ・ 配布および回収状況 調査-2

プロフィール

- ・ 1 居住地域 調査-3
- ・ 2 年齢層 調査-4
- ・ 3 性別 調査-4
- ・ 4 コープでの活動経験 調査-4
- ・ 5 組合員になってからの期間 調査-5
- ・ 6 世帯構成 調査-6
- ・ 7 同居人数 調査-7
- ・ 8 同居家族 調査-8
- ・ 9 日常的な食事作り 調査-9
- ・ 10 ごはんや魚を食べる回数 調査-10

調査結果

- ・ 1. 食事作りで実践していること 調査-18
- ・ 2. 食に関する意識 調査-33
- ・ 3. 食に関する考え方 調査-41
- ・ 4. 地元食材のイメージ 調査-50
- ・ 5. 兵庫県産食材の認知 調査-54
- ・ 6. 食に関する経験 調査-56
- ・ 7. 栄養バランス 調査-61
- ・ 8. 日本型食生活の認知 調査-62
- ・ 9. 日本型食生活のとらえ方 調査-63
- ・ 10. コメを購入する時に重視すること 調査-67

参考資料

- ・ 1. 事前調査票&単純集計 調査-69
- ・ 2. 事後調査票&単純集計 調査-73
- ・ 3. フリーアンサー 調査-77

食生活の実態・意識調査

■調査の概要

事業概要に記載した親子対象の課題発見型スタディツアー、農業・漁業体験、食材の流れを知るための加工・流通体験、店舗棟での料理会・講習会、食文化の関するシンポジウム、食文化セミナーの各事業について、効果検証のため、以下のとおりアンケート調査を実施した（調査票・単純集計表は P57～【資料 1】【資料 2】参照）。

① 配布および回収方法

〈配布〉 直前・直後・事後の 3 種類の調査票を、学習会等の受付時に配布

〈回収〉 直前……学習会等の開始までに記入したものを、学習会等終了時に回収

直後……学習会等の直後に記入したものを、学習会等終了時に直前アンケート とともに回収

事後……学習会等の 1 か月後をめどに記入し、返信用封筒で返送

② 調査内容

設問内容	設問数		
	直前	直後	事後
1. プロフィール(居住地・年齢・世帯人数・世帯構成・組合員活動など)	7	—	—
2. 日常的な食事作り	1	—	—
3. 米食および魚食の頻度(朝・昼・夕)	1	—	1
4. 食事作りで実践していること	16	—	16
5. 今後の食生活に望むこと	9	—	9
6. 食に関する考え方	11	—	11
6. 食に関する考え方地元食材に持つイメージ	8	—	—
7. 地元食材の認知	4	—	4
8. 食に関する経験	12	—	9
9. 栄養バランスや日本型食生活の認知	2	—	2
10. 日本型食生活の理解	14	—	14
11. コメを購入するときに重視すること	—	—	2
12. 自由記述	なし	あり	あり

③ 配布および回収状況

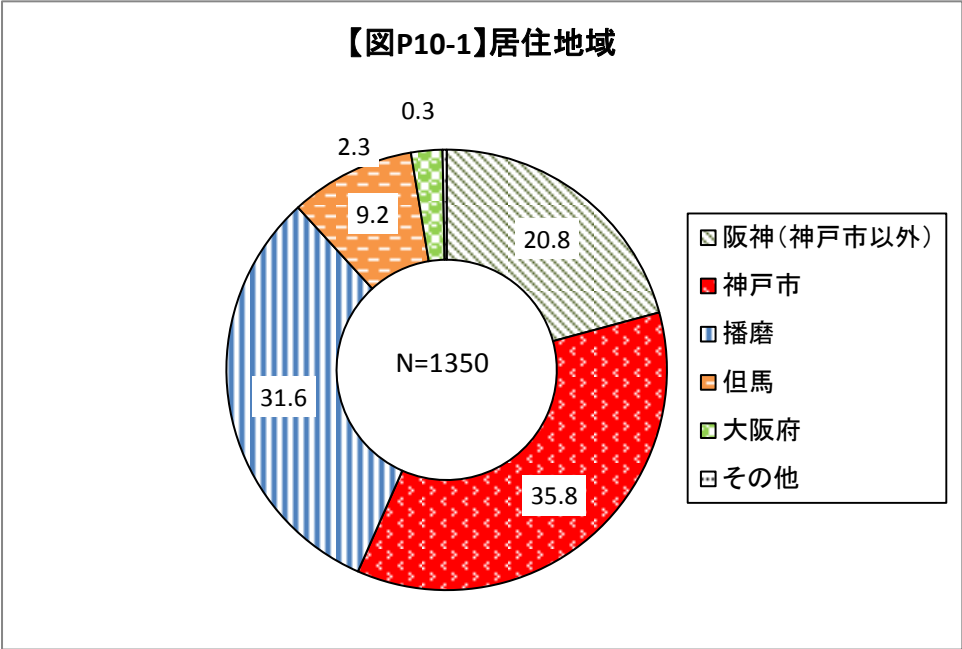
事前アンケートと直後アンケートに関しては、2 月末までの開催分を対象に集計・分析した。また、事後アンケートに関しては、2 月末までに返送されたものを対象に集計・分析した。

区分	回数	配布数	事前		直後		事後	
			回収数	回収率(%)	回収数	回収率(%)	回収数	回収率(%)
調理講習会	57	1126	1020	90.6	878	78.0	731	64.9
産地見学・交流会	14	322	256	79.5	273	84.8	122	37.9
セミナー・シンポジウム	4	132	119	90.2	117	88.6	36	27.3
合計	75	1580	1395	88.3	1268	80.3	889	56.3

■調査対象者のプロフィール

1：居住地域

・神戸市は 35.8%を占め、神戸市以外の阪神地区（20.8%）と合計した阪神地域は、56.6%となっている。播磨は3割を超えるが、但馬は1割に満たない。また、丹波・篠山などからなる丹波地域からの回答者は見られない。



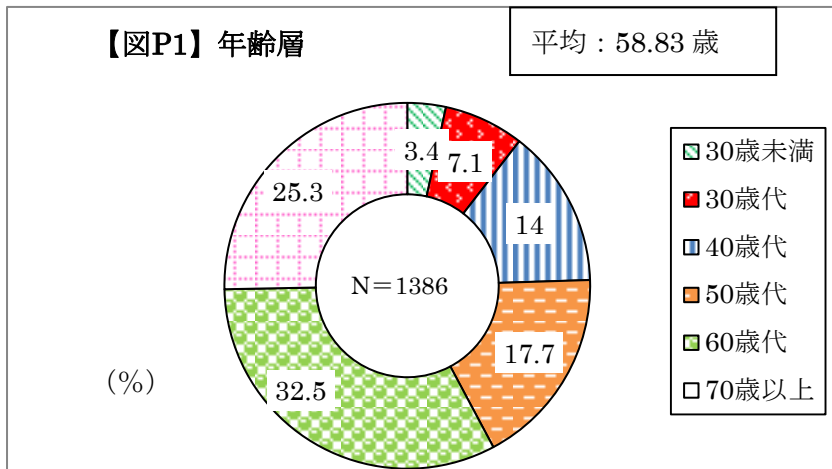
・居住地域を詳細にみると、神戸市北区が1割を超えて最も多く、姫路市、神戸市西区、垂水区、西宮市、三木市などが多くなっている。

【表 P10-1】居住地域（詳細）

阪神				播磨		但馬		大阪府		その他	
阪神(神戸市以外)		神戸市									
宝塚市	5.4	東灘区	3.7	三木市	5.6	豊岡市	1.0	大阪市	0.2	京都府	0.1
川西市	0.7	灘区	1.5	明石市	1.6	養父市	0.3	豊中市	1.7	神奈川県	0.1
川辺郡	0.4	中央区	0.6	高砂市	2.1	朝来市	7.9	高槻市	0.1	埼玉県	0.1
尼崎市	1.6	兵庫区	0.3	多可郡	0.7	美方郡	0.1	茨木市	0.1		
伊丹市	1.8	北区	11.5	佐用郡	1.0			箕面市	0.1		
西宮市	6.7	長田区	0.2	加古郡	2.8			寝屋川市	0.1		
芦屋市	0.7	須磨区	0.9	赤穂郡	3.1						
三田市	3.4	垂水区	8.2	赤穂市	1.3						
		西区	8.9	相生市	2.7						
				たつの市	0.1						
				姫路市	10.6						

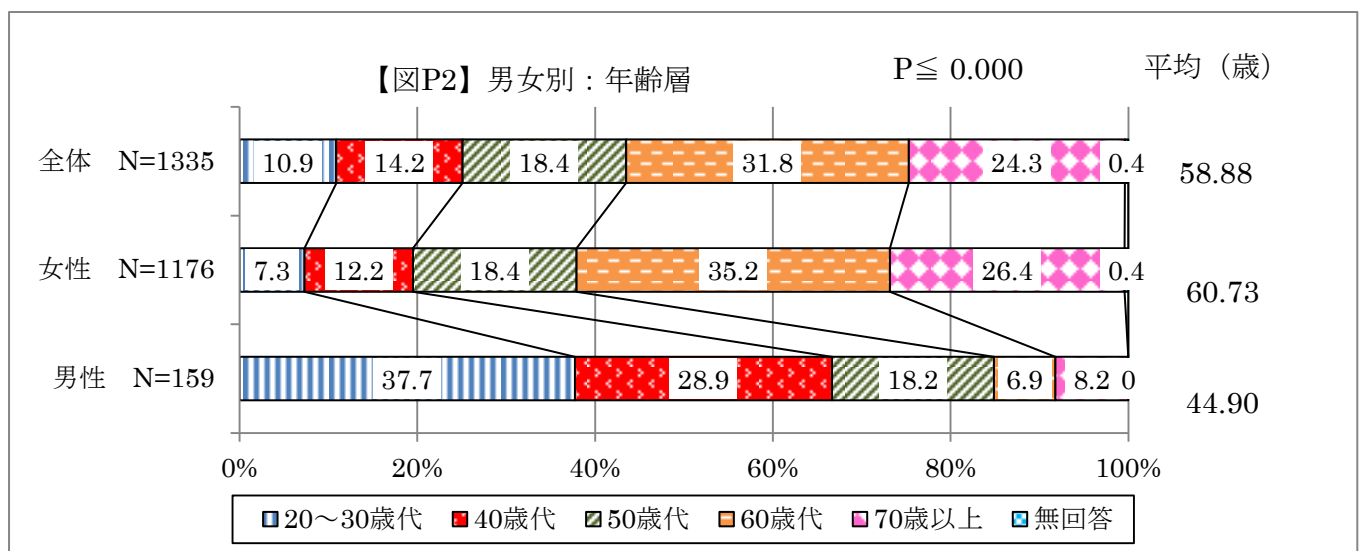
2：年齢層

- ・〈30歳未満〉から〈70歳以上〉まで、10歳刻みの選択肢を設け、年齢をたずねた。〈60歳代〉が最も多く、〈70歳代〉が続いている。〈30歳未満〉と〈30歳代〉は5%前後と少ない。以降の分析には、この2層を〈20～30歳代〉というくくりで見えていくことにする。
- ・中央値をとって平均値を算出すると、58.83歳となった。



3：性別

- ・〈女性〉が88.1%と多くなっている。
- ・男女別に年齢層を見ると、〈男性〉は50歳未満の層で7割弱を占めるが、〈女性〉では2割弱にとどまる。このため、男女別の比較をするときは、〈男性〉は若年層、〈女性〉は高齢層の意見を色濃く反映することに留意が必要である。
- ・〈男性〉の平均年齢は44.90歳、〈女性〉は60.73歳と、平均で比較しても15歳以上の開きがみられる。

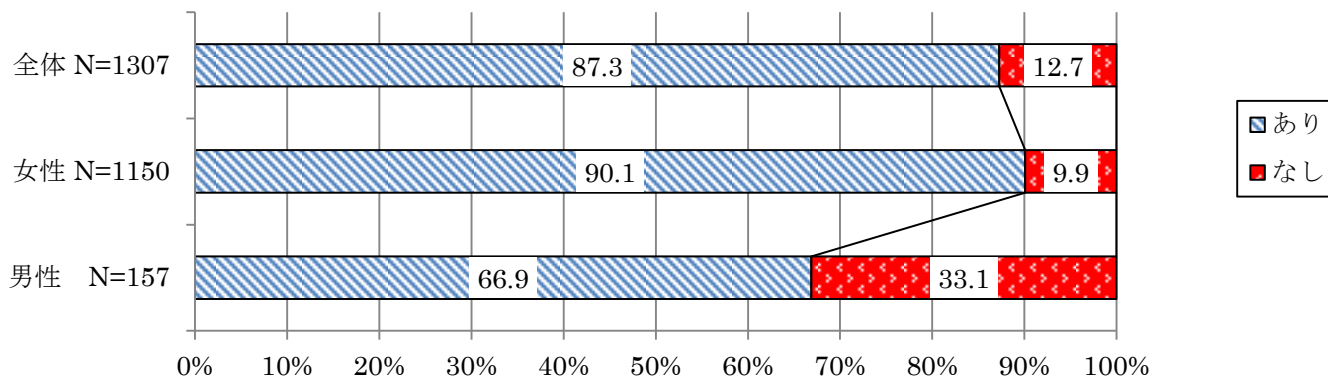


4：コープでの活動経験

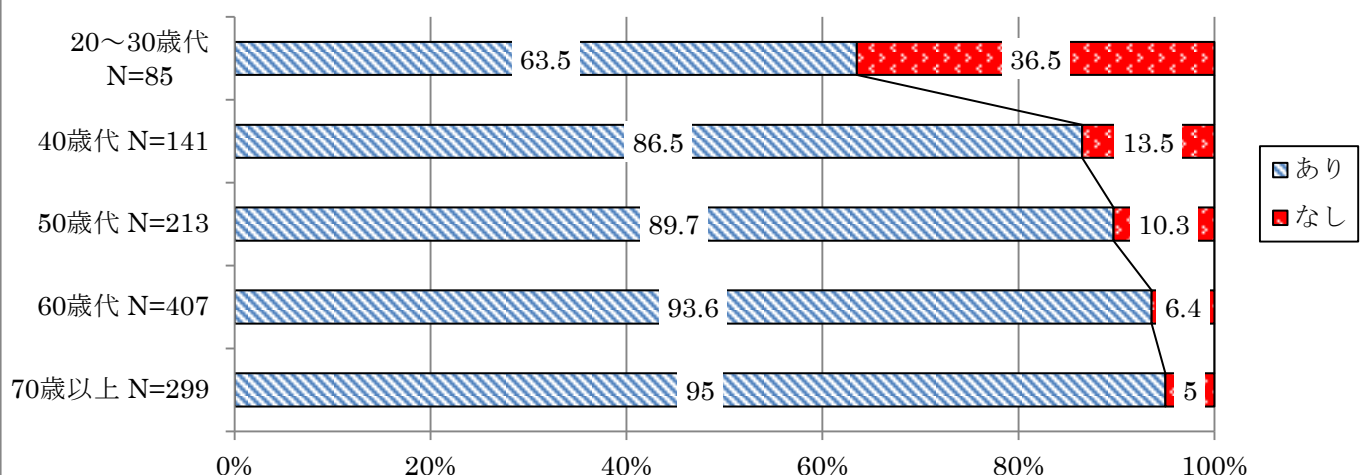
- ・コープ委員会やコープサークル・くらぶの活動、学習会、イベント等の参加経験などをたずねた。男性では7割弱だが、女性では9割を超えて多くなっている。いずれにせよ、今回の回答者は、なんらかのコープのイベントに参加した人を対象にしているため、一般の組合員よりも参加意識が高い人が対象だと考えられる。
- ・母数の多い女性を年齢層別にみると、年齢層が高くなるほど、コープの活動に参加経験を持つ人が多くなっている。

【図P3】 コープの活動の参加経験

P≤0.000



【図P3-1】 年齢層別：コープの活動の参加経験（女性のみ）

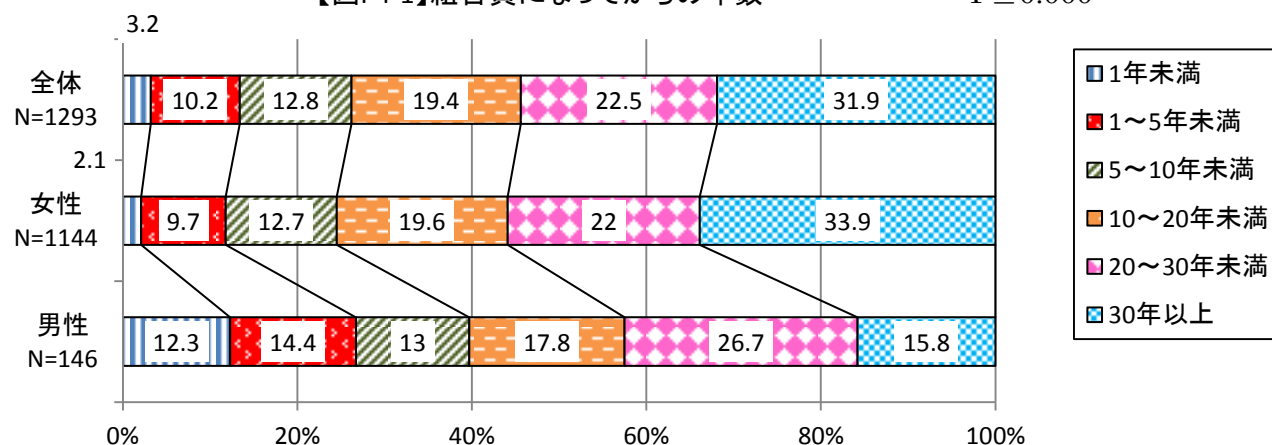


5：組合員になってからの期間

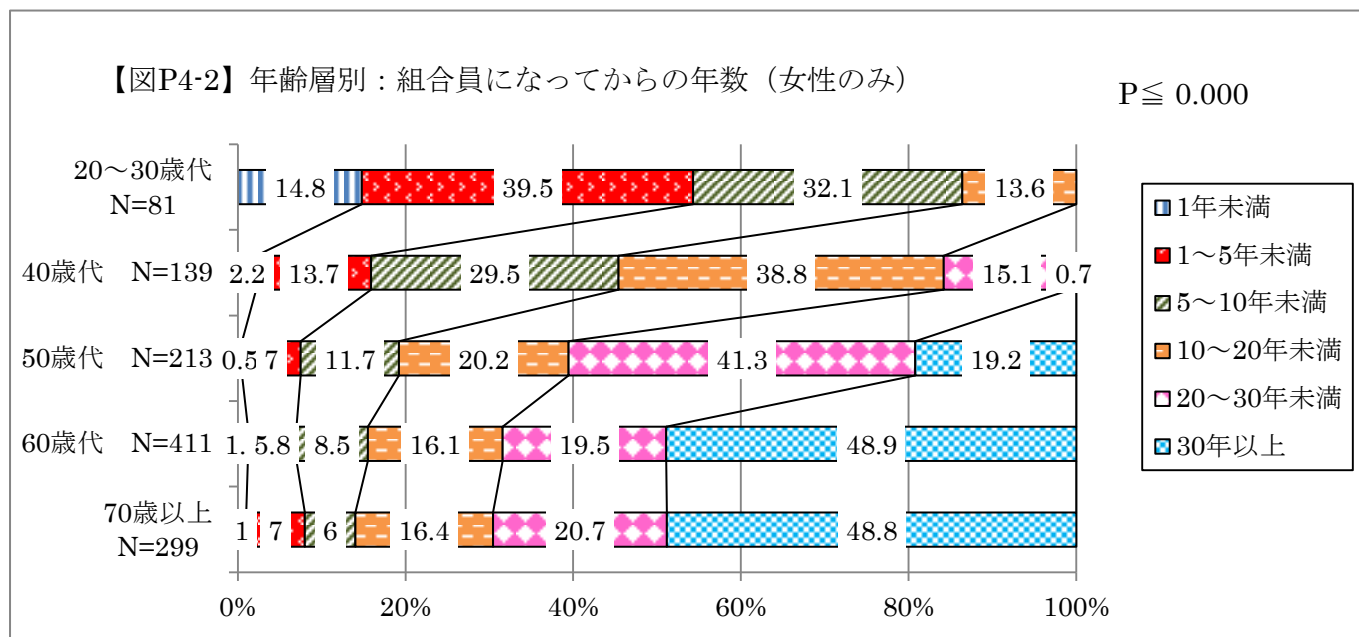
- ・〈1年未満〉〈1～5年未満〉〈5～10年未満〉〈10～20年未満〉〈20～30年未満〉〈30年以上〉の6つの選択肢を上げ、組合員になってからの期間をたずねた。〈30年以上〉が3割を超えて最も多く、20年以上の人の合計が半数を超えている。
- ・男女別にみると、女性の方が年齢層が高いことを反映してか、女性の方が加入年数が長くなっている。

【図P4-1】組合員になってからの年数

P≤0.000

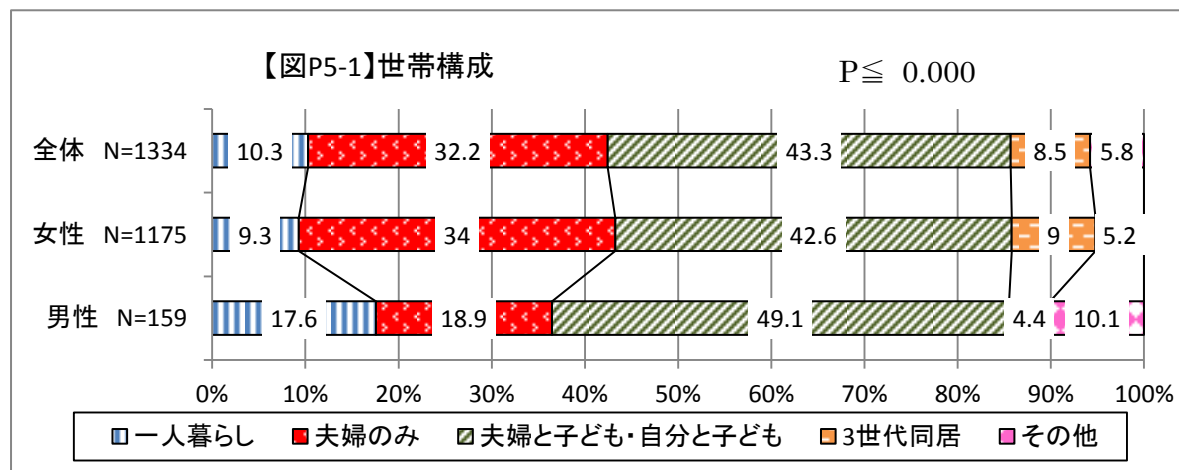


- ・母数の多い女性を年齢層別にみると、当然のことながら、年齢層が高くなるほど加入年数が長くなっている。



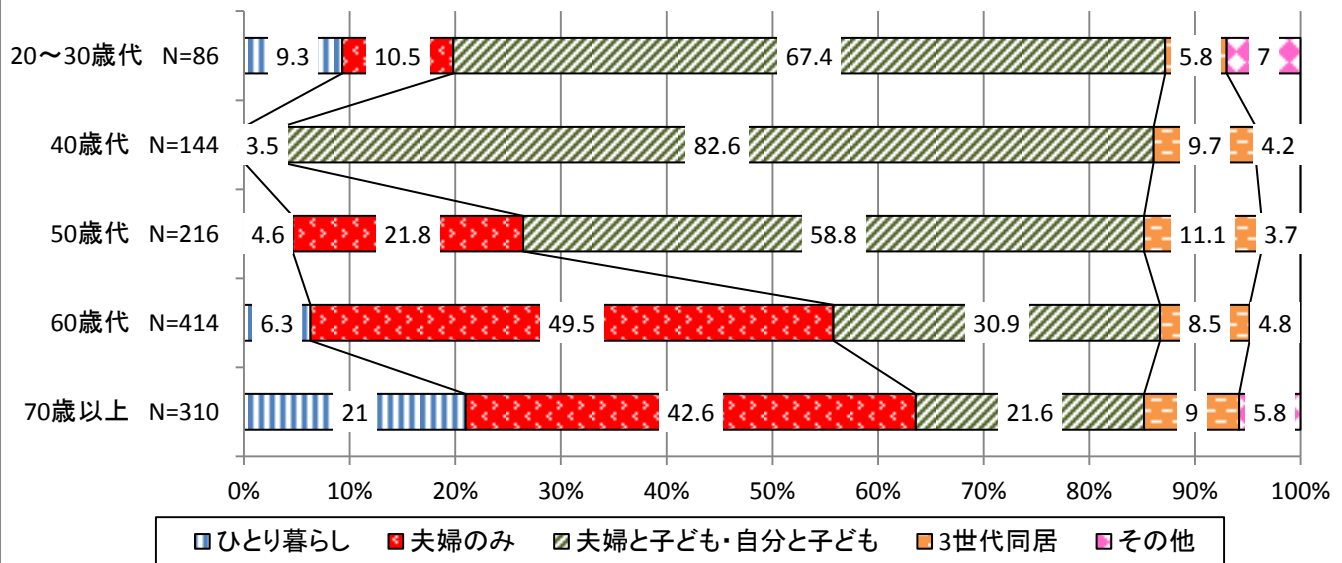
6：世帯構成

- ・〈一人暮らし〉〈夫婦ふたりのみ〉〈夫婦と子ども・自分と子ども〉〈世代同居（親世代＋自分世代＋子ども、自分世代＋子ども世代＋孫世代など）〉〈その他〉の選択肢を上げ、世帯構成をたずねた。〈夫婦と子ども・自分と子ども〉といったいわゆる核家族が4割を超えて最も多く、〈夫婦ふたりのみ〉が3割強で続いている。
- ・男女別にみると、男性の〈一人暮らし〉が17.6%と多くなっているが、これは若年層の〈一人暮らし〉で、高齢の一人暮らしは見られない。
- ・女性を年齢層別にみると、70歳以上では〈一人暮らし〉が2割を超えて多くなっている。また、〈夫婦と子ども・自分と子ども〉は、40歳代で8割を超えている。



【図P5-2】年齢層別：世帯構成(女性のみ)

$P \leq 0.000$



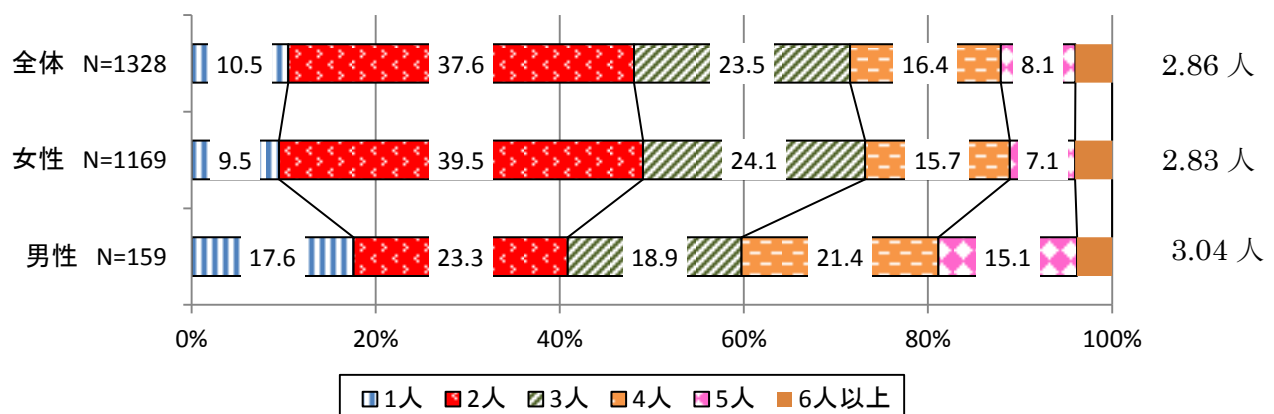
7：同居家族

- ・〈1人〉から〈6人以上〉までの選択肢を上げ、同居人数をたずねた。〈2人〉が37.6%で最も多く、〈3人〉〈4人〉と続いている。選択肢をそのまま同居人数として平均値を求めると、平均は2.86人となっている。
- ・男女別にみると、男性の方が〈1人〉が多いものの、〈4人〉〈5人〉も多くなっているため、平均は男性の方がやや多くなっている。
- ・女性を年齢層別にみると、40歳代では〈4人〉が4割を超え、〈5人〉も2割を超えており、平均人数は3.98人と最も多くなっている。40歳以上では、年齢層が高くなるほど〈1人〉や〈2人〉が多くなり、平均人数も高齢になるほど少なくなる傾向がみられる。20～30歳代では〈1人〉が1割を超え、平均は40歳代より少なくなっている。

【図P6-1】同居人数

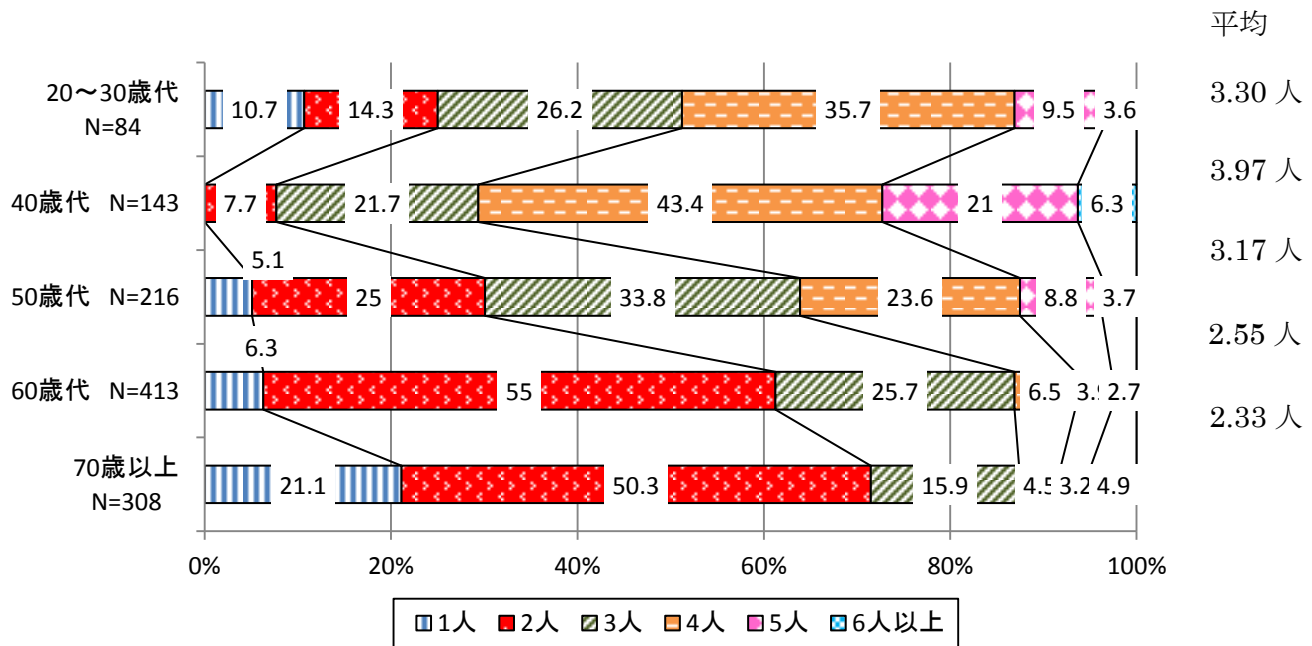
$P \leq 0.000$

平均



【図P6-2】年齢層別：同居人数(女性のみ)

$P \leq 0.000$



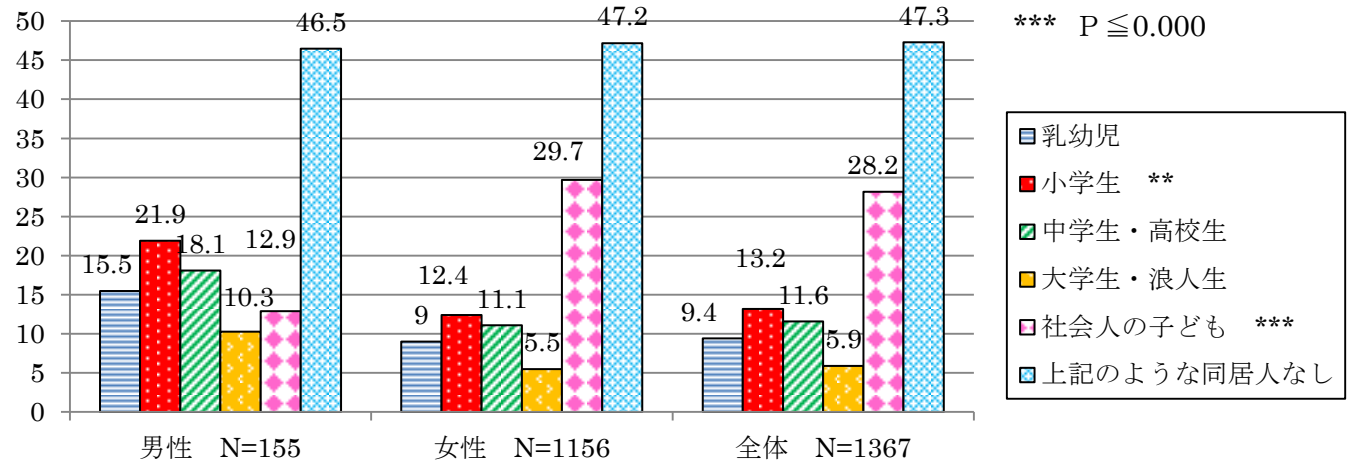
8：同居家族

- ・〈乳幼児〉〈小学生〉〈中学生・高校生〉〈大学生・浪人生〉〈社会人の子ども〉〈1から5のような同居人はいない〉の選択肢を上げ、複数回答でたずねた。年齢層が高いことを反映してか、〈1から5のような同居人はいない〉が半数弱で最も多く、〈社会人の子ども〉が3割弱で続いている。
- ・男女別にみると、男性の方が乳幼児や小学生、中学生・高校生などの子どもを持つ人が多くなっている。

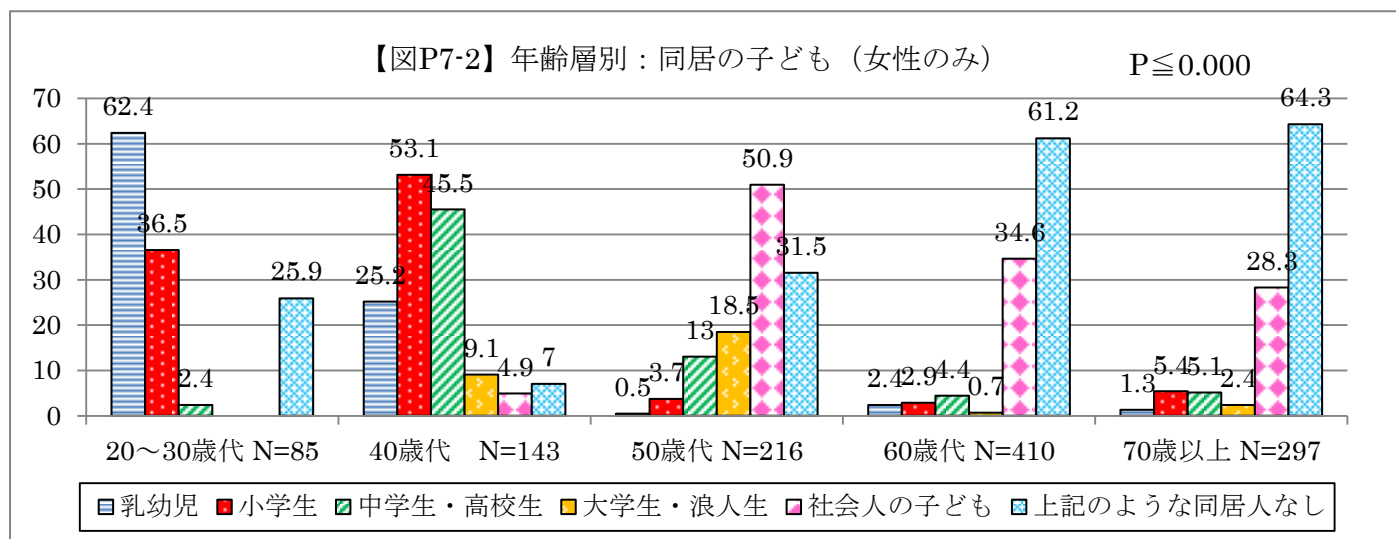
【図P7-1】同居の子ども

** $P \leq 0.005$

*** $P \leq 0.000$

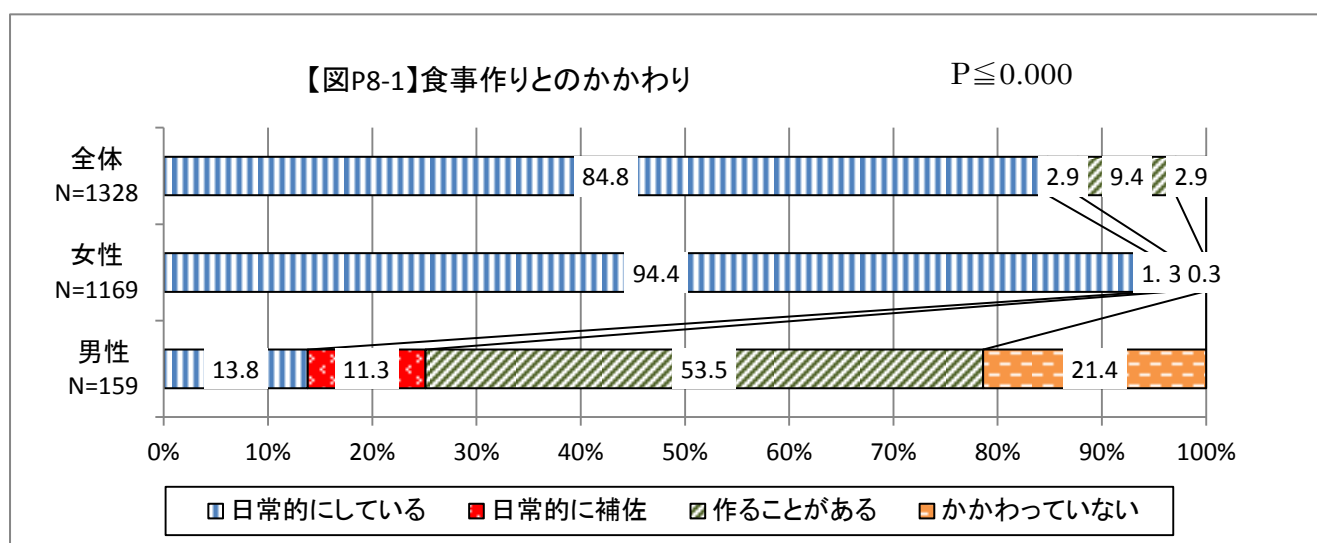


- ・女性を年齢層別別にみると、〈乳幼児〉は年齢層が低いほど多く、20～30歳代では6割を超えている。〈小学生〉は40歳代で半数を超えて多く、20～30歳代でも4割弱みられる。〈中学生・高校生〉も、40歳代が最も多くなっている。〈社会人の子ども〉は50歳代で半数を超えて多くなっているが、60歳代、70歳以上でも3割前後みられる。また、〈これらの同居人はいない〉は、60歳以上では6割を超えている。

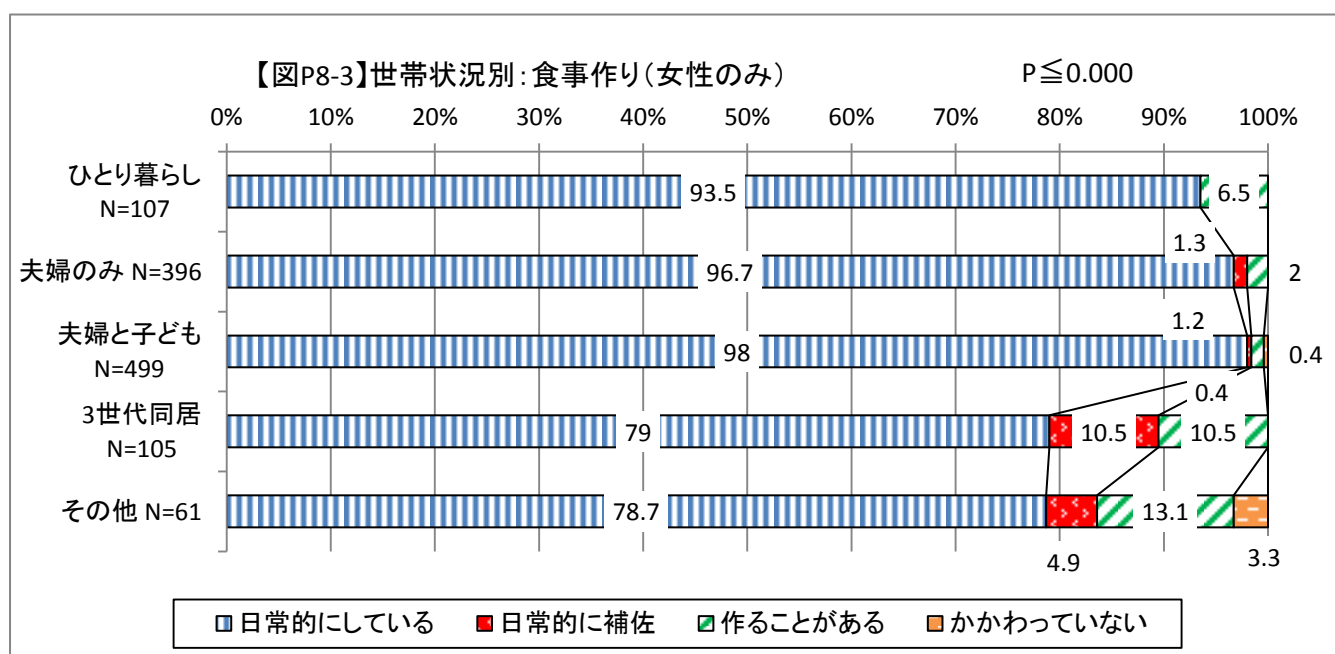
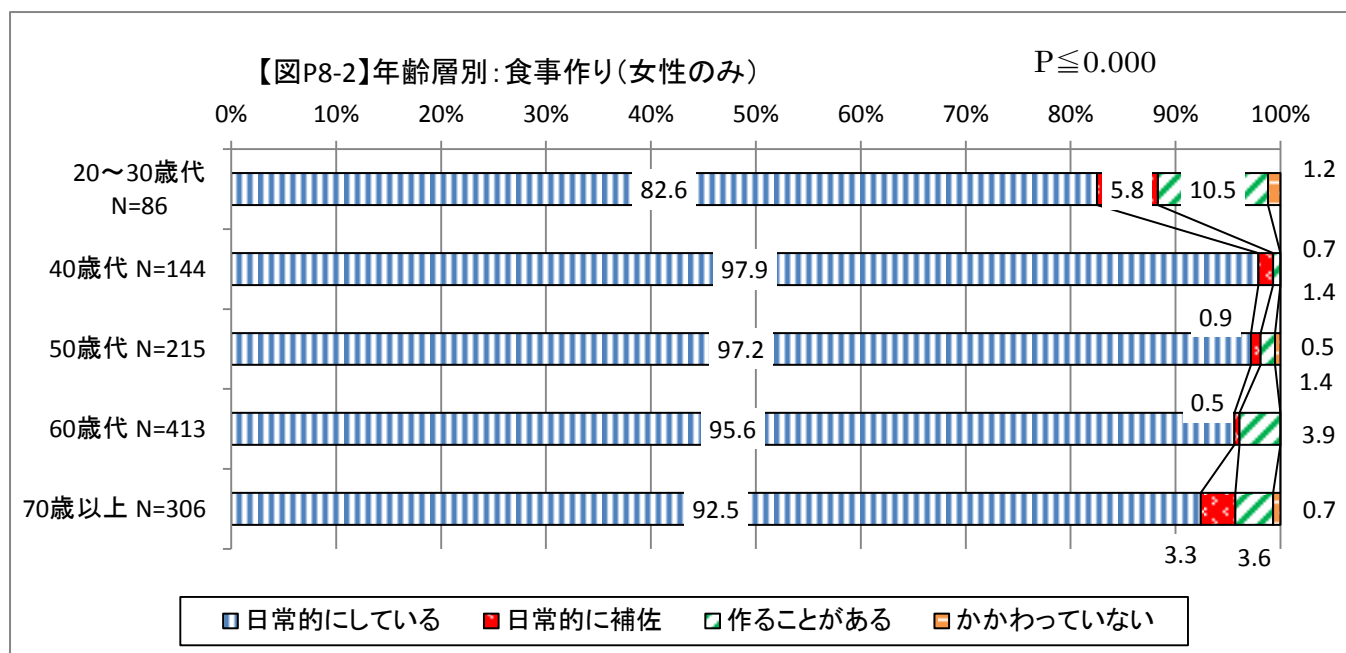


9：日常的な食事作り

- ・実際に食事作りをしているかどうかによって、食に対する考え方に差が出てくるのではないかと考え、〈日常的に食事作りをしている〉〈主ではないが、日常的に食事作りを手伝っている〉〈日常的にはではないが、食事を作ることがある〉〈食事作りにはかかわっていない〉の選択肢を上げてたずねた。
- ・84.8%の人が〈日常的に食事作りをしている〉と回答している。
- ・男女別にみると、〈日常的に食事作りをしている〉は94.4%に上るのに対し、男性では13.8%にとどまり、食事作りを担っているのは女性という構図が見えてくる。



- ・女性を年齢層別にみると、20～30歳代のみ、〈日常的に食事作りをしている〉が82.6%と、他の年齢層よりも少なくなっている。
- ・また、女性を世帯構成別にみると、3世代同居の世帯で〈日常的に食事作りをしている〉が8割を下回っている。



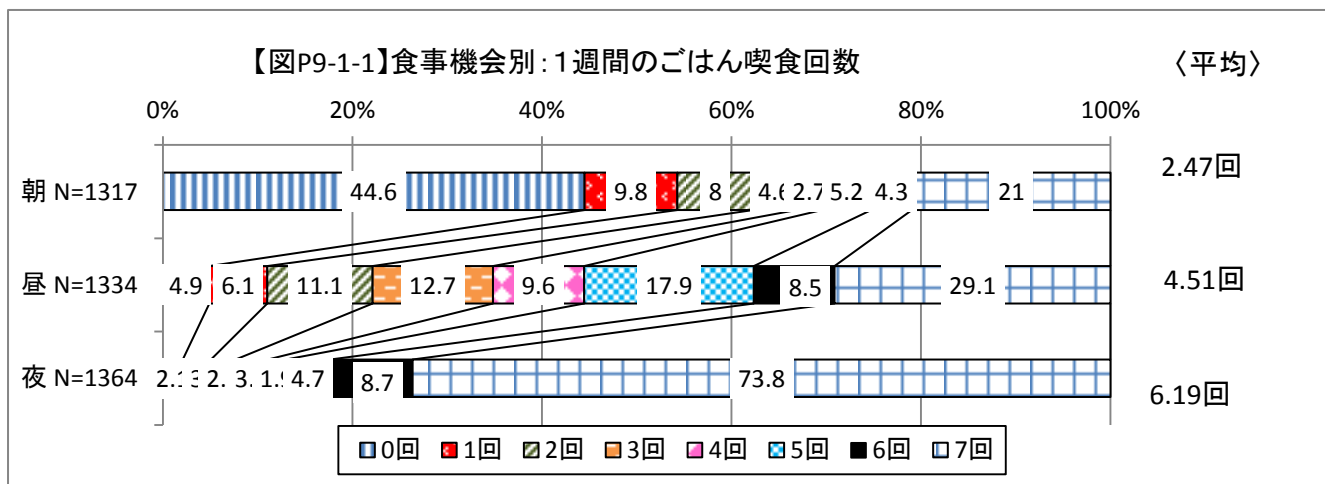
10：ごはんや魚を食べる回数（1週間単位）

- ・魚食は主食がごはんかどうかによって左右されるのではないかと考え、朝・昼・夜それぞれのごはん(米食)と魚の喫食回数をたずねた。

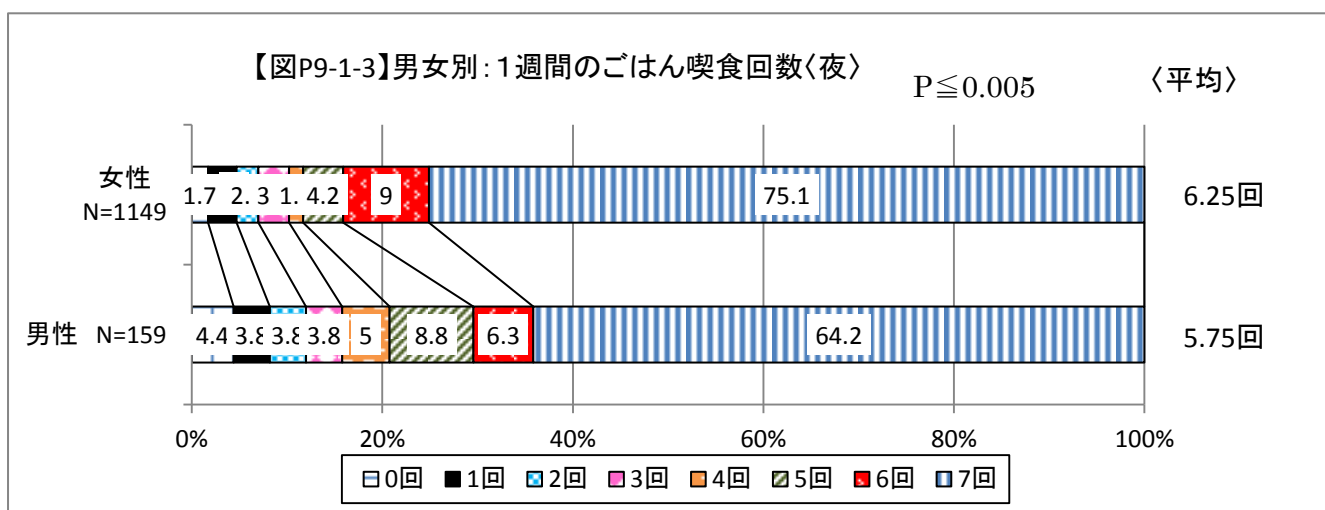
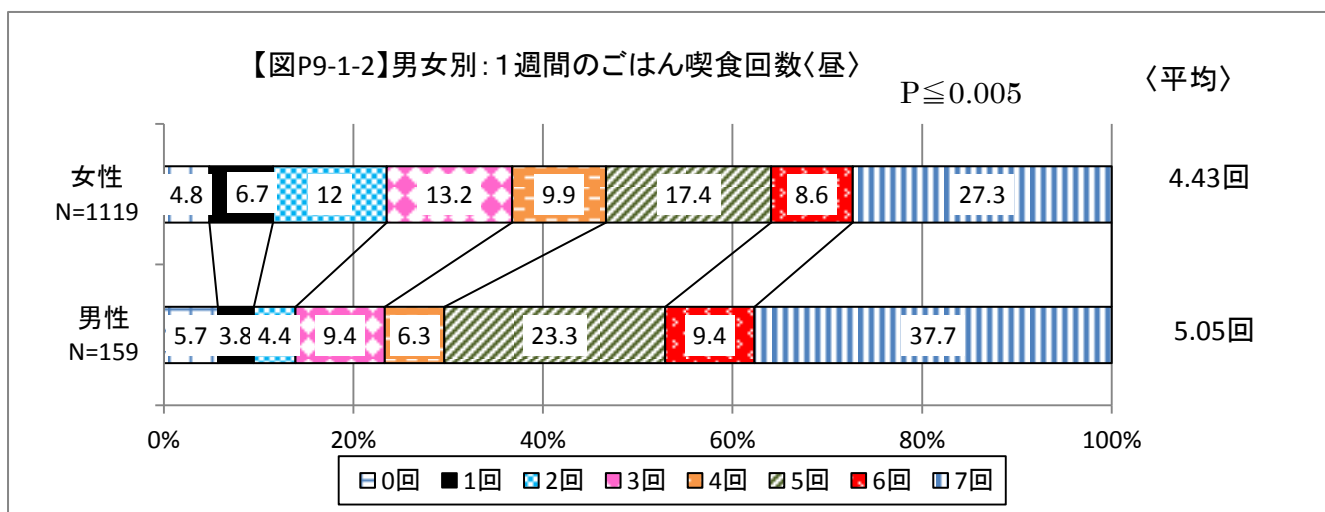
【事前アンケート結果】

(1) ごはんの喫食回数

- ・朝・昼・夜それぞれのごはんの喫食回数を比較すると、朝は0回が4割を超えて最も多く、7回が2割で続いており、毎朝パンなどを食べてご飯は食べない、あるいは、そもそも朝ごはんを食べない人と、毎朝ごはんを食べている人に分かれている様子が見てとれる。
- ・昼は7回（毎朝ごはん）が3割弱と朝と比べて多く、夜になると7割を超えている。「日本人の主食は米」とはいうが、主食が米である割合は、朝や昼といった食事機会では半数にも満たない。



- ・食事機会別に男女別にみると、昼と夜とで有意差がみられる。昼は、男性では7回（毎回）と回答した人が4割弱であるのに対し、女性では3割弱と少なくなっており、平均で見ても0.6回程少なくなっている。
- ・夜では、7回（毎回）と回答した人は女性で75.1%、男性で64.2%と、男性の方が少なくなっている。

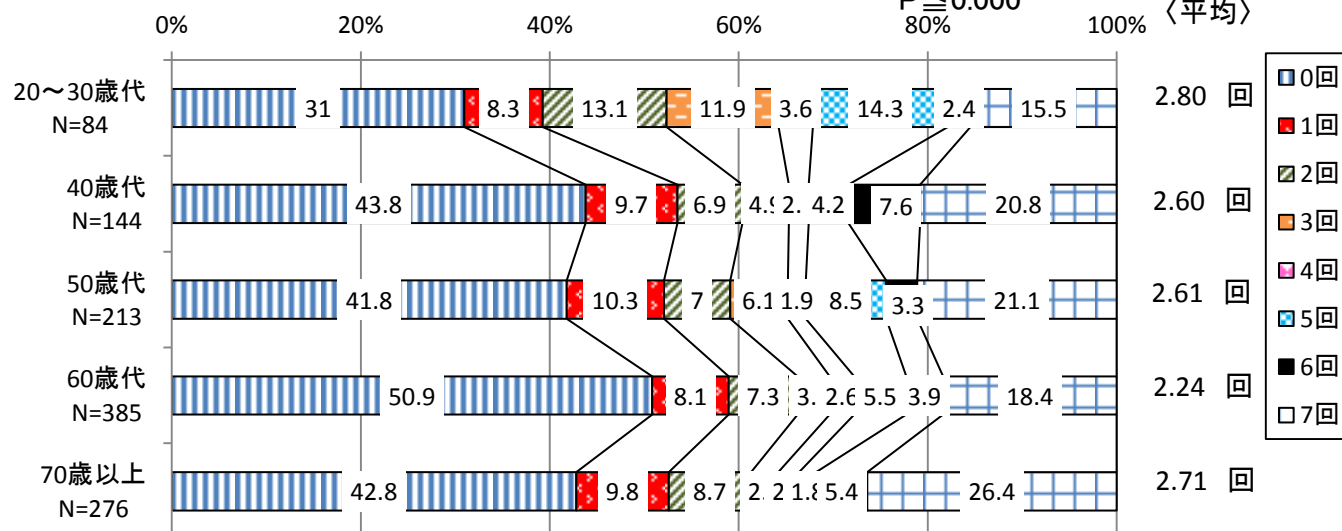


- ・女性のみ、年齢層別にみると朝食のみ有意差がみられる。0回（週のうち、1度もごはんを食べない）は、60歳代が半数を超えて最も多く、60歳代では7回（毎回ごはん）も20～30歳代について少なくなっている。このため、1週間のごはんの喫食回数は、60歳代が2.24回と、最も少なくなっている。70歳以上でも0回は4割を超えているが、7回は各年齢層の中で最も多く、毎回食べる派と全く食べない派の両極に分かれている様子がうかがえる。

【図P9-1-4】年齢層別：1週間のごはん喫食回数<朝食>（女性のみ）

$P \leq 0.000$

100% <平均>

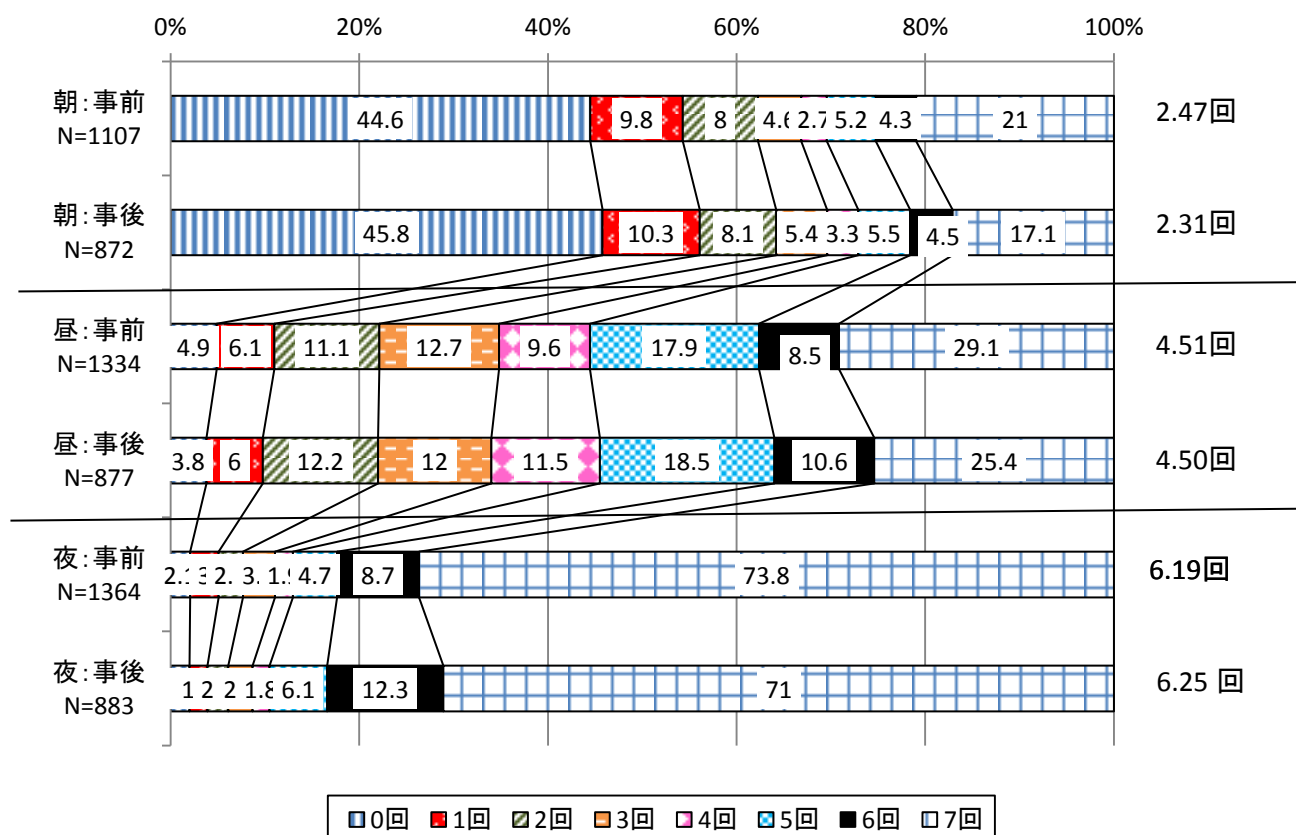


【事後アンケートとの比較】

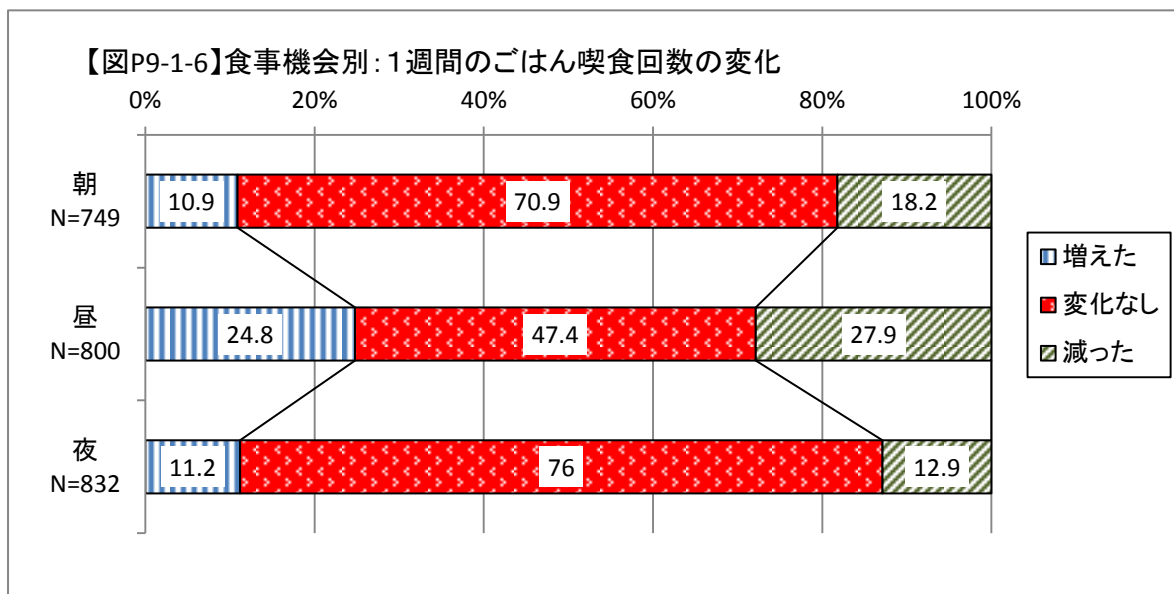
- ・事後(1 か月後)アンケートでも、食事機会ごとにごはんの喫食回数をたずねている。事前と事後で比較しても大きな差は見られない。

【図P9-1-5】食事機会別：1週間のごはん喫食回数(事後との比較)

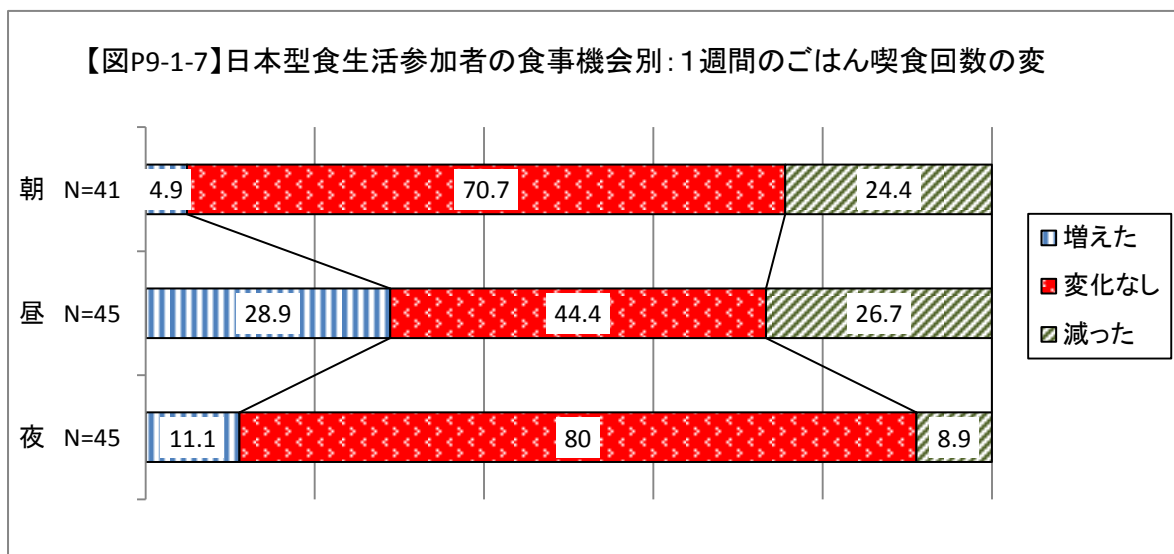
<平均>



- ・事後アンケートに回答した人の事前の回数と比較すると、ごはんの喫食回数は「変化なし」が最も多いものの、どの食事機会でも「減った」が「増えた」を上回っている。今回の学習会では魚をテーマにしたものが多く、学習会を通して米食の増加にはつながらなかったと考えられる。



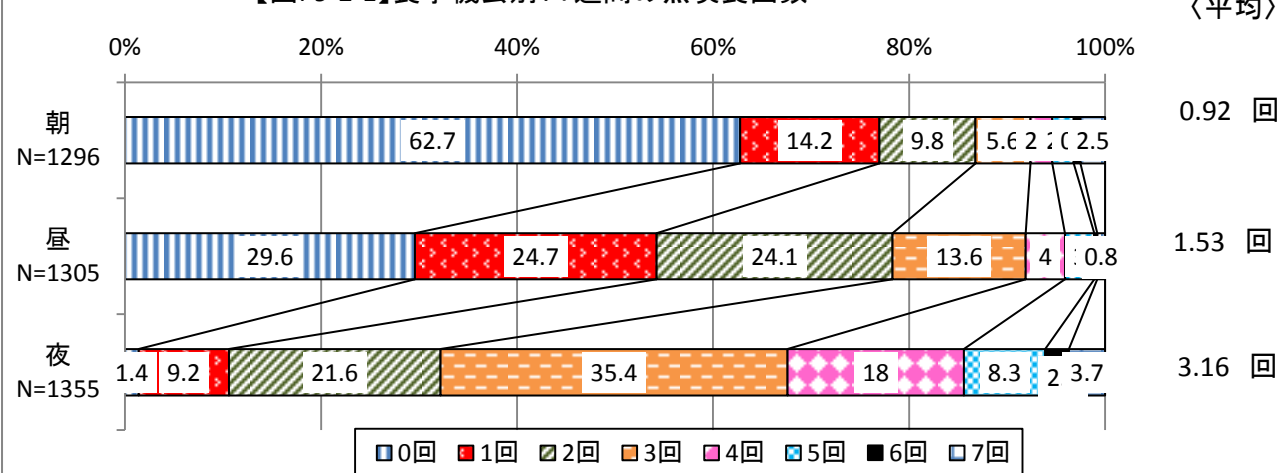
- ・学習会の種別にみると、日本型食生活料理会は母数が少ないので有意差は見られないものの、昼と夜の食事機会では、「増えた」が「減った」を上回る結果となっている。



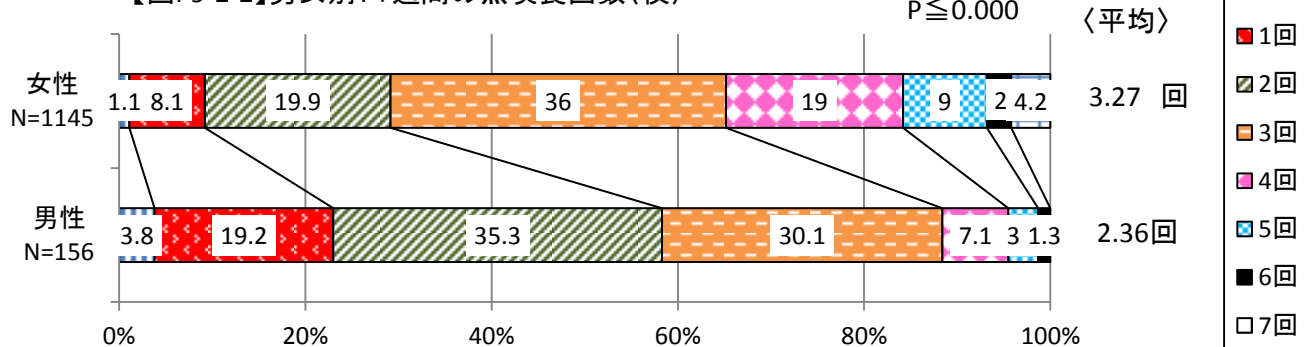
(2) 魚の喫食回数

- ・朝・昼・夜それぞれ魚の喫食回数を比較すると、朝は0回が6割を超えて最も多く、1回が1割強で続いている。平均値は0.92回となっている。昼は0回が最も多いものの、1回や2回も2割を超えている。夜になると最も多いのは3回で、平均値も3.16回となっている。また、週に4回以上食べる人の合計は、3割を上回っている。男女別に差がみられたのは夜のみで、女性の方が喫食回数が増えているが、これは年齢の偏りに起因するものと考えられる。

【図P9-2-1】食事機会別：1週間の魚喫食回数

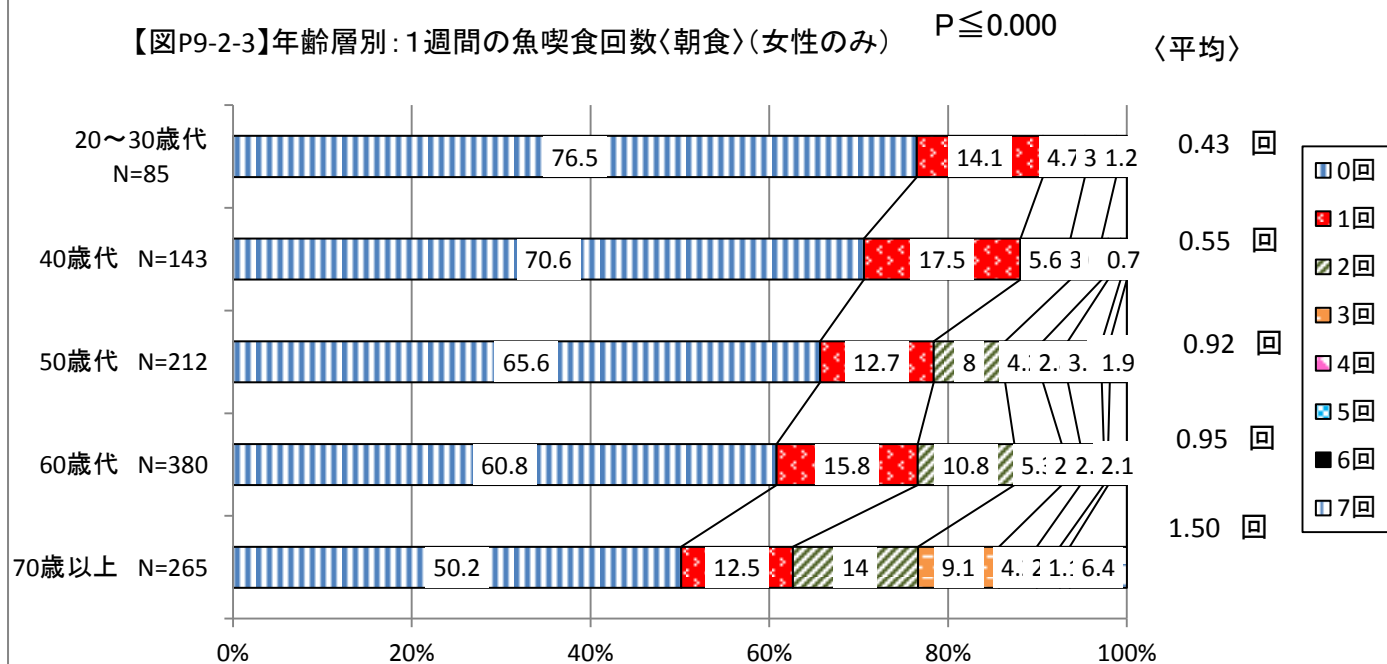


【図P9-2-2】男女別：1週間の魚喫食回数〈夜〉



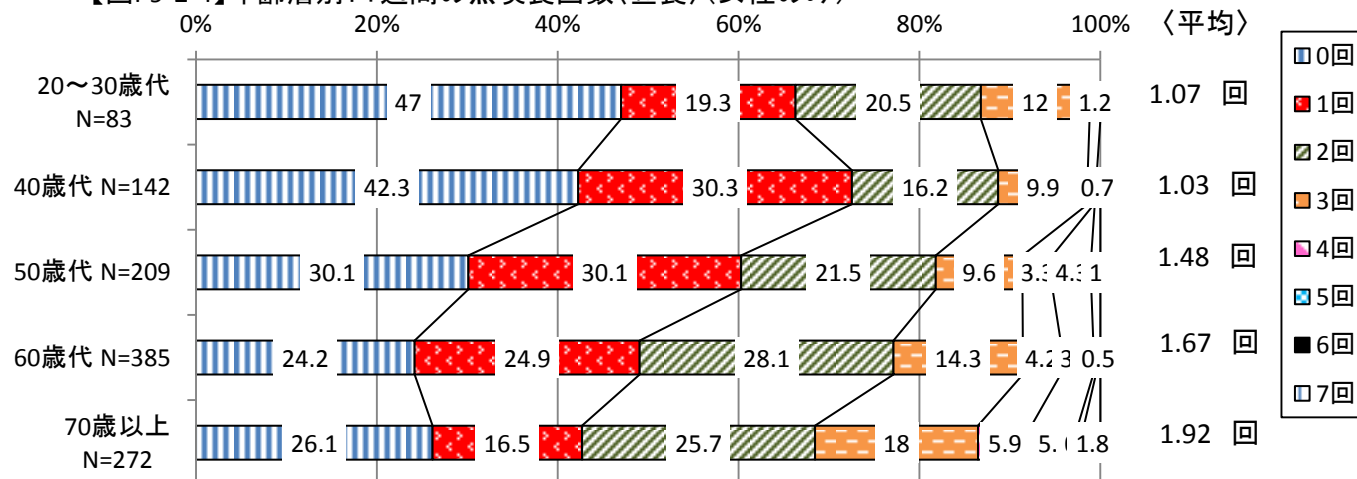
・女性のみ年齢層別にみると、すべてで有意差がみられる。どの食事機会でも、年齢層が高くなるほど、魚の喫食回数が増える傾向がみられる。

【図P9-2-3】年齢層別：1週間の魚喫食回数〈朝食〉(女性のみ)



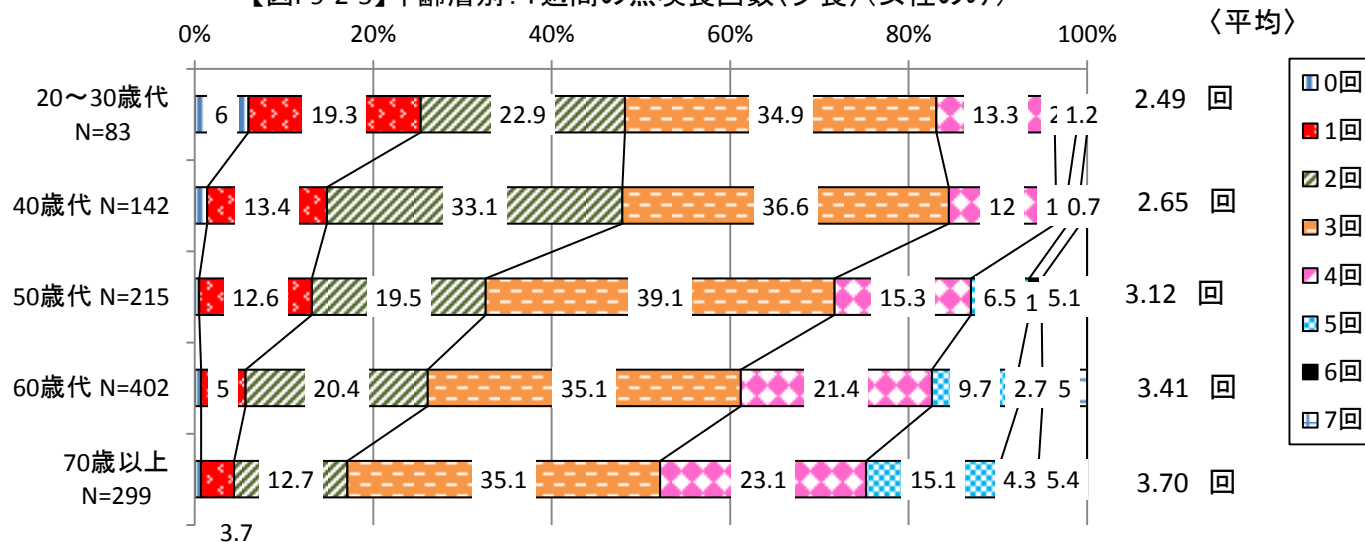
【図P9-2-4】年齢層別：1週間の魚喫食回数〈昼食〉(女性のみ)

$P \leq 0.000$



【図P9-2-5】年齢層別：1週間の魚喫食回数〈夕食〉(女性のみ)

$P \leq 0.000$

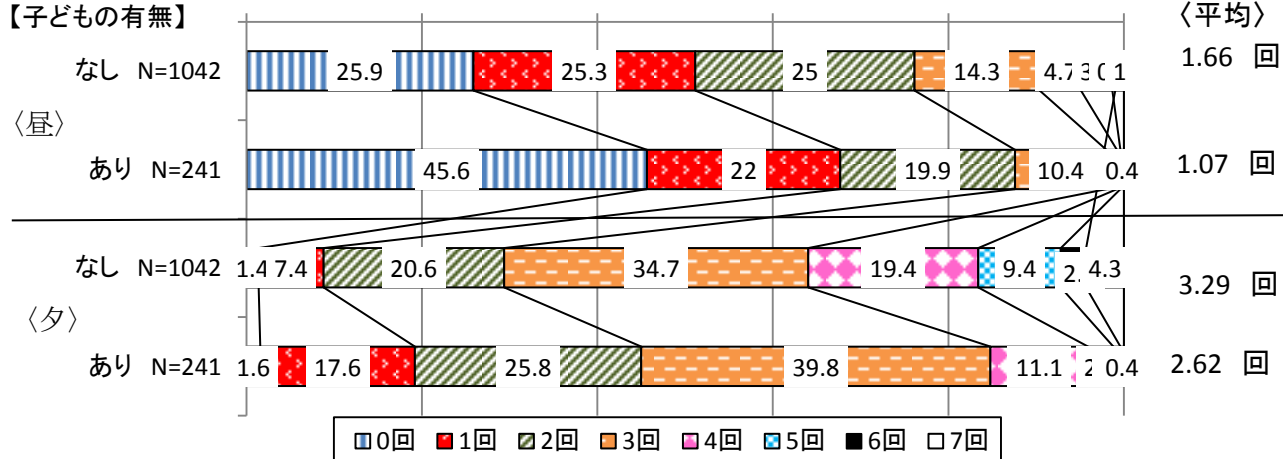


・また、小学生までの子どもの有無別にも差がみられ、小学生までの子どもがいる人の方が、魚の喫食回数が少なくなっている。

【図P9-2-6】小学生までの子どもの有無別：1週間の魚喫食回数〈昼・夕〉(女性のみ)

$P \leq 0.000$

【子どもの有無】



- ・ごはんと魚の関連性を見ると、どの食事機会でもおおむねごはんの喫食回数が多くなるほど、魚の喫食回数も多くなる傾向がみられる。

【表P9-2-1】ごはん喫食回数別：1週間の魚喫食回数平均

	魚の喫食回数(平均)		
ごはん喫食回数	朝	昼	夜
0回	0.26	1.36	3.26
1回	0.81	3.04	5.34
2回	0.98	4.52	6.17
3回	1.28	5.43	6.31
4回	1.55	5.36	6.44
5回	1.69	5.46	6.36
6回	2.01	5.33	6.30
7回	1.91	5.82	6.51

- ・男女別に平均値を見ると、ごはんは昼のみ男性の方が多く、他の機会は女性の方が多くなっている。また、女性の年齢層別に平均値を見ると、魚はどの食事機会でもおおむね年齢層が高くなるほど登場回数が多くなっているが、ごはんに関しては明確な差は見られない。

【表P9-2-2】男女別：ごはんと魚の喫食回数：平均

	ごはん			魚		
	朝	昼	夜	朝	昼	夜
男性	2.19	5.05	5.75	0.43	1.26	2.36
女性	2.52	4.43	6.25	0.99	1.57	3.27
合計	2.48	4.51	6.19	0.92	1.53	3.16

【表P9-2-3】年齢層別：ごはんと魚の喫食回数：平均(女性のみ)

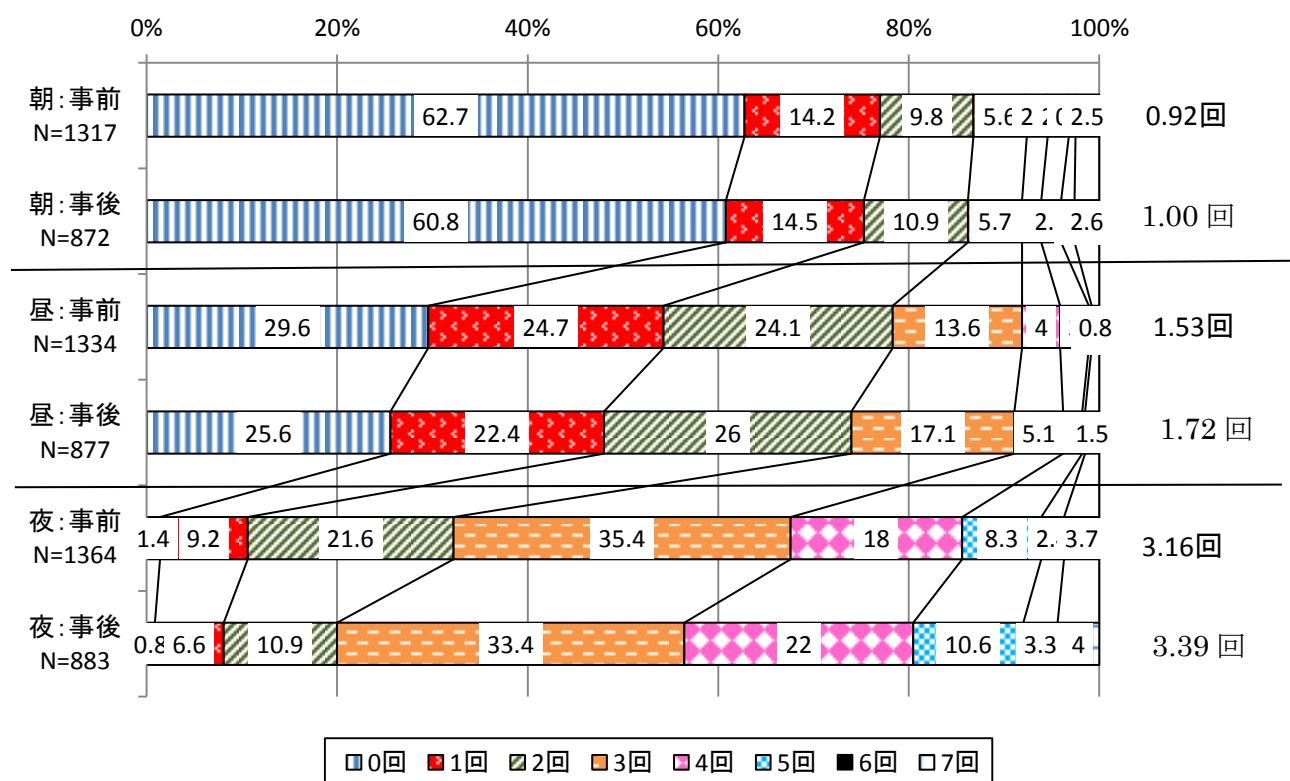
	ごはん			魚		
	朝	昼	夜	朝	昼	夜
20～30歳代	2.80	5.00	6.25	0.43	1.07	2.49
40歳代	2.60	4.42	6.27	0.55	1.03	2.65
50歳代	2.61	4.43	5.99	0.92	1.48	3.12
60歳代	2.24	4.42	6.39	0.95	1.67	3.41
70歳以上	2.72	4.28	6.21	1.50	1.92	3.70

【事後アンケートとの比較】

- ・事後（1 か月後）アンケートの結果と比較すると、どの食事機会でも「0回」が少なくなり、大きな差は見られないものの、回数は多めにシフトしている。平均値で比較しても、やや多めとなっている。

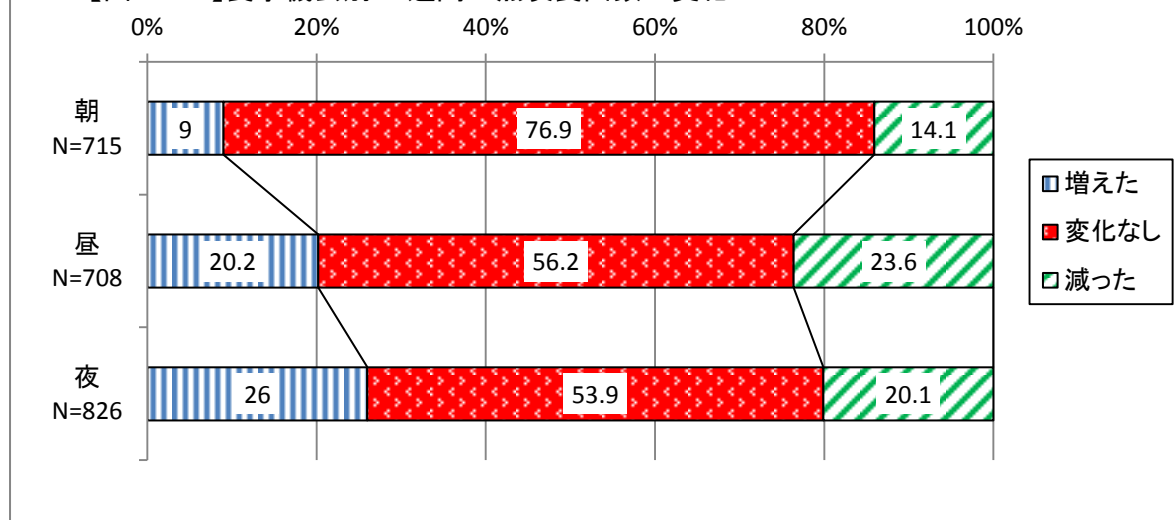
【図P9-2-7】食事機会別：1週間の魚喫食回数(事後との比較)

〈平均〉



- ・事後アンケートに回答した人の事前の回数と比較すると、魚の喫食回数はどの食事機会でも「変化なし」が最も多い。また、朝と昼では「減った」が「増えた」を上回るが、夜だけは、「増えた」が「減った」を上回っている。

【図P9-2-8】食事機会別：1週間の魚喫食回数の変化



■調査結果

1：食事作りに関して、実践していること

- ・下表のAからPのような項目を挙げ、実践しているかどうかを「している」から「まったくしていない」までの5段階評価でたずねた。

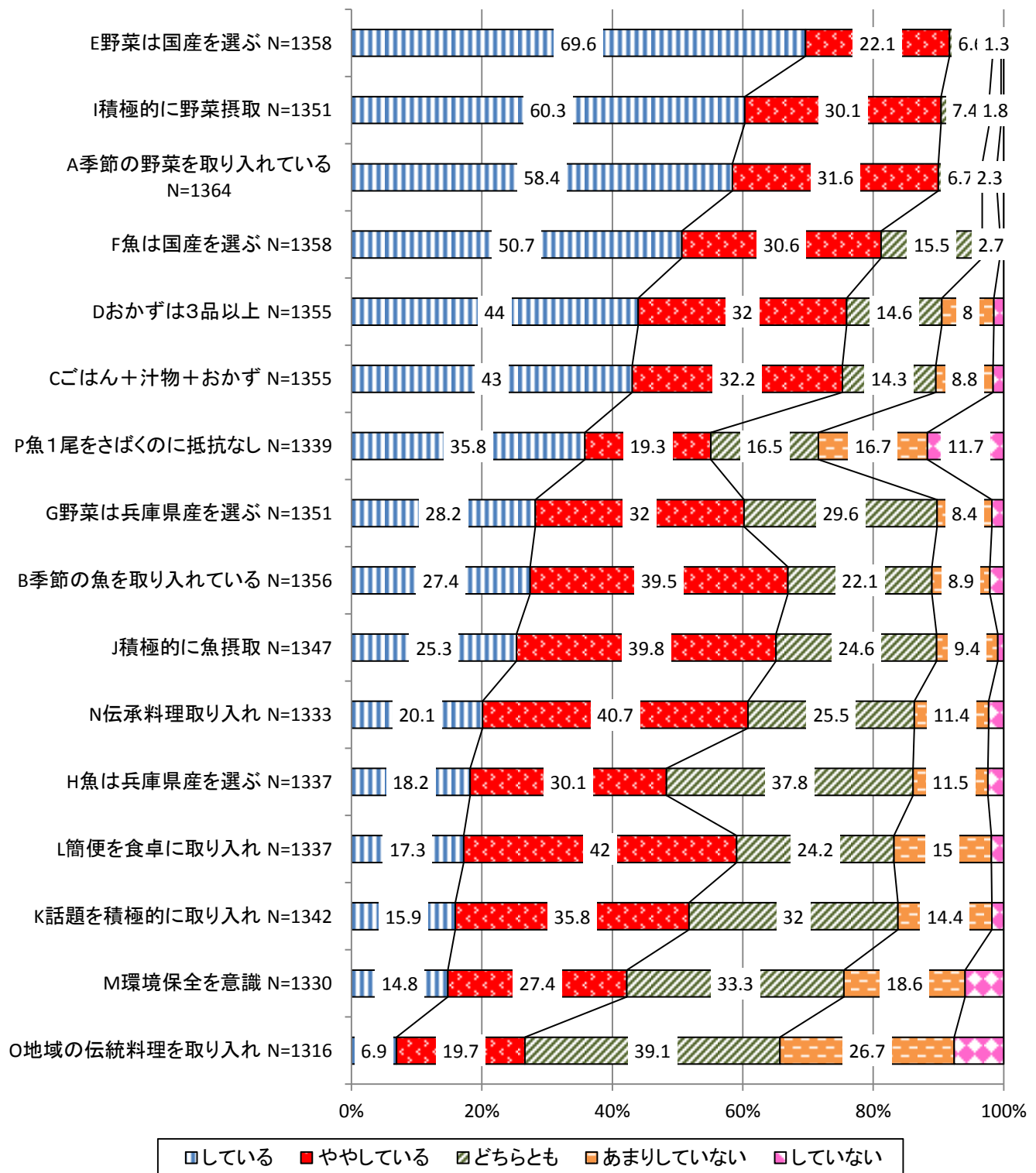
〈全体傾向〉

- ・「している」が最も多かったのは〈E．野菜は、なるべく国産を選ぶようにしている〉で7割弱を占める。〈I．積極的に、野菜を食べるようにしている〉と〈A．夕食には、季節の野菜を取り入れるようにしている〉も「している」が6割前後を占め、「あまりしていない」や「まったくしていない」といった否定意見の合計は、5％にも満たない。
- ・また、〈I．積極的に、野菜を食べるようにしている〉を「している」と回答した人は60.3％であるのに対し、〈J．積極的に、魚を食べるようにしている〉を「している」と回答した人は、25.3％にとどまる。魚と野菜の比較では、このほか〈A〉と〈B〉、〈E〉と〈F〉、〈G〉と〈H〉などがあるが、いずれも野菜関連の方が「している」が多くなっている。
- ・否定意見が比較的多めなのは、〈O．今住んでいる地域の伝統料理を、食卓に取り入れている〉〈P．魚を丸ごと一尾さばくことに、抵抗はない〉の2項目で、否定意見の合計は3割前後となっている。〈O．今住んでいる地域の伝統料理を、食卓に取り入れている〉は、「どちらともいえない」が多数派となっており、意見を決めかねている人も多くみられる。今回たずねた16項目中、否定意見の合計が肯定意見の合計を上回るのは、この項目のみとなっている。
- ・その他、〈H．魚は、なるべく兵庫県産を選ぶようにしている〉〈M．食材を選ぶときに、農林水産業や環境の保全を意識している〉も、「どちらともいえない」が最も多くなっている。

【表 1-1】問 1 の項目

A	夕食には、季節の野菜を取り入れるようにしている
B	夕食には、季節の魚を取り入れるようにしている
C	夕食は、ごはん和汁物におかずを組み合わせることが多い
D	夕食には、おかずを3品以上用意することが多い
E	野菜は、なるべく国産を選ぶようにしている
F	魚は、なるべく国産を選ぶようにしている
G	野菜は、なるべく兵庫県産を選ぶようにしている
H	魚は、なるべく兵庫県産を選ぶようにしている
I	積極的に、野菜を食べるようにしている
J	積極的に、魚を食べるようにしている
K	話題になっている食材やレシピなどを、積極的に取り入れている
L	調理が簡単な食材や惣菜などを、食卓に取り入れている
M	食材を選ぶときに、農林水産業や環境の保全を意識している
N	親から教えてもらった料理を、食卓に取り入れている
O	今住んでいる地域の伝統料理を、食卓に取り入れている
P	魚を丸ごと一尾さばくことに、抵抗はない

【図1-1】食に関して、実践していること

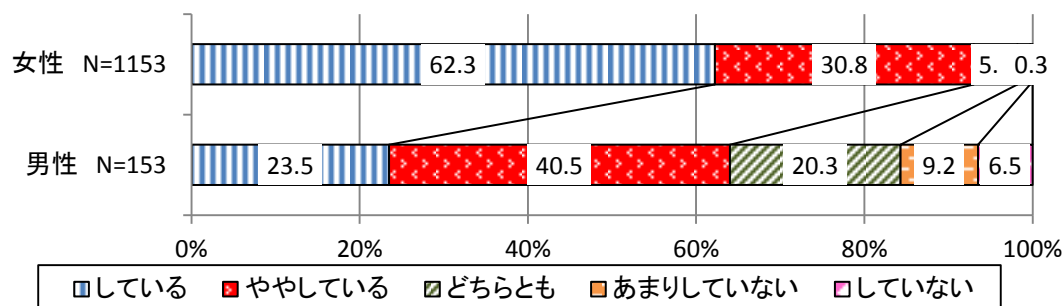


〈男女別〉

- ・〈P. 魚を丸ごと一尾さばくことに、抵抗はない〉以外のすべての項目で男女差がみられる。どの項目も、女性の「している」が男性を大幅に上回り、男性の「あまりしていない」や「まったくしていない」が多くなる傾向がみられる。項目の中には、積極的に魚や野菜を摂り、食材を選ぶのに環境保全などの視点を取り入れ、ごはん+汁物、おかずを組み合わせるといった日本型食生活の基礎となる項目も含まれている。今後、男性に向けた食育の必要性が垣間見える。

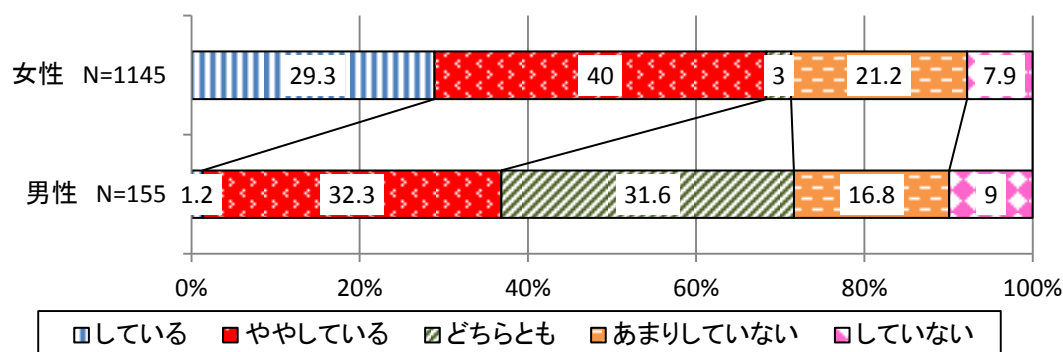
【図1-A-1】男女別：夕食には、季節の野菜を取り入れるようにしている

$P \leq 0.000$



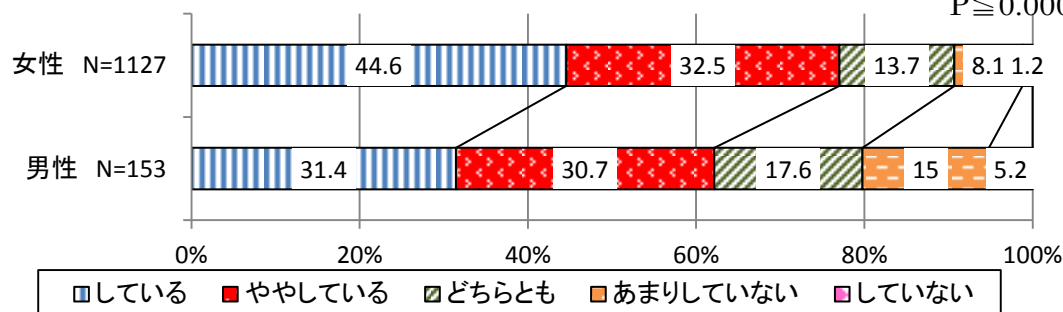
【図1-B-1】男女別：夕食には、季節の魚を取り入れるようにしている

$P \leq 0.000$



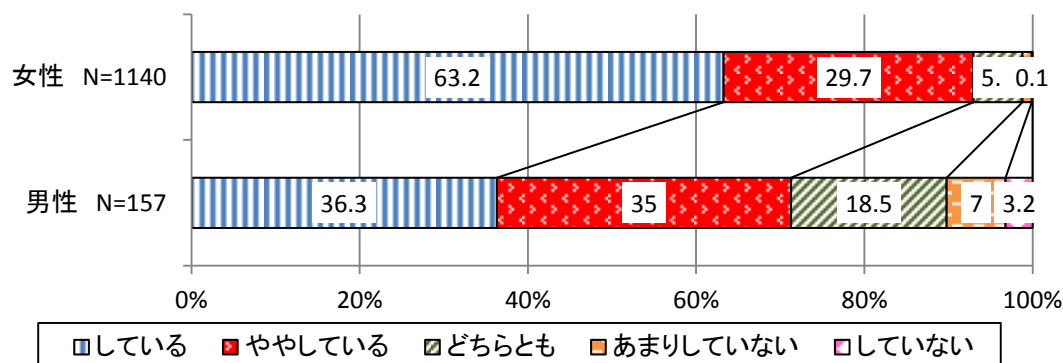
【図1-C-1】男女別：夕食には、ごはん和汁物におかずを組み合わせることが多い

$P \leq 0.000$



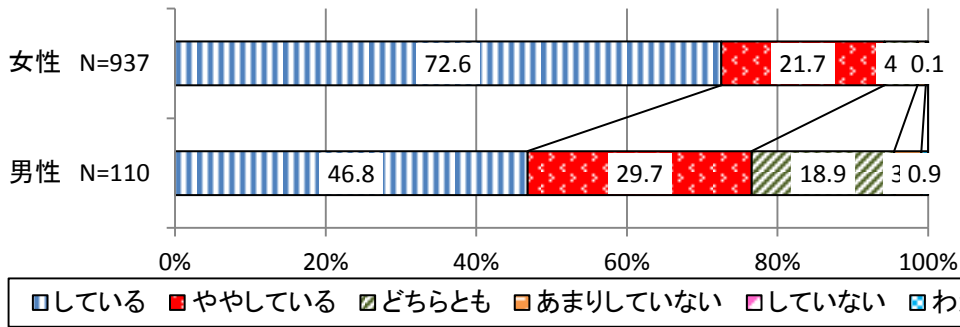
【図1-D-1】男女別：夕食にはおかずを3品以上用意することが多い

$P \leq 0.000$



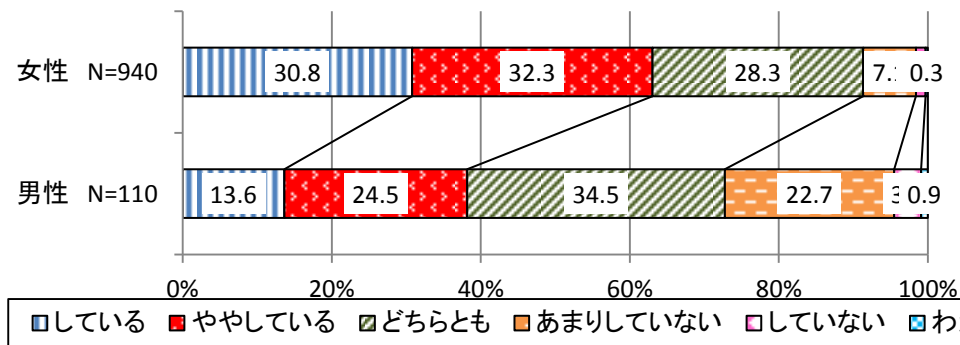
【図1-E-3】男女別：野菜は、なるべく国産を選ぶようにしている

$P \leq 0.000$



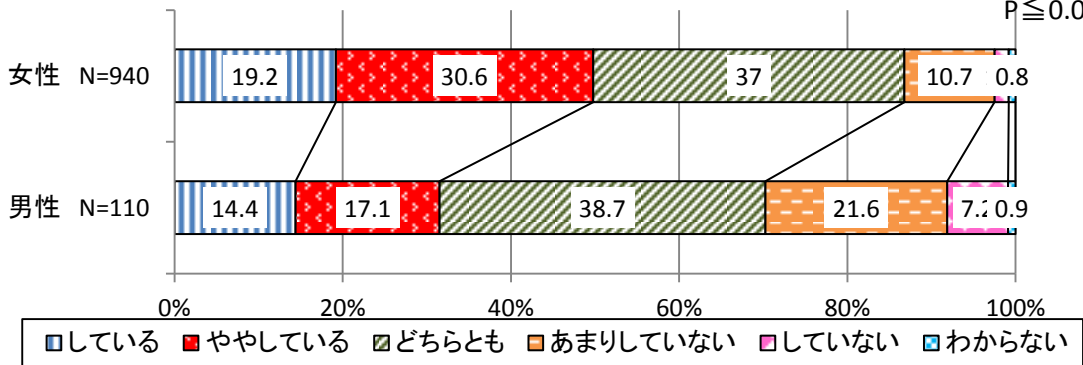
【図1-G-3】男女別：野菜は、なるべく兵庫県産を選ぶようにしている

$P \leq 0.000$



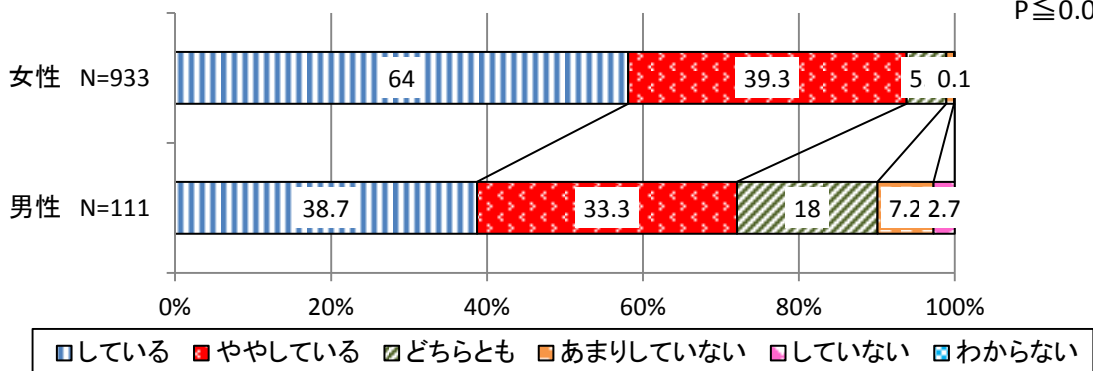
【図1-H-3】男女別：魚は、なるべく兵庫県産を選ぶようにしている

$P \leq 0.000$



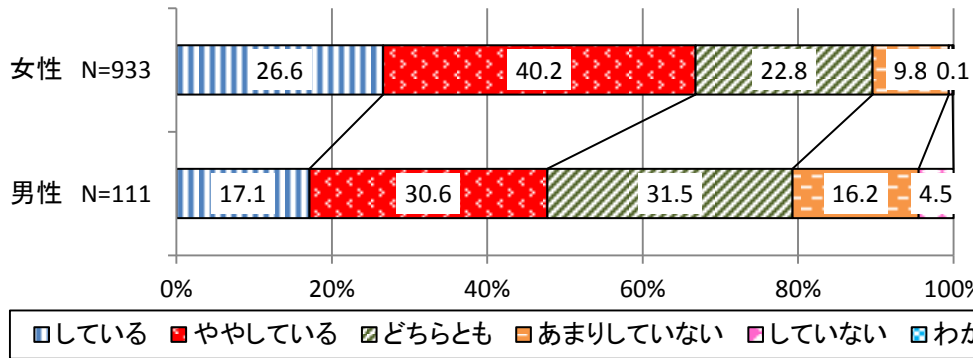
【図1-I-3】男女別：積極的に野菜を食べるようにしている

$P \leq 0.000$



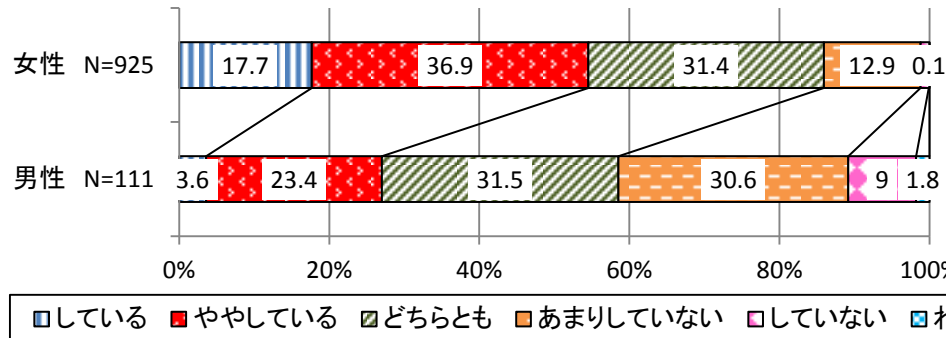
【図1-J-3】男女別：積極的に魚を食べるようにしている

$P \leq 0.000$



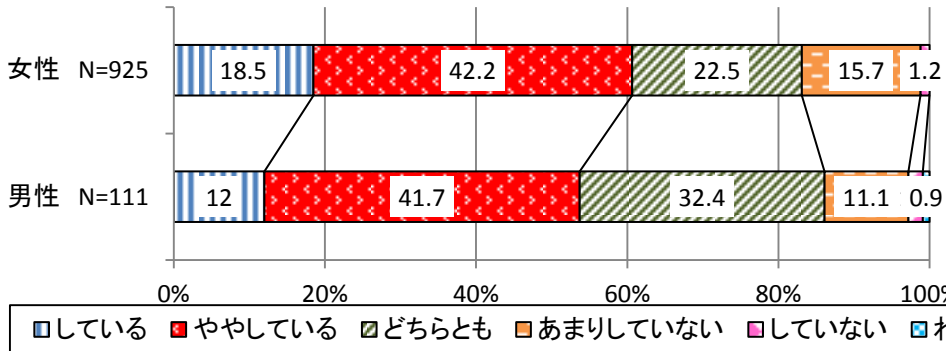
【図1-K-3】男女別：話題になっている食材やレシピなどを、積極的に取り入れてい

$P \leq 0.000$



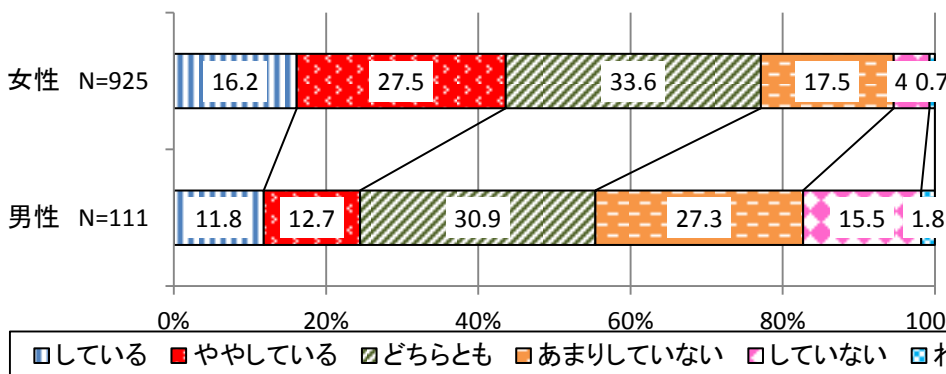
【図1-L-3】男女別：調理が簡単な食材や総菜などを、食卓に取り入れている

$P \leq 0.005$



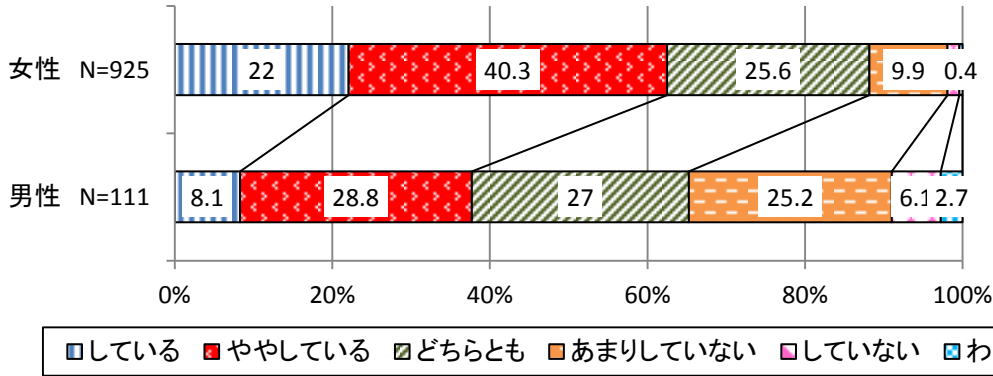
【図1-M-3】男女別：食材を選ぶときに、農林水産業や環境の保全を意識している

$P \leq 0.000$



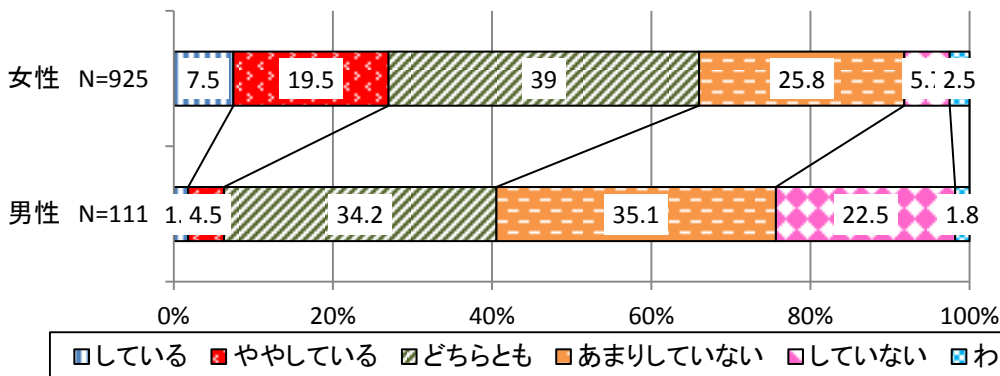
【図1-N-3】男女別：親から教えてもらった料理を、食卓に取り入れている

$P \leq 0.000$



【図1-O-3】男女別：今住んでいる地域の伝統料理を、食卓に取り入れている

$P \leq 0.000$

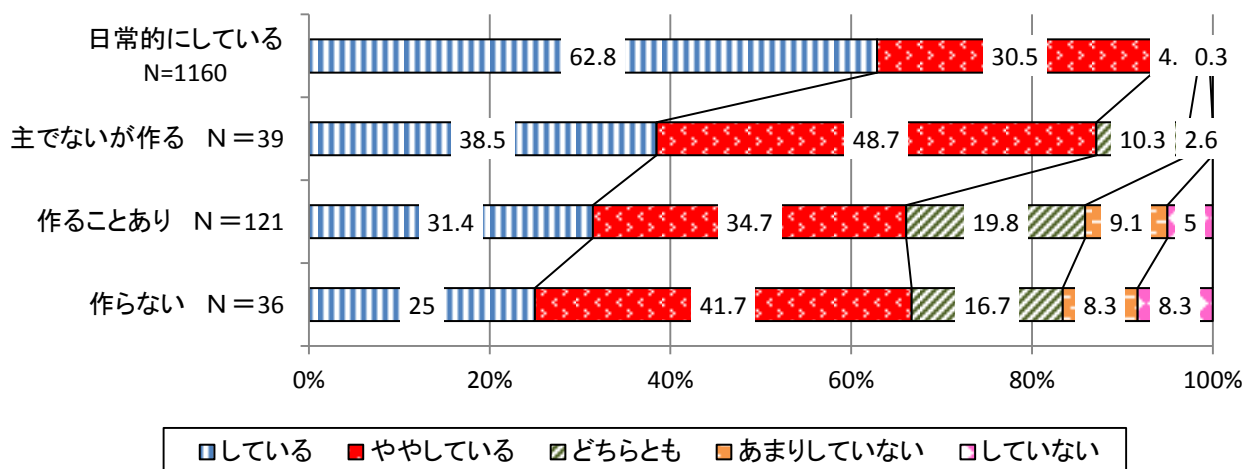


〈食事作り別〉

- ・〈C. 夕食は、ごはんと汁物におかずを組み合わせることが多い〉と〈P. 魚を丸ごと一尾さばくことに、抵抗はない〉以外のすべての項目で有意差がみられる。どの項目も、食事作りに深く関与している人ほど「している」が多くなる傾向がみられる。

【図1-A-2】食事作り別：夕食には、季節の野菜を取り入れるようにしている

$P \leq 0.000$

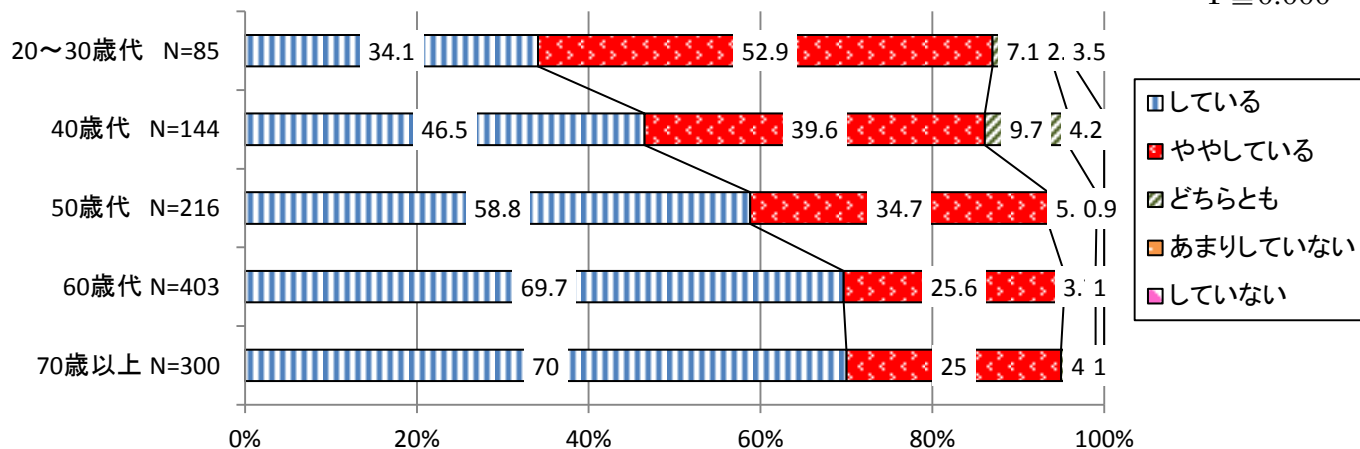


〈年齢層別〉（女性のみ）

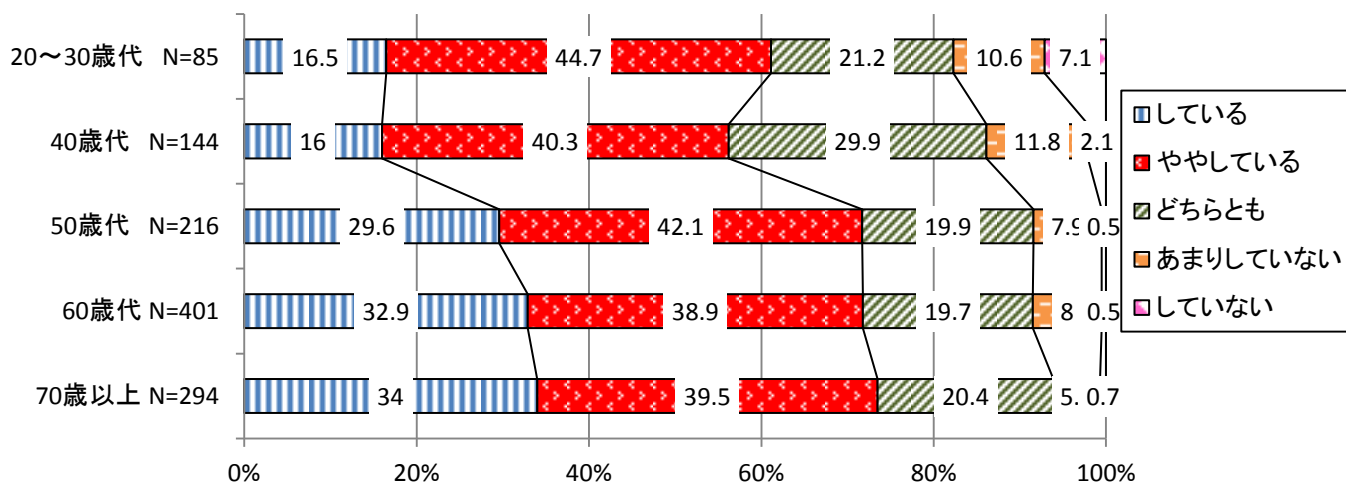
- ・女性を年齢層別にみると、〈C. 夕食は、ごはんと汁物におかずを組み合わせることが多い〉と〈L. 調理が簡単な食材や惣菜などを、食卓に取り入れている〉〈N. 親から教えてもらった料理を、食卓に取り入れている〉の3項目以外で有意差がみられる。いずれの項目も、年齢層が高くなるほど「している」が多くなる傾向がみられる。

【図1-A-3】年齢層別：夕食には、季節の野菜を取り入れるようにしている

$P \leq 0.000$

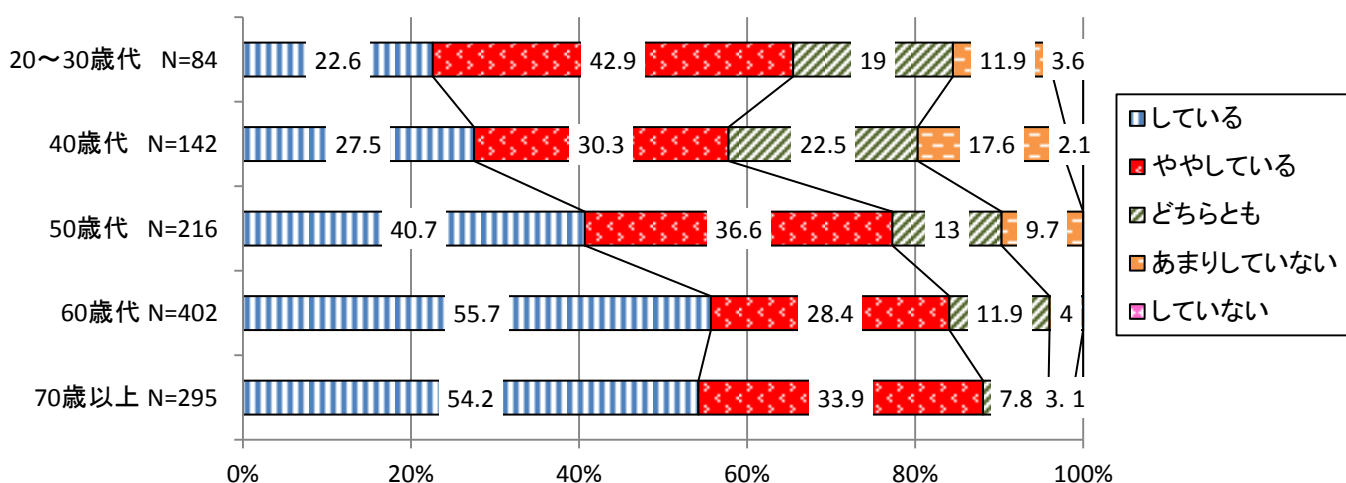


【図1-B-3】年齢層別：夕食には、季節の魚を取り入れるようにしている



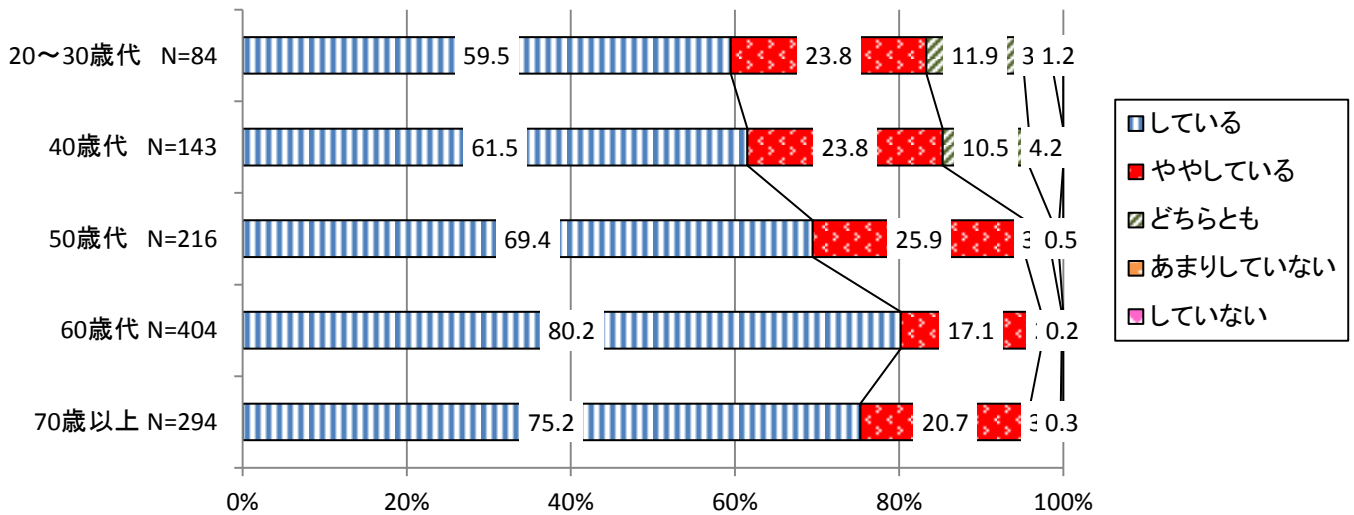
【図1-D-3】年齢層別：夕食には、おかずを3品以上

$P \leq 0.000$



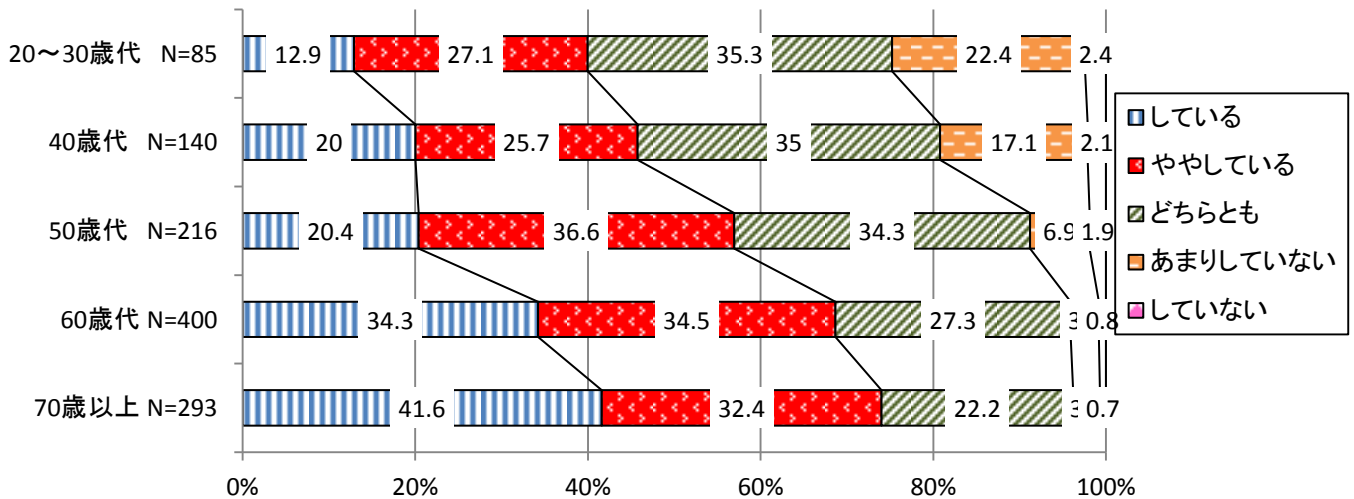
【図1-E-3】年齢層別：野菜は国産

$P \leq 0.000$



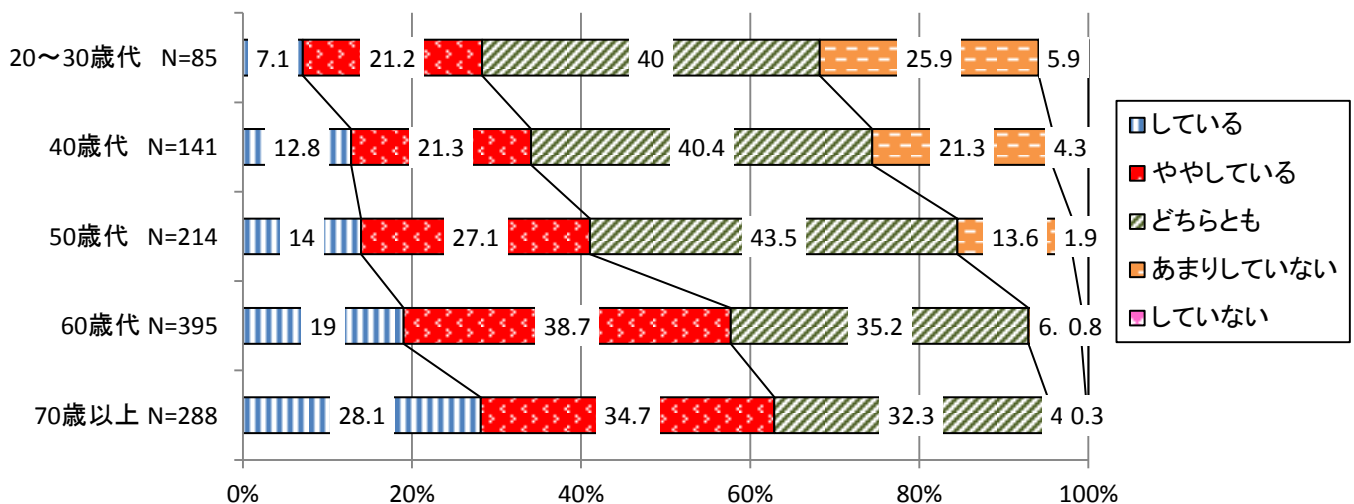
【図1-G-3】年齢層別：野菜は兵庫県産

$P \leq 0.000$



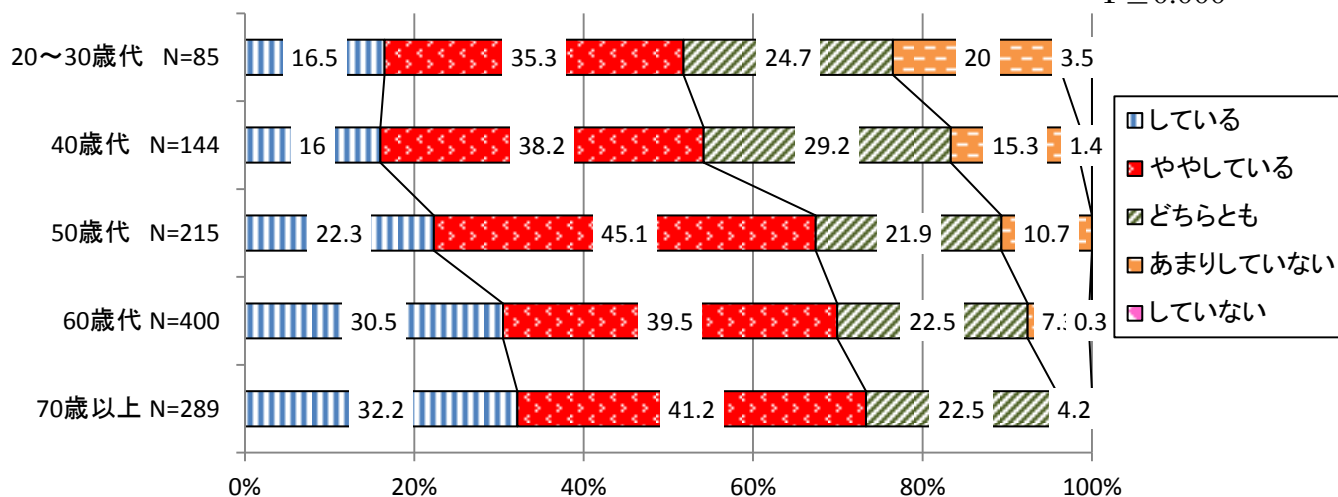
【図1-H-3】年齢層別：魚は兵庫県産

$P \leq 0.000$



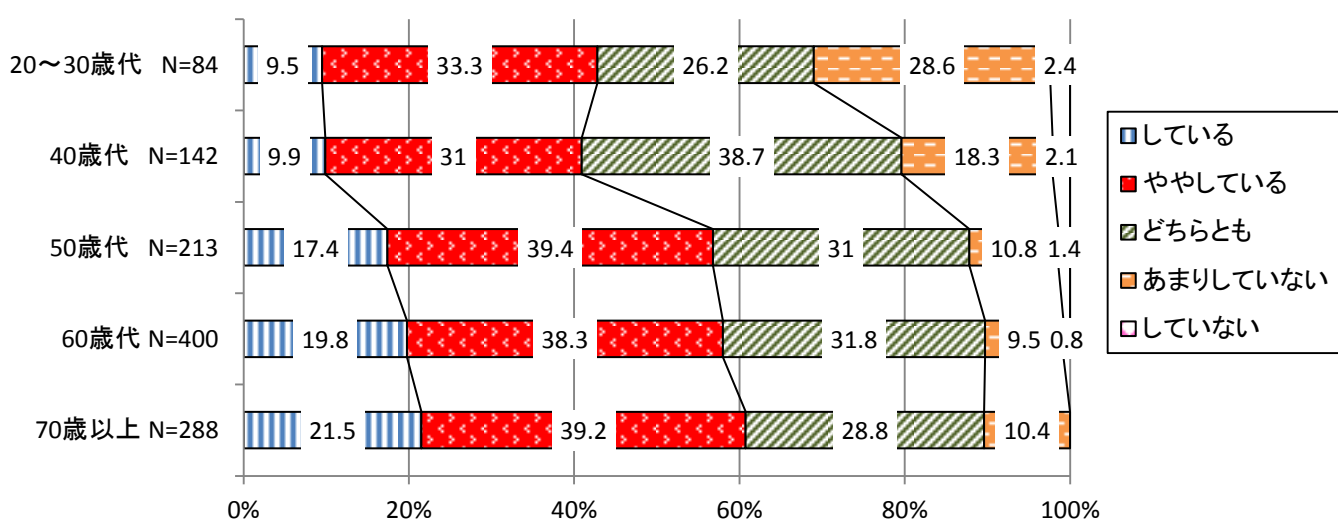
【図1-J-3】年齢層別：積極的に魚摂取

$P \leq 0.000$



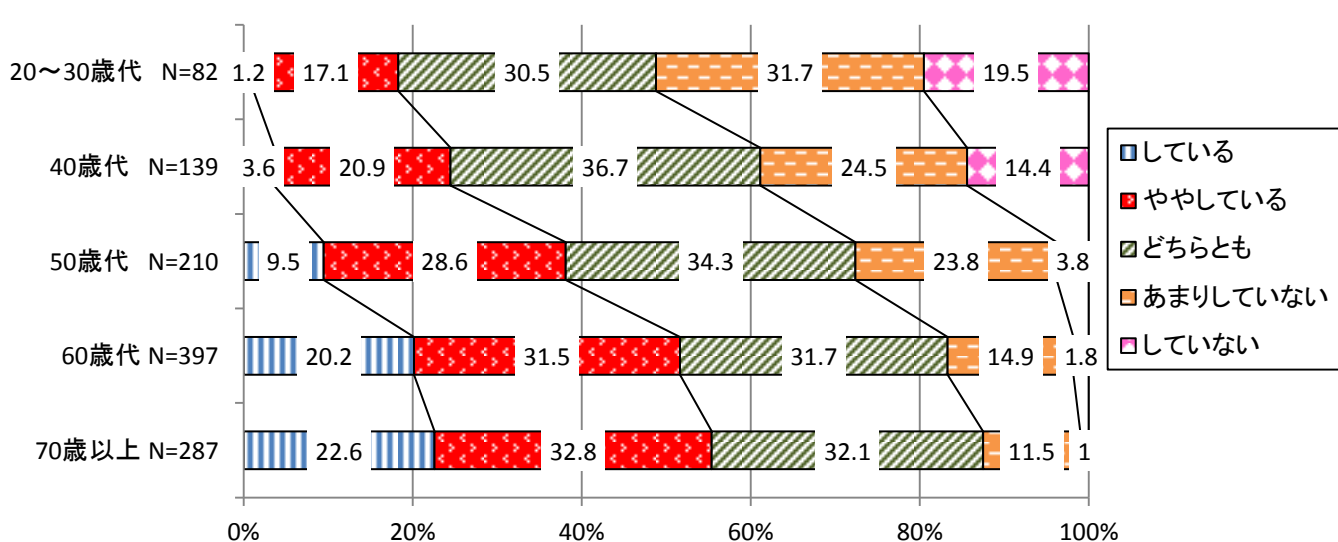
【図1-K-3】年齢層別：積極的に話題のレシピ取り入れ

$P \leq 0.000$



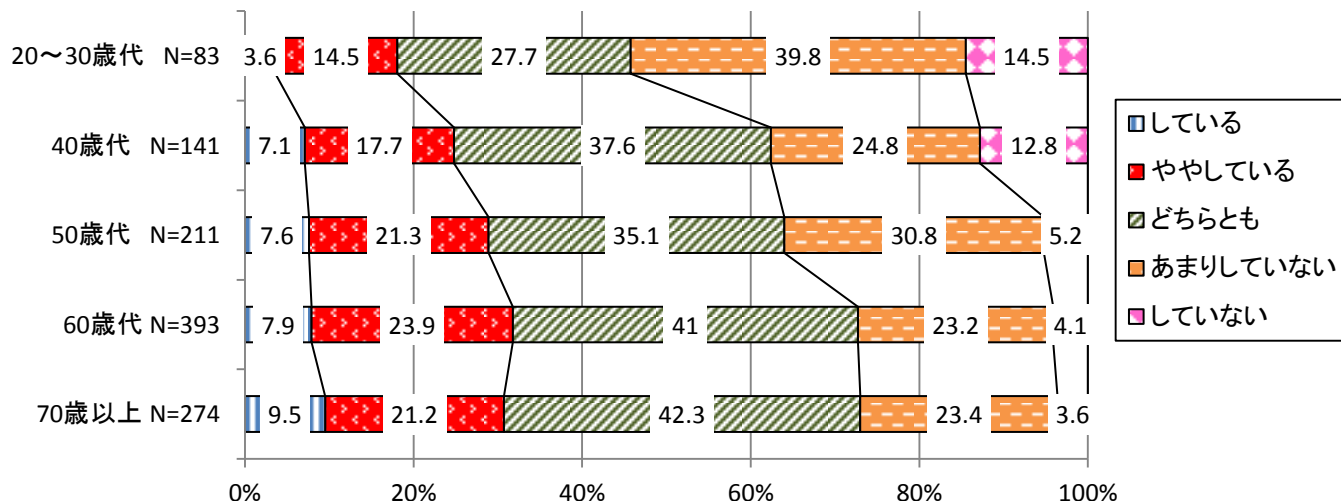
【図1-M-3】年齢層別：食材を選ぶときに、環境保全を意識

$P \leq 0.000$



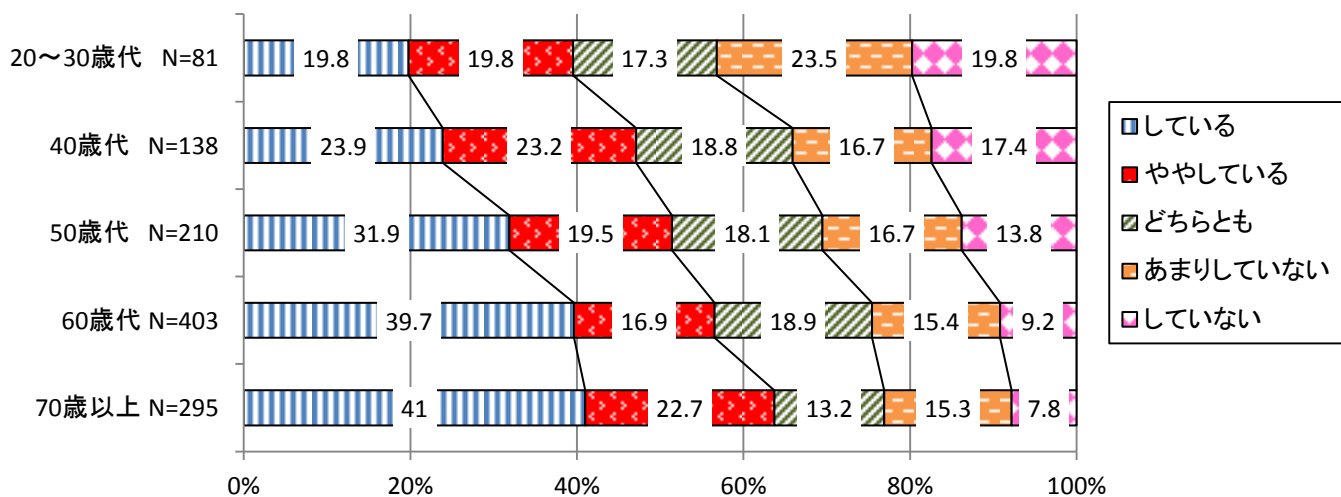
【図1-O-3】年齢層別：地域の伝統料理を食卓に取り入れ

$P \leq 0.000$



【図1-P-3】年齢層別：魚を1尾丸ごとさばく

$P \leq 0.000$

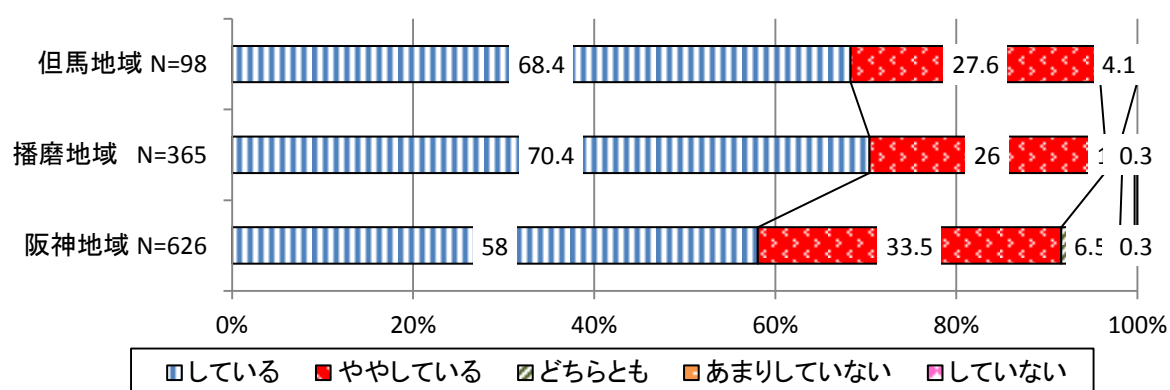


〈地域別〉

- ・地域別にみると、〈A. 夕食には、季節の野菜を取り入れるようにしている〉のみ有意差がみられる。阪神地域よりも、播磨地域、但馬地域といった野菜の生産地で、「している」が多くなっている。

【図1-A-4】地域別：夕食には、季節の野菜を取り入れるようにしている

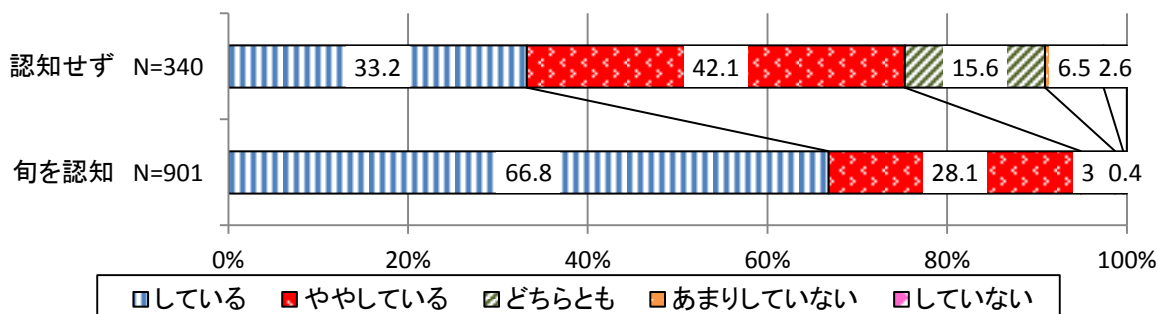
$P \leq 0.005$



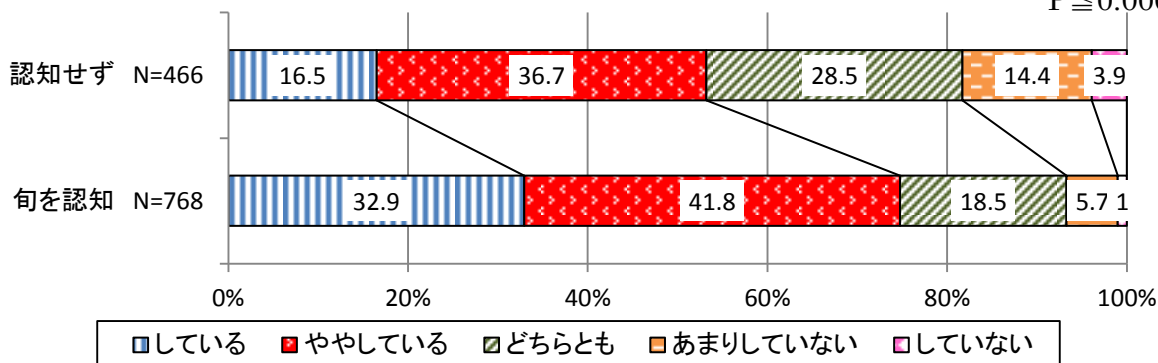
〈旬の認知別〉

- 念のため、後に出てくる兵庫県産の野菜の旬の認知、魚の旬の認知別に関連項目（季節のものを選ぶ、国産を選ぶ、兵庫県産を選ぶ、積極的に取り入れる）をみると、旬を認知しているの方が、食卓に旬のものをとりいれたり、国産や兵庫県産の素材を選択し、積極的に摂取しようとしている様子が見える。

【図1-A-5】野菜の旬の認知別：夕食には、季節の野菜を取り入れるようにしている $P \leq 0.000$



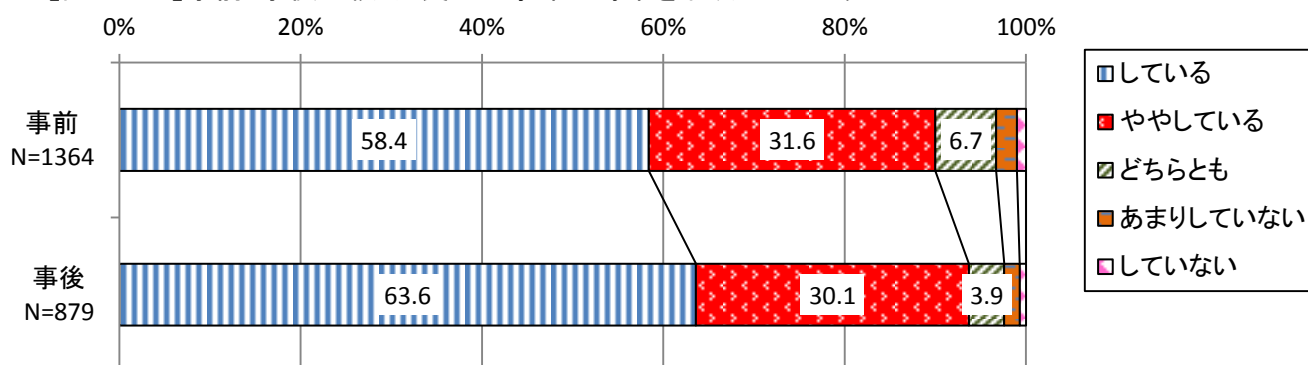
【図1-B-20】魚の旬の認知別：夕食には、季節の魚を取り入れるようにしている $P \leq 0.000$



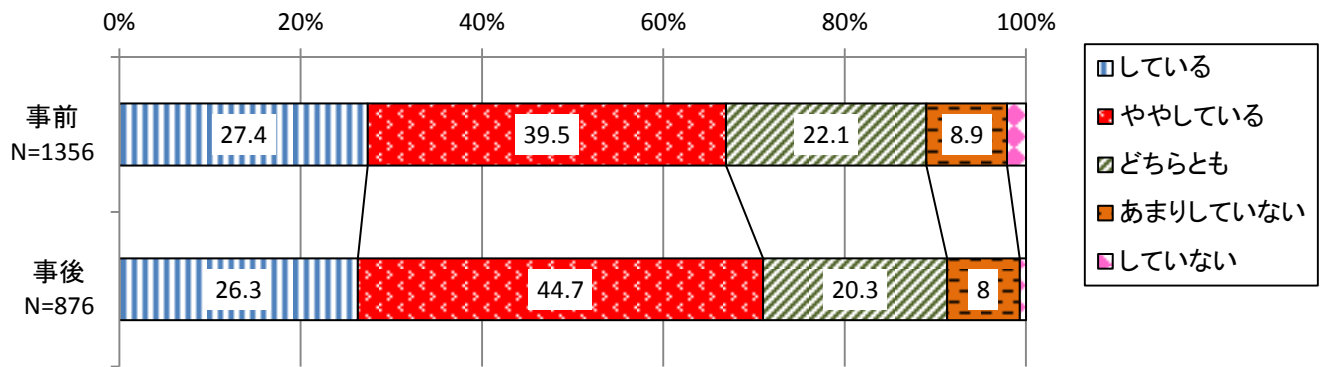
〈事後アンケートとの比較〉

- 事後アンケートと比較すると、〈L. 調理が簡単な食材や惣菜などを、食卓に取り入れている〉以外の 15 項目で、「している」と「ややしている」の合計が事前調査よりも高くなる傾向が見られる。しかし、1 か月という時間のせい、さして大きな変化は見られない。

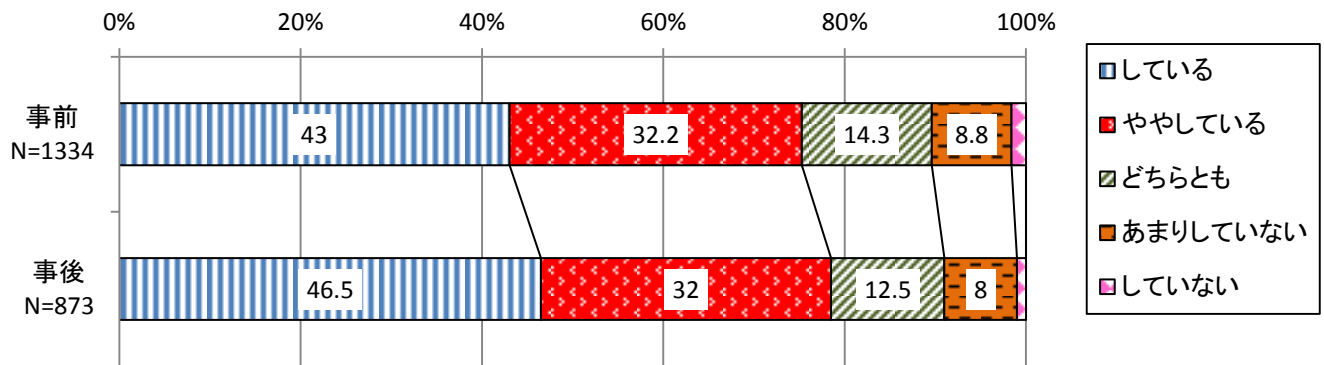
【図1-A-11】事前・事後比較：夕食には季節の野菜を取り入れるようにしている



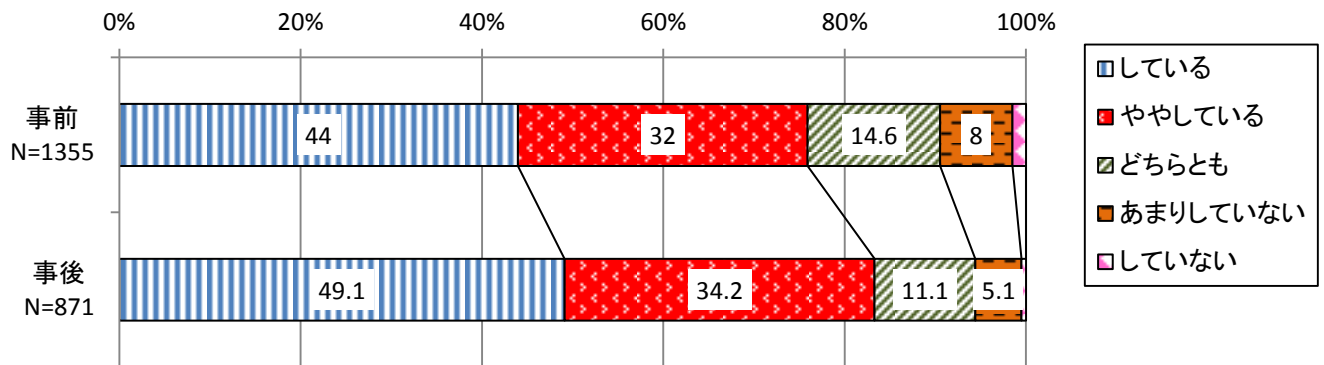
【図1-B-11】事前・事後比較：夕食には季節の魚取り入れるようにしている



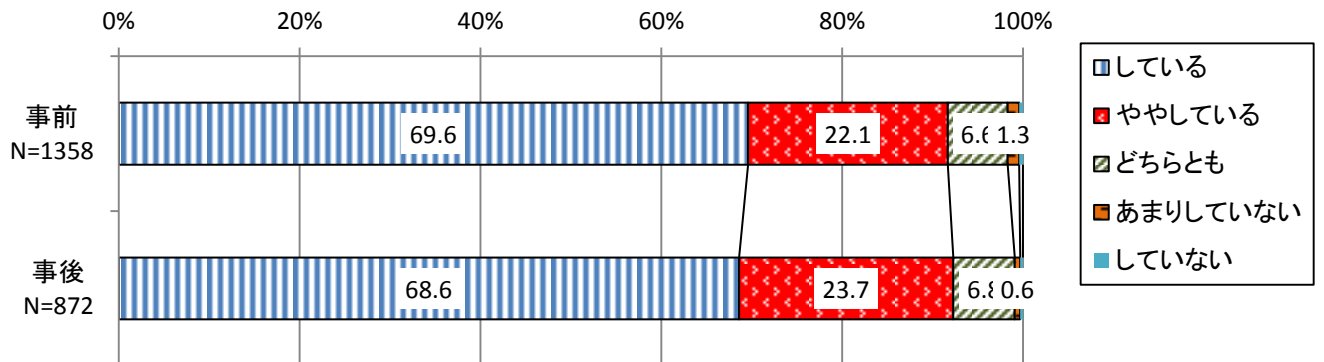
【図1-C-11】事前・事後比較：夕食にはごはん+汁物+おかずを取り入れるようにしている



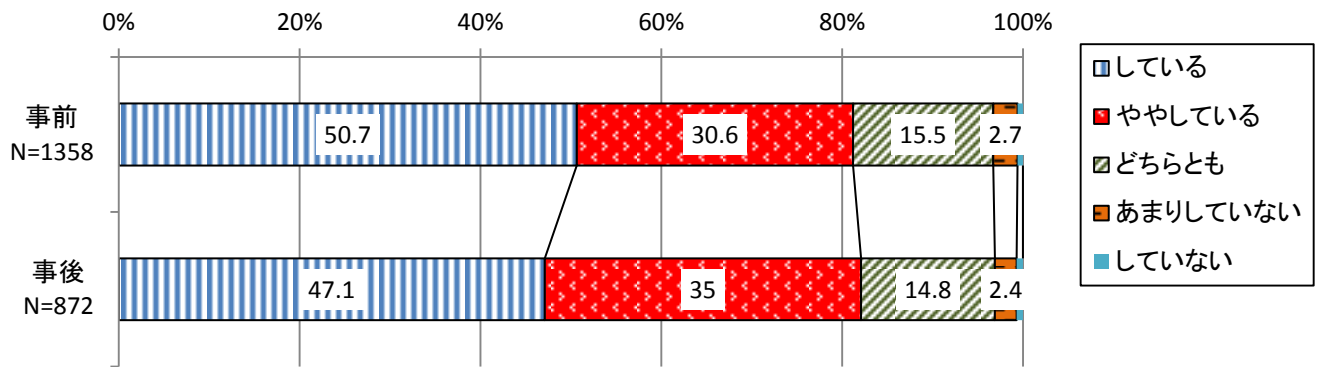
【図1-D-11】事前・事後比較：夕食にはおかずを3品以上



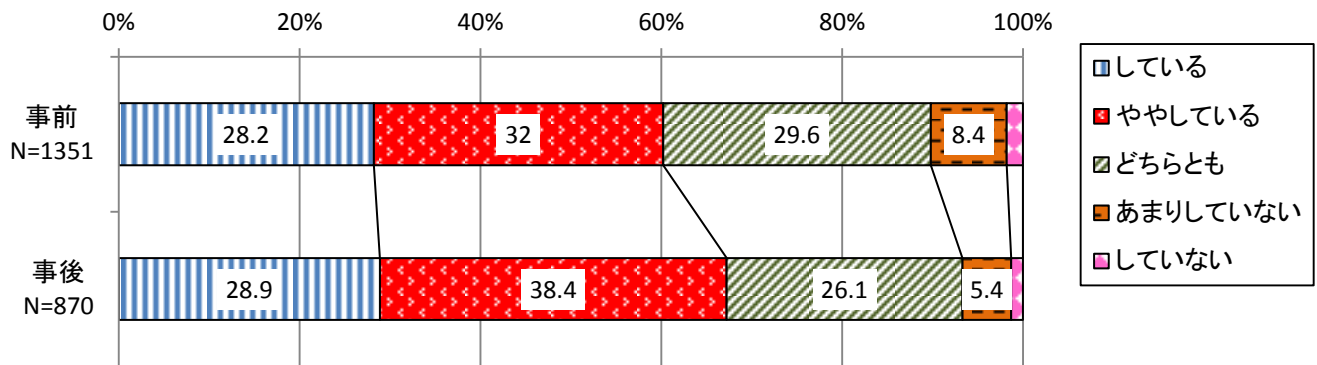
【図1-E-11】事前・事後比較：野菜は国産を選ぶ



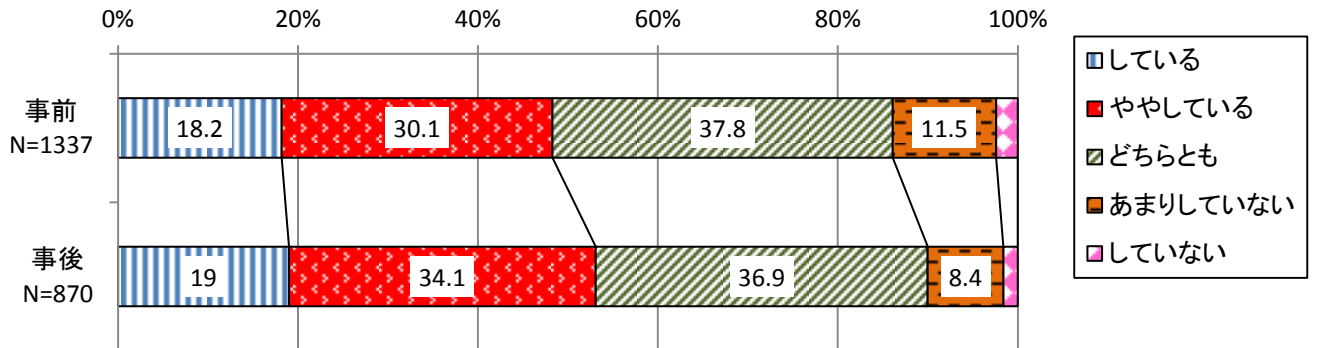
【図1-F-11】事前・事後比較：魚は国産を選ぶ



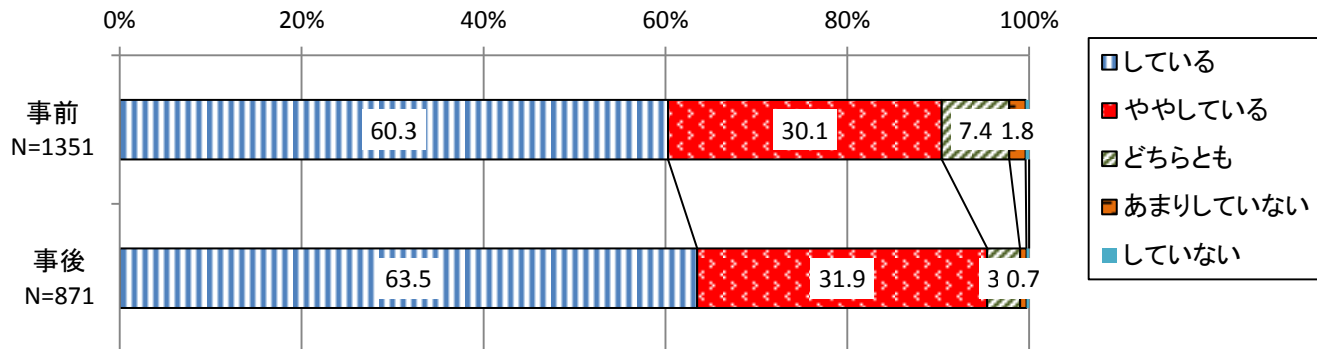
【図1-G-11】事前・事後比較：野菜は兵庫県産を選ぶ



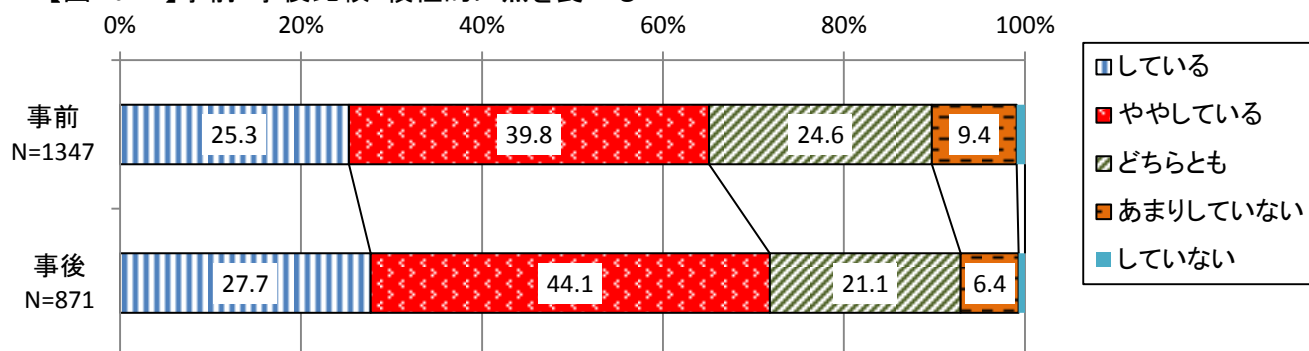
【図1-H-11】事前・事後比較：魚は兵庫県産を選ぶ



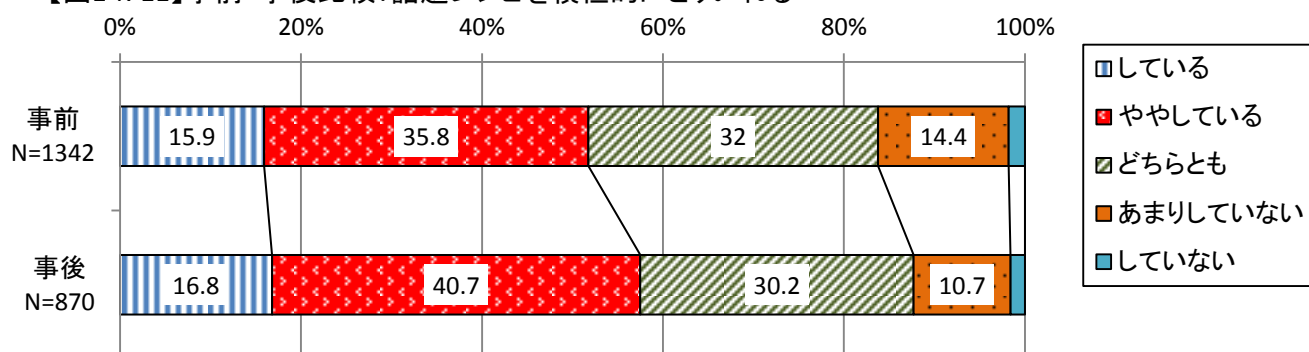
【図1-I-11】事前・事後比較：積極的に野菜を食べる



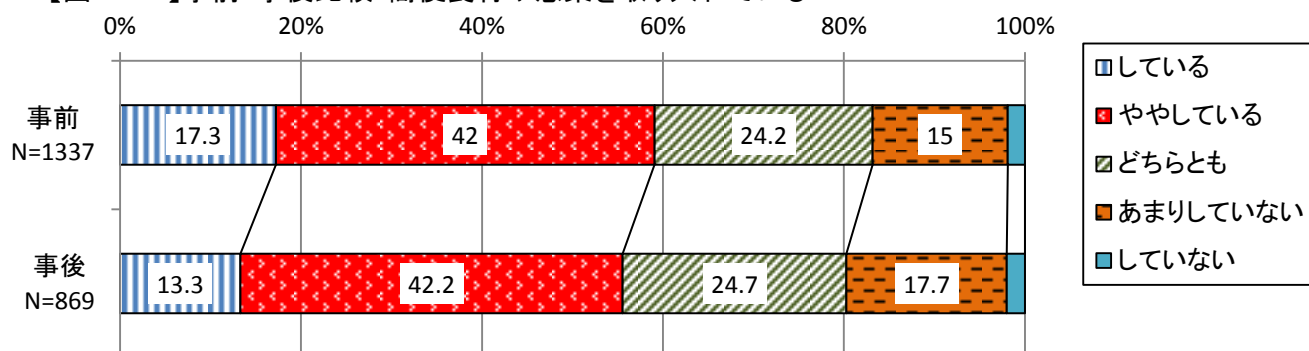
【図1-J-11】事前・事後比較：積極的に魚を食べる



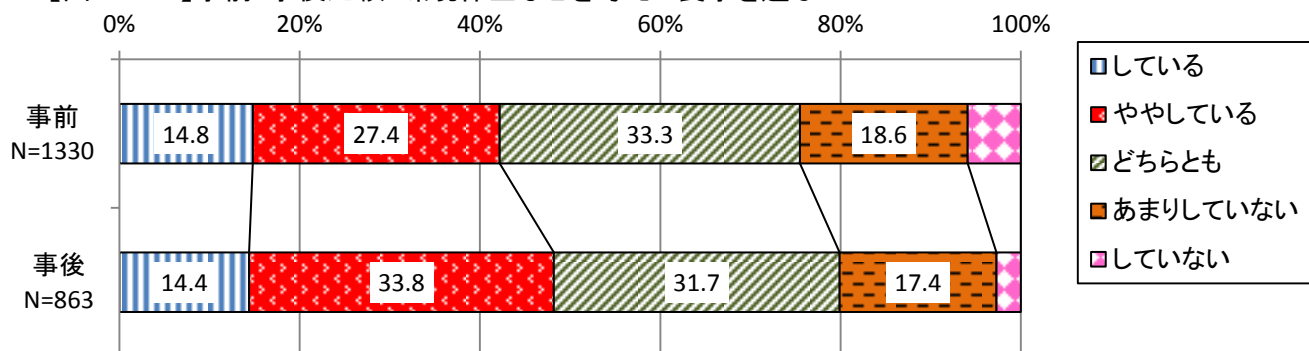
【図1-K-11】事前・事後比較：話題レシピを積極的にとりいれる



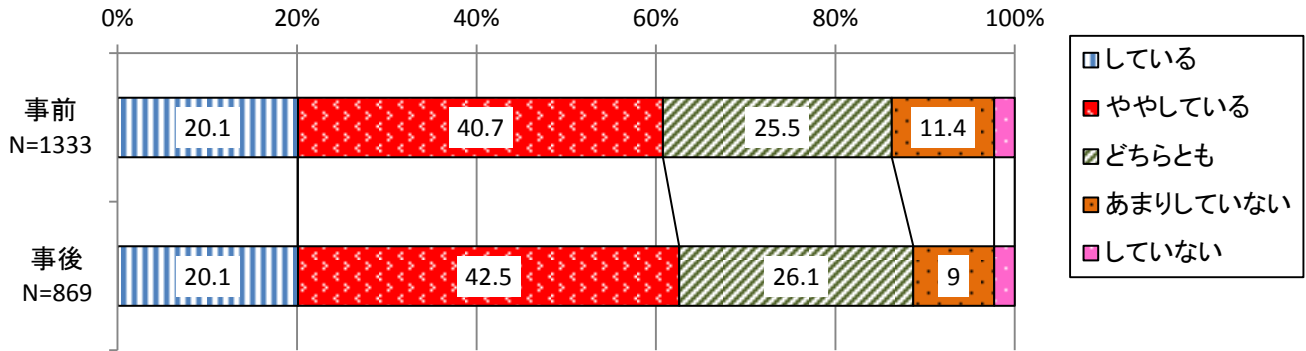
【図1-L-11】事前・事後比較：簡便食材や惣菜を取り入れている



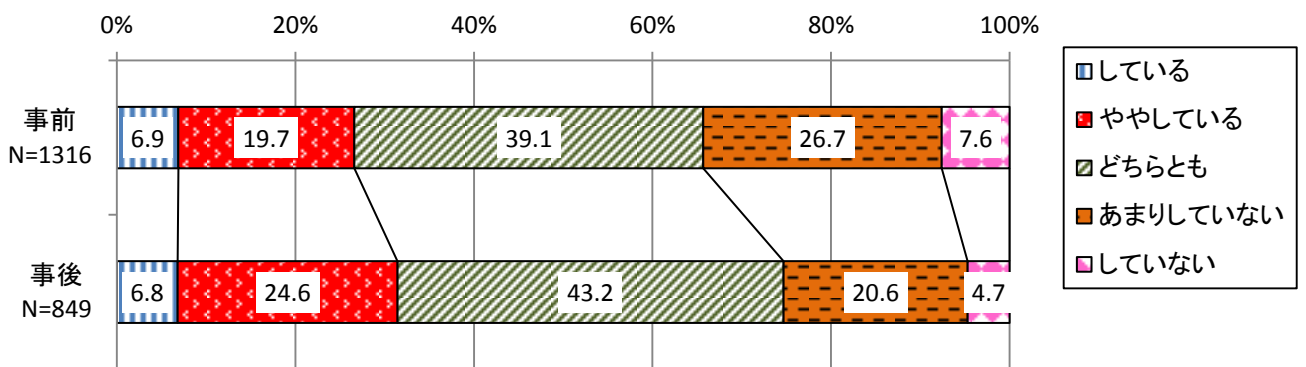
【図1-M-11】事前・事後比較：環境保全などを考えて食事を選ぶ



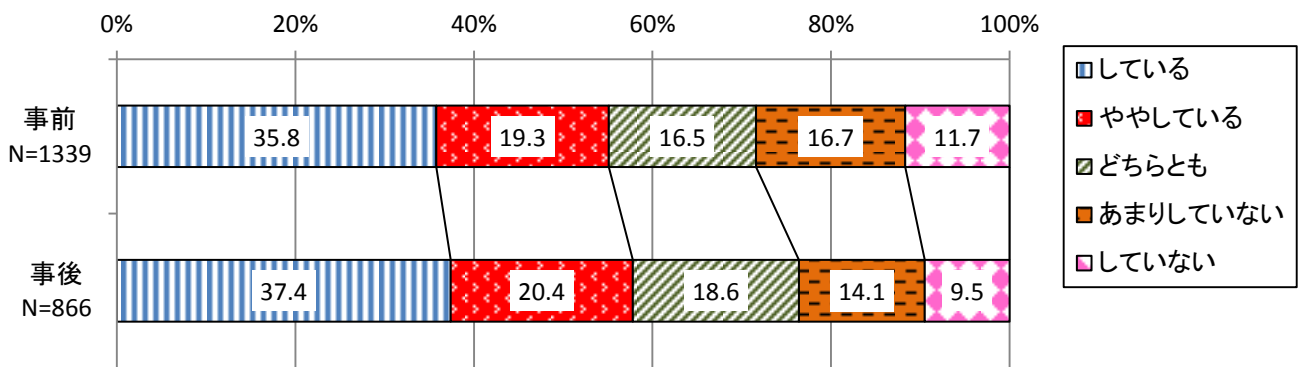
【図1-N-11】事前・事後比較：親から教わった料理を食卓に取り入れる



【図1-O-11】事前・事後比較：地域の伝統料理を食卓に取り入れる

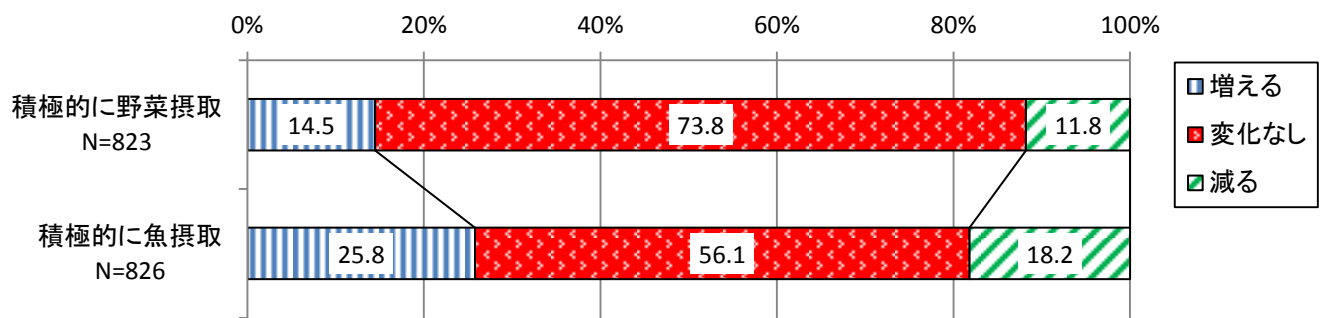


【図1-P-11】事前・事後比較：魚を丸ごと1尾さばく



- ・事前と事後とでどれだけの増減があったかを確認する。（「していない」→「あまりしていない」、「あまりしていない」→「どちらともいえない」、「どちらともいえない」→「ややしている」、「ややしている」→「している」を増加、「している」→「ややしている」などを減少としてカウント）〈積極的に野菜を食べるようにしている〉を1か月前より積極的に実施している人は14.5%、以前より消極的になり、減ってしまった人は11.8%となっている。野菜に関しては事前アンケートで積極的に野菜を摂取している人が60.3%と多かったこと、「変化なし」の中には、もともと「している」で現在も「している」人が54.3%含まれていることには、留意が必要である。
- ・魚に関しては、増加が25.8%みられ、減ったとする人(18.2%)を上回っている。魚に関しては、事前アンケートでは「している」は25.3%で、事後でも「している」とした人（「している」→「している」=変化なし）が17.1%みられるが、それでも積極的に魚を摂取している人は、野菜と比較すると少なくなっている。

【図1-2】事前・事後比較：現状の増減



2：食に関する意識

・下表のような項目を挙げ、食に関する意識を「そう思う」から「全く思わない」までの5段階評価でたずねた。

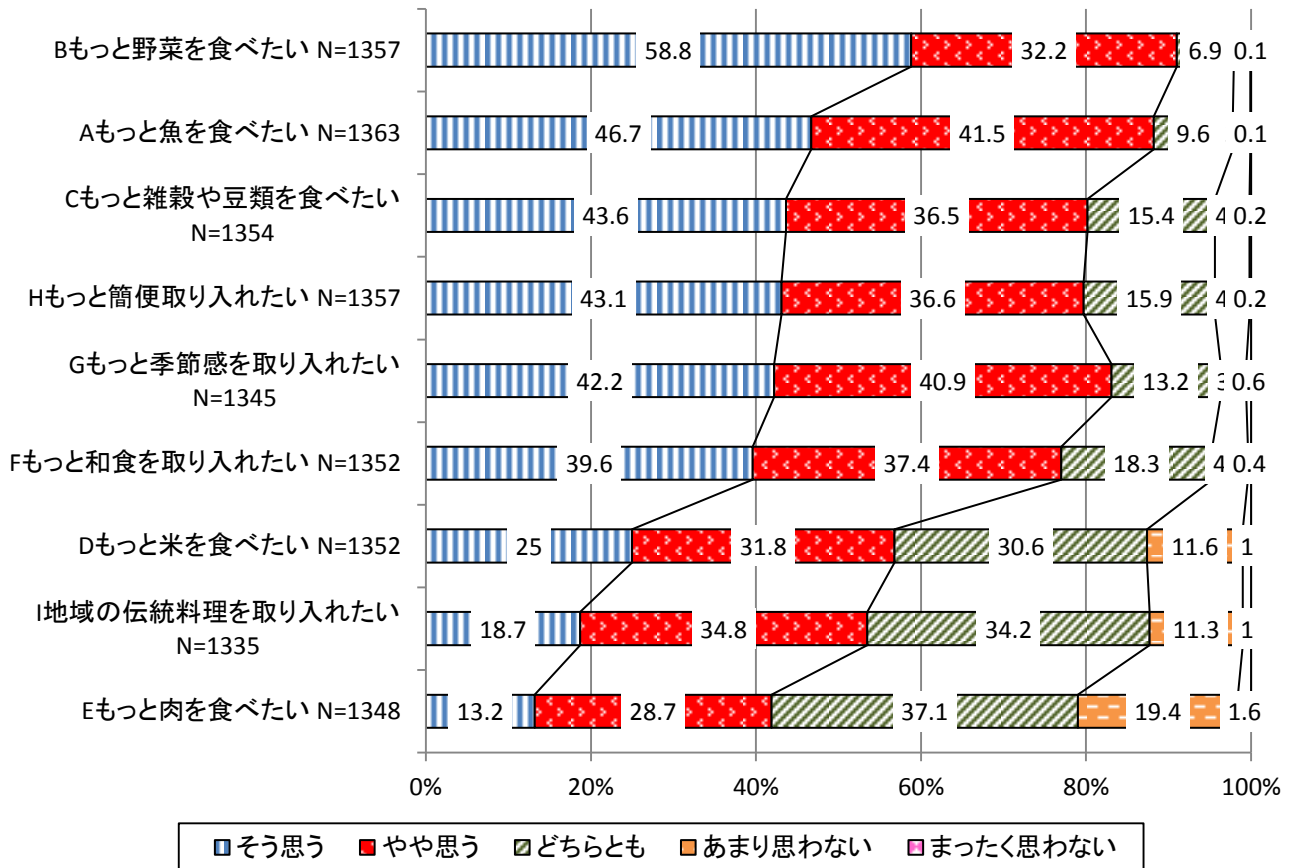
【表 2-1】 問 2 の項目

A	もっと魚を食べたい
B	もっと野菜を食べたい
C	もっと雑穀や豆類を食べたい
D	もっと米を食べたい
E	もっと肉を食べたい
F	もっと和食を取り入れたい
G	もっと食卓に季節感を取り入れたい
H	もっと簡単にできるレシピを取り入れたい
I	今住んでいる地域の、伝統料理を取り入れたい

〈全体傾向〉

- ・「そう思う」が最も多かったのは〈B. もっと野菜を食べたい〉で、6割近い人が「そう思う」と回答しており、「あまり思わない」と「全く思わない」の合計は、2%にとどまる。〈A. もっと魚を食べたい〉も、「そう思う」は半数弱で、「あまり思わない」と「全く思わない」の合計は、2%程度となっている。
- ・「あまり思わない」と「全く思わない」の合計が最も多いのは、〈E. もっと肉を食べたい〉で、この項目では「どちらともいえない」が多数派となっている。〈D. もっと米を食べたい〉と〈I. 今住んでいる地域の、伝統料理を取り入れたい〉も、「そう思う」と「ややそう思う」の合計が半数前後と、他の項目より少なくなっている。

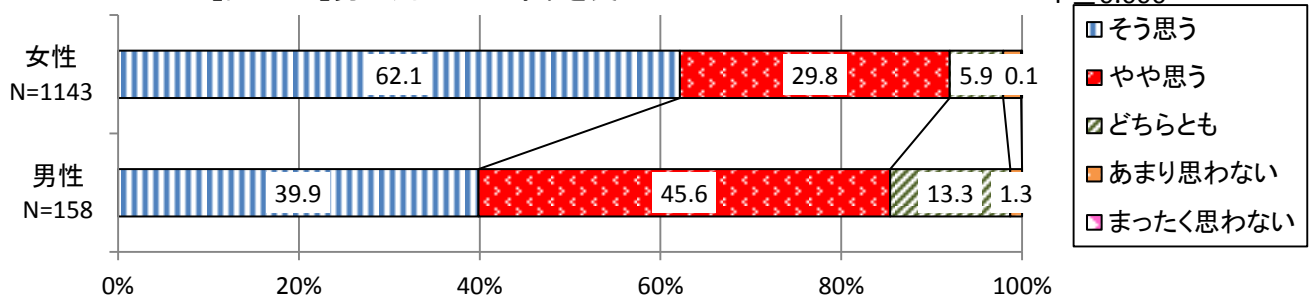
【図2-1】食に関する意識



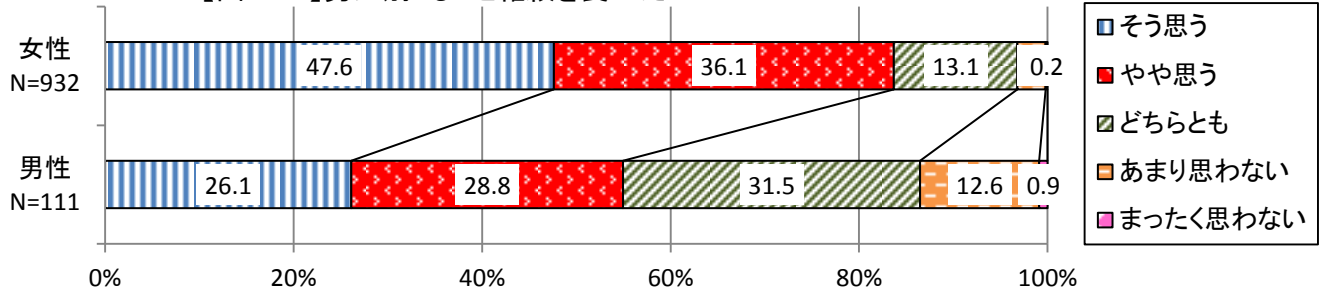
〈男女別〉

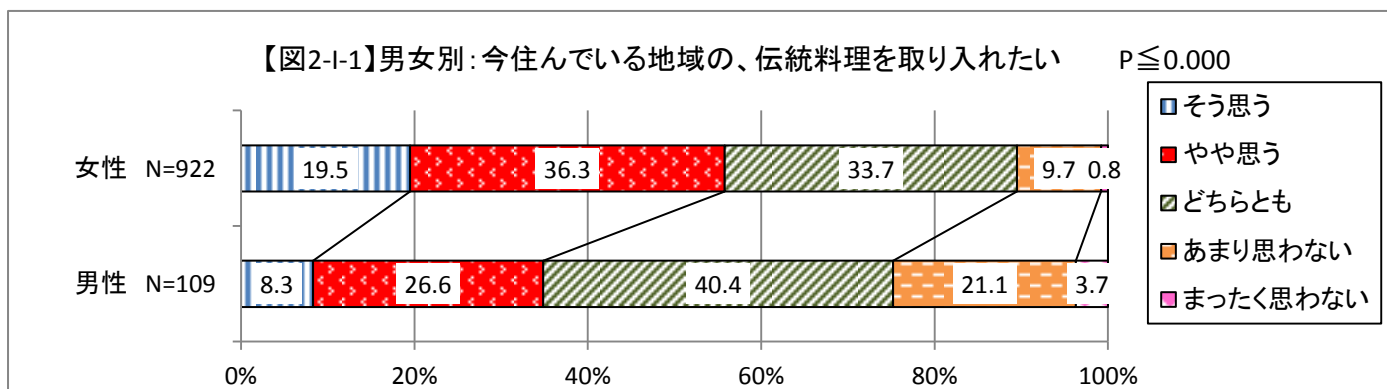
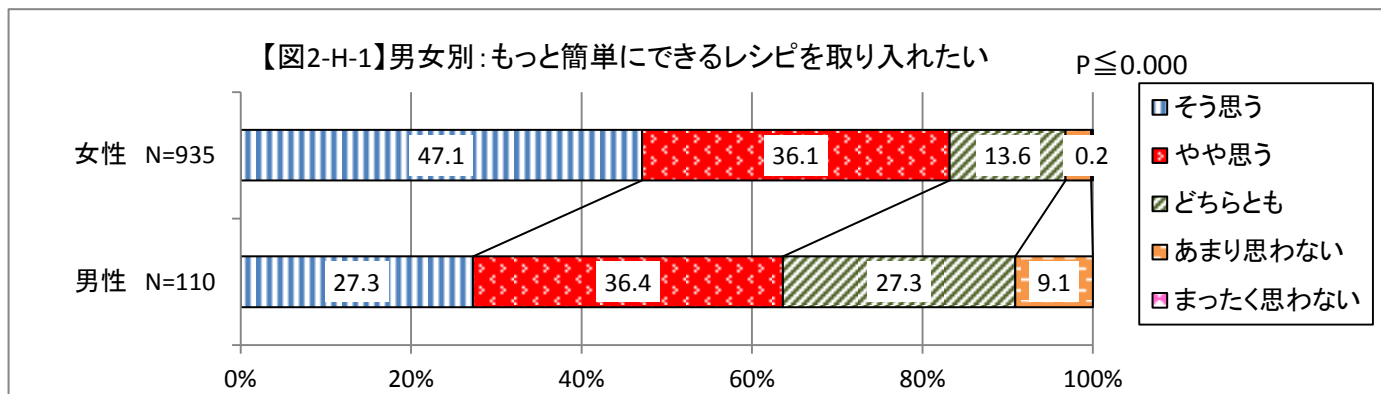
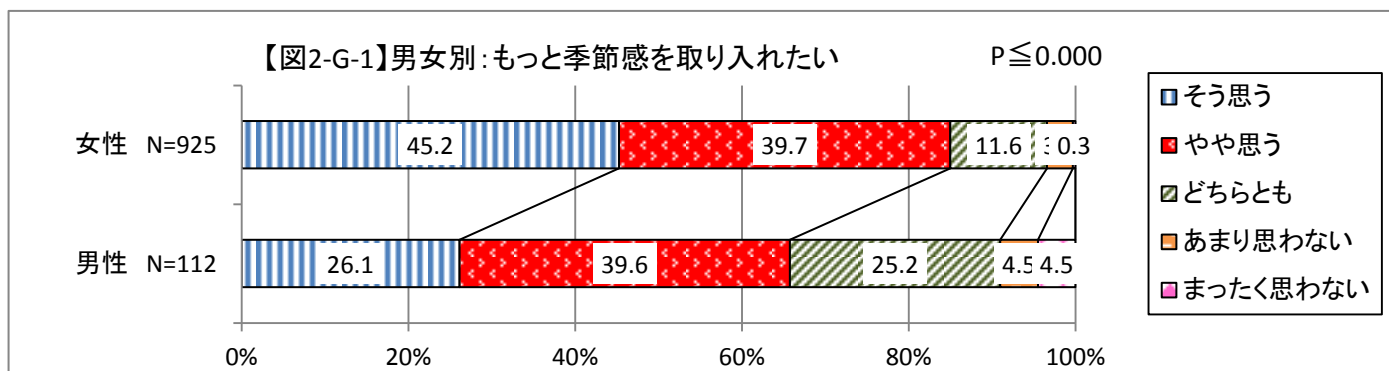
- ・〈A. もっと魚を食べたい〉〈D. もっと米を食べたい〉〈E. もっと肉を食べたい〉以外の6項目で有意差がみられる。すべて、女性の「そう思う」が男性を上回っている。

【図2-B-1】男女別：もっと野菜を食べたい



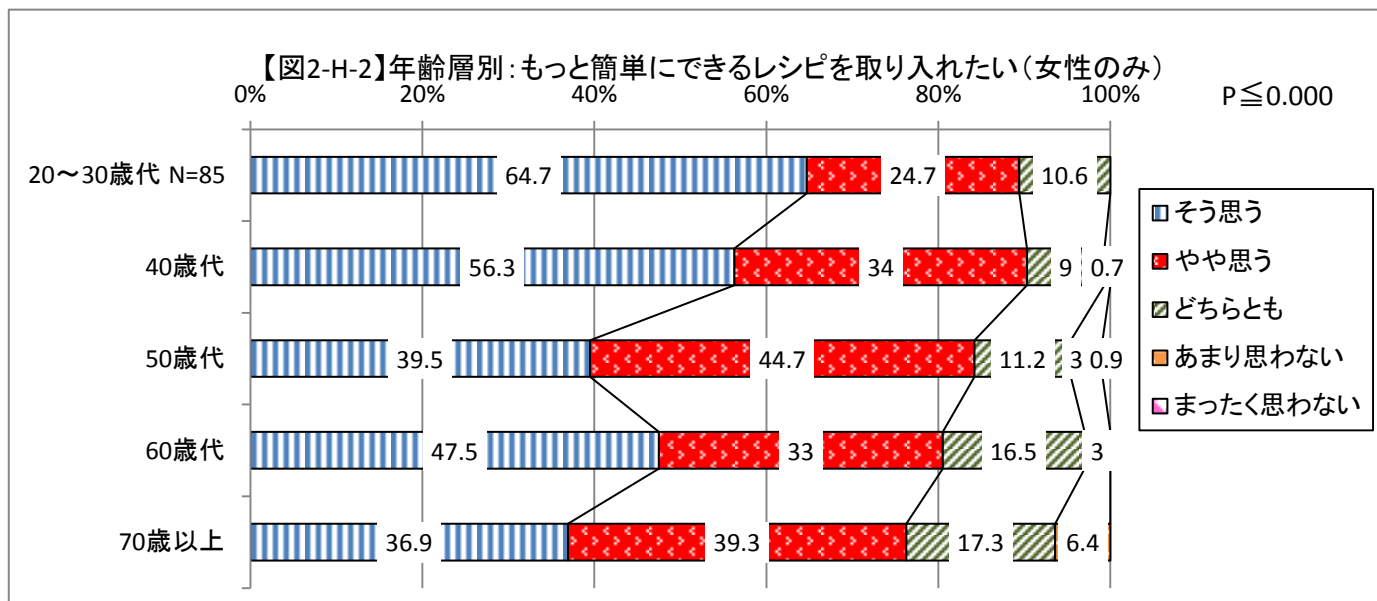
【図2-C-1】男女別：もっと雑穀を食べたい





〈年齢層別〉（女性のみ）

- ・〈H. もっと簡単にできるレシピを取り入れたい〉のみ、女性の年齢層による有意差がみられる。おおむね、年齢層が低くなるほど、「そう思う」や「やや思う」といった肯定意見が多くなる傾向がみられる。



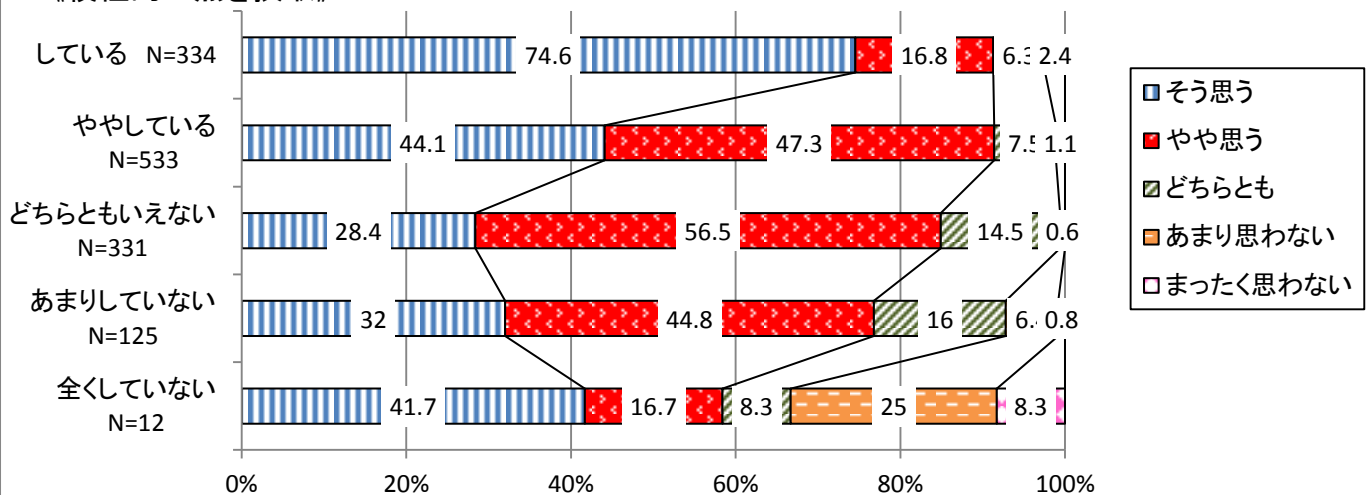
〈現状別〉

- ・前章でたずねた食生活の現状別に意識を確認すると興味深い結果が得られた。
- ・〈積極的に魚を食べるようにしている〉と〈A. もっと魚を食べたい〉をクロスすると、現状で〈積極的に魚を食べるようにしている〉と回答した人の方が〈もっと魚を食べたい〉に「そう思う」と回答した人が多くなっている。現状で「全くしていない」人は、「そう思う」は4割を超えているが、「まったく思わない」と「思わない」の合計も3割を上回っている。
- ・現状で、「あまりしていない」、「どちらともいえない」と回答した人では、「そう思う」は3割前後だが、「ややそう思う」は半数前後と多くなっている。もともと魚をあまり食べない人にとっては、食材の好き嫌いや調理の利便性など、なんらかの問題が存在していることがうかがえる。
- ・この傾向は、〈I. 積極的に野菜を食べるようにしている〉と〈B. もっと野菜を食べたい〉、〈O. 地域の伝統料理を食卓に取り入れている〉と〈I. 今住んでいる地域の、伝統料理を取り入れたい〉、のクロスでも同傾向であった。

【図2-A-3】現状別：もっと魚を食べたい

$P \leq 0.000$

《積極的に魚を摂取》

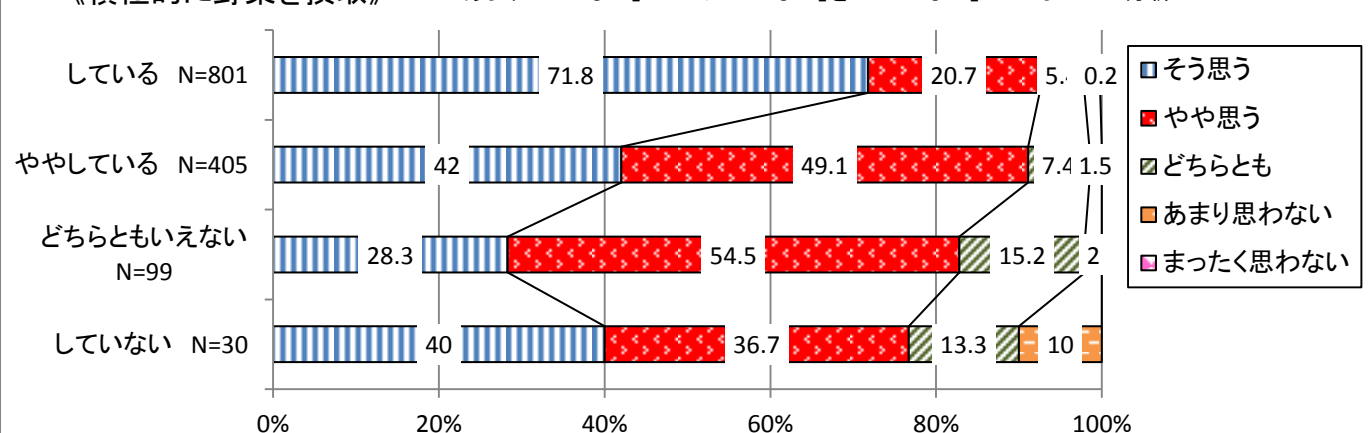


【図2-B-3】現状別：もっと野菜を食べたい

$P \leq 0.000$

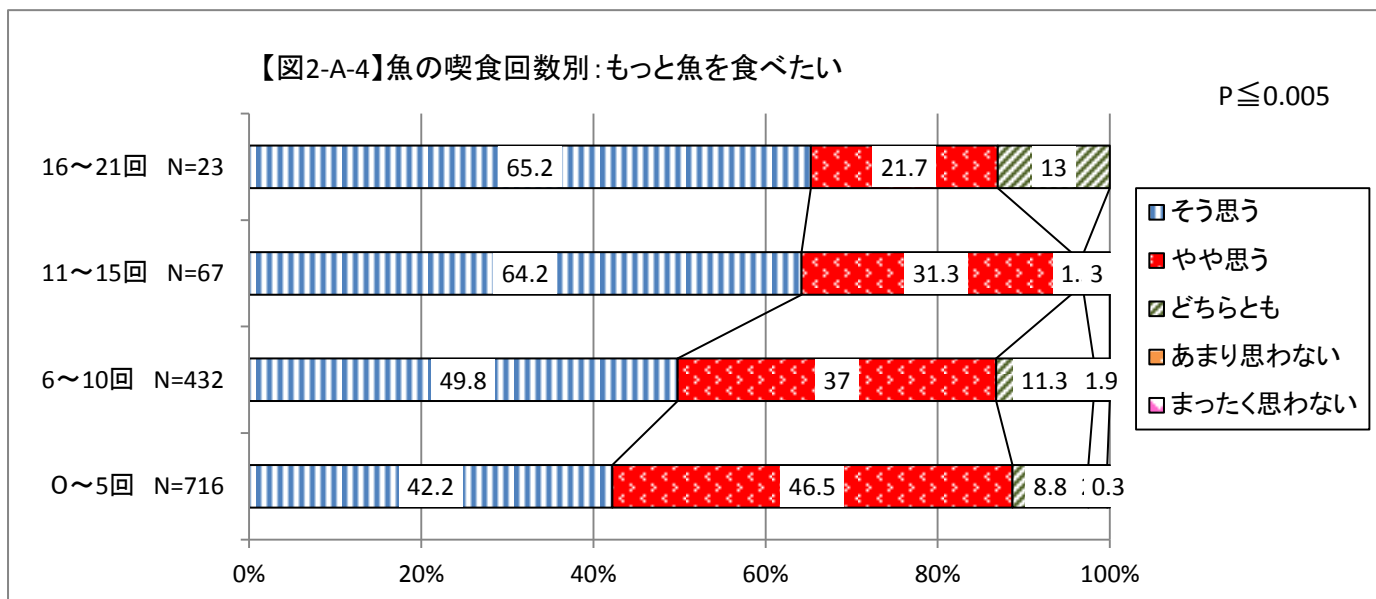
《積極的に野菜を摂取》

*「あまりしていない」と「全くしていない」を「していない」としてまとめて分析

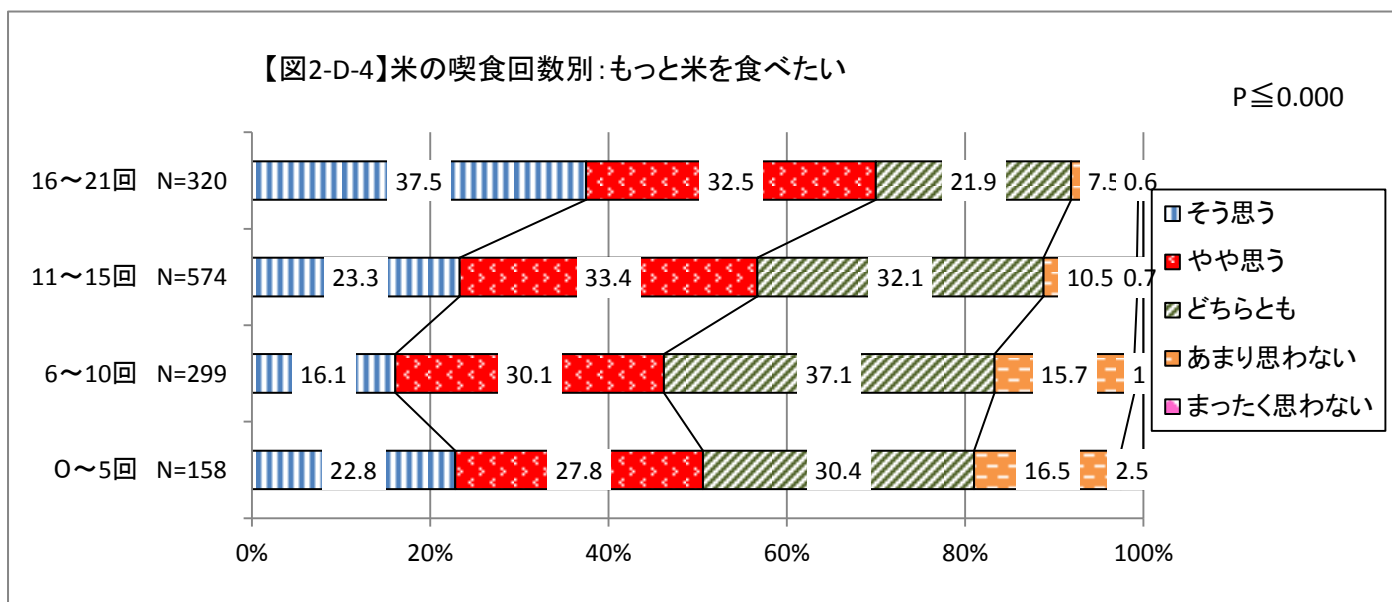


〈喫食回数別〉

- ・1週間の朝・昼・夕の魚の喫食回数を合計し、その回数をグルーピングしと〈A. もっと魚を食べたい〉を見ると、喫食回数の多い人ほど今後とも〈もっと魚を食べたい〉と感じている人が多くなる傾向がみられる。



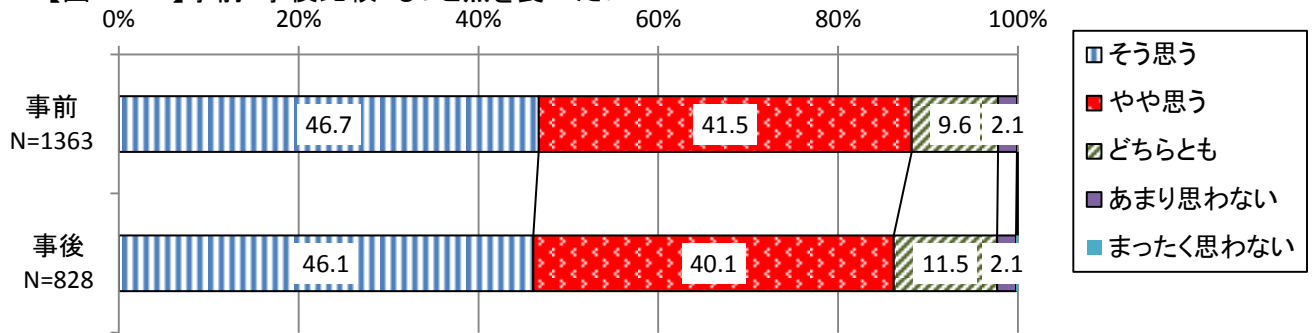
- ・同様に、米の喫食回数別に〈D. もっと米を食べたい〉をみると、1週間の朝・昼・夕合計21食のうち6回以上米を食べている人では、喫食回数が多くなるほど〈もっと米を食べたい〉と思う人が多くなる傾向がみられる。21食のうち米の喫食回数が5回以下の人では、「6~10回」の人に比べて「そう思う」がやや多くなるものの、米の喫食回数が11回以上の人に比べると、少なくなっている。



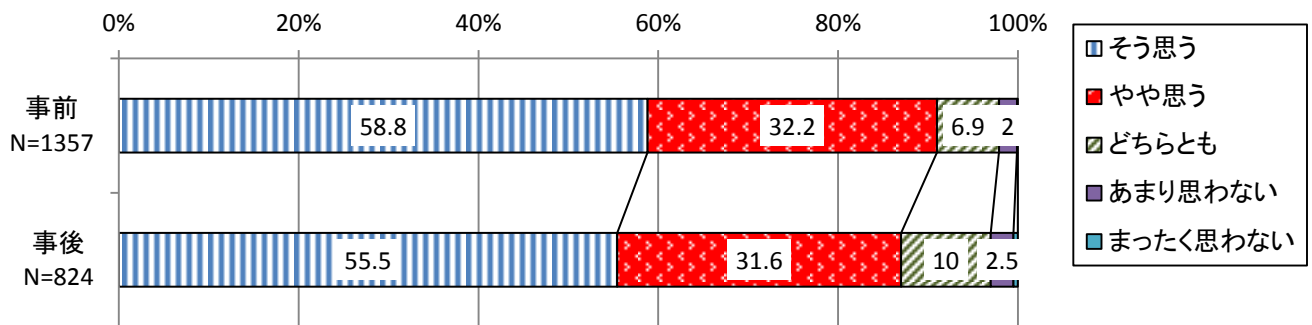
〈事後アンケートとの比較〉

- ・事後（1か月後）アンケートと比較すると、いずれの項目もわずかながらではあるが、「そう思う」や「やや思う」が少なくなる傾向がみられる。これは、現状を尋ねた設問で、「積極的に野菜を食べるようにしている」や「積極的に魚を食べるようにしている」と回答した人が最も多いため、これ以上野菜や魚を食べる必要を感じなくなった人がいるためと考えられる。

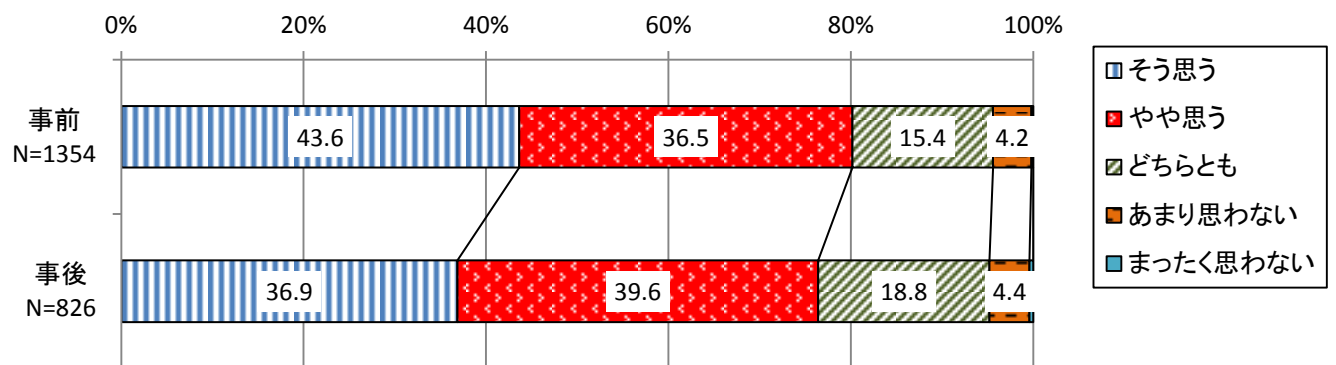
【図2-A-11】事前・事後比較:もっと魚を食べたい



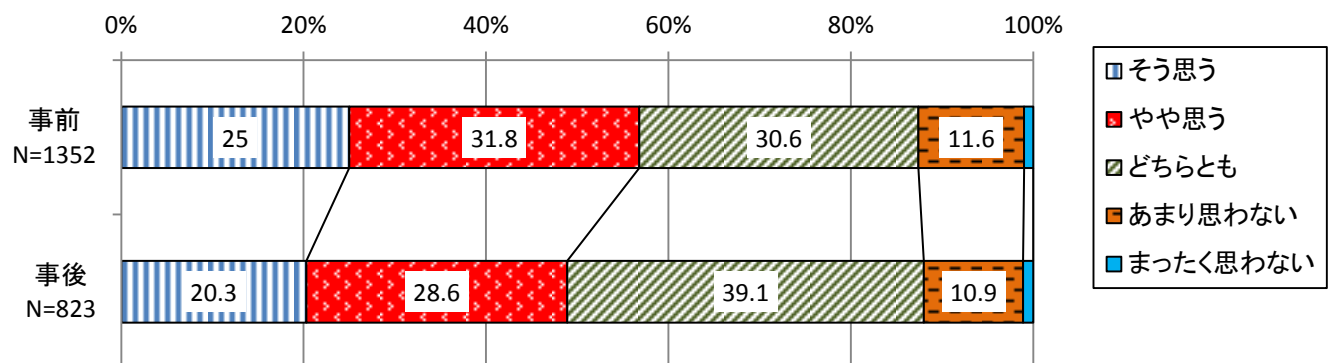
【図2-B-11】事前・事後比較:もっと野菜を食べたい



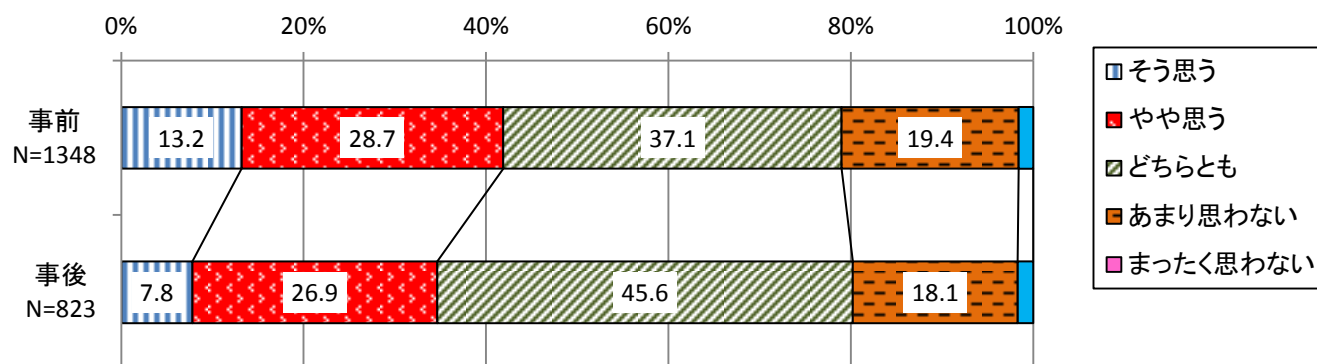
【図2-C-11】事前・事後比較:もっと雑穀を食べたい



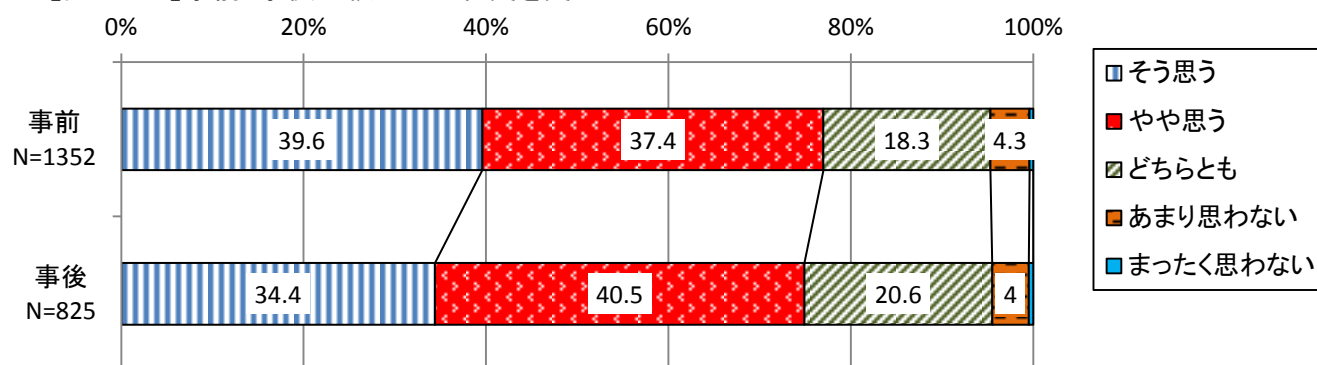
【図2-D-11】事前・事後比較:もっと米を食べたい



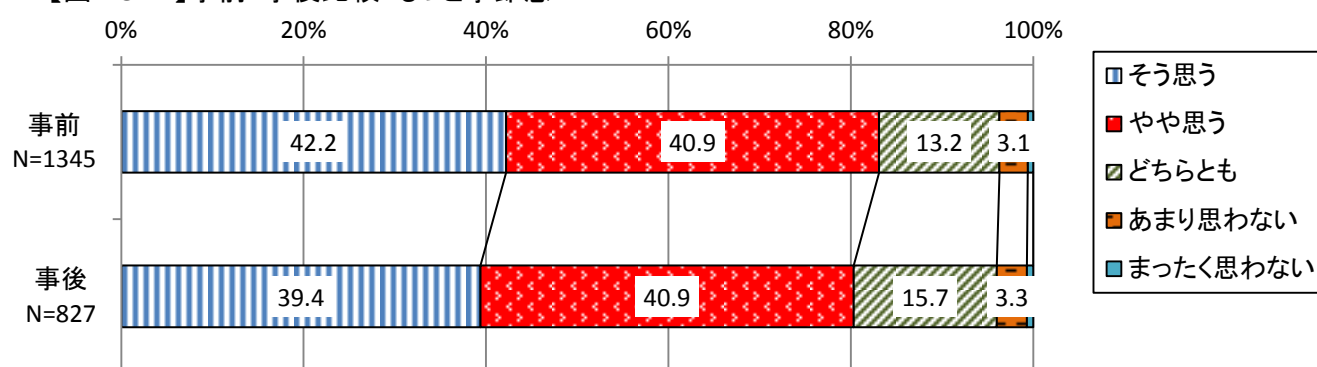
【図2-E-11】事前・事後比較:もっと肉を食べたい



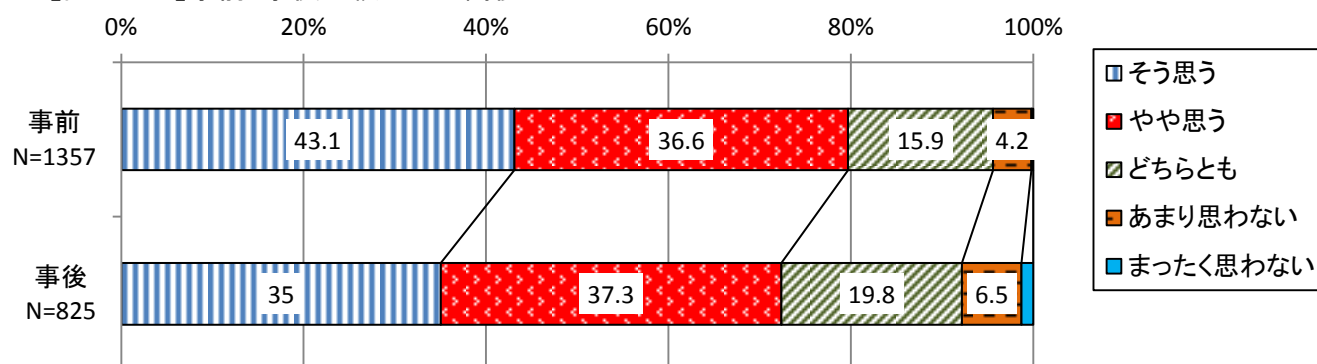
【図2-F-11】事前・事後比較:もっと和食を食べたい



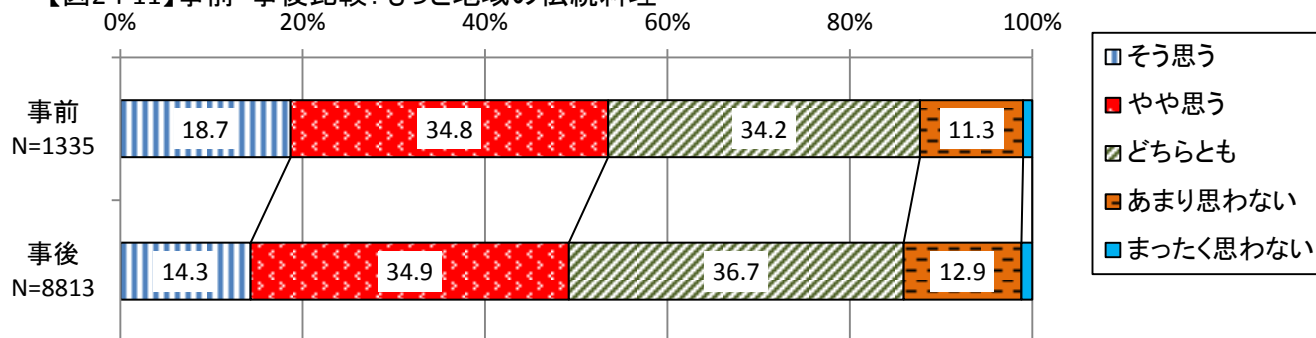
【図2-G-11】事前・事後比較:もっと季節感



【図2-H-11】事前・事後比較:もっと簡便

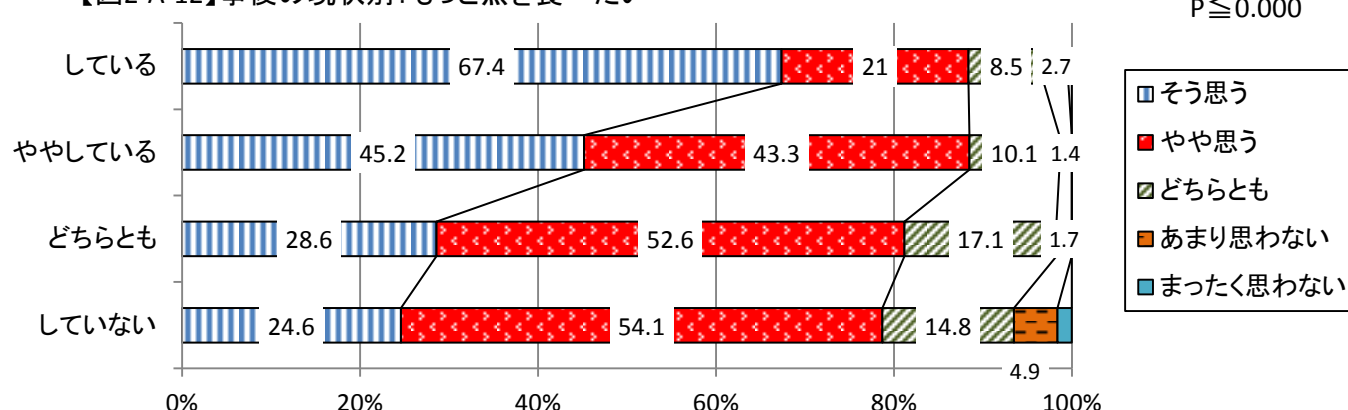


【図2-I-11】事前・事後比較:もっと地域の伝統料理

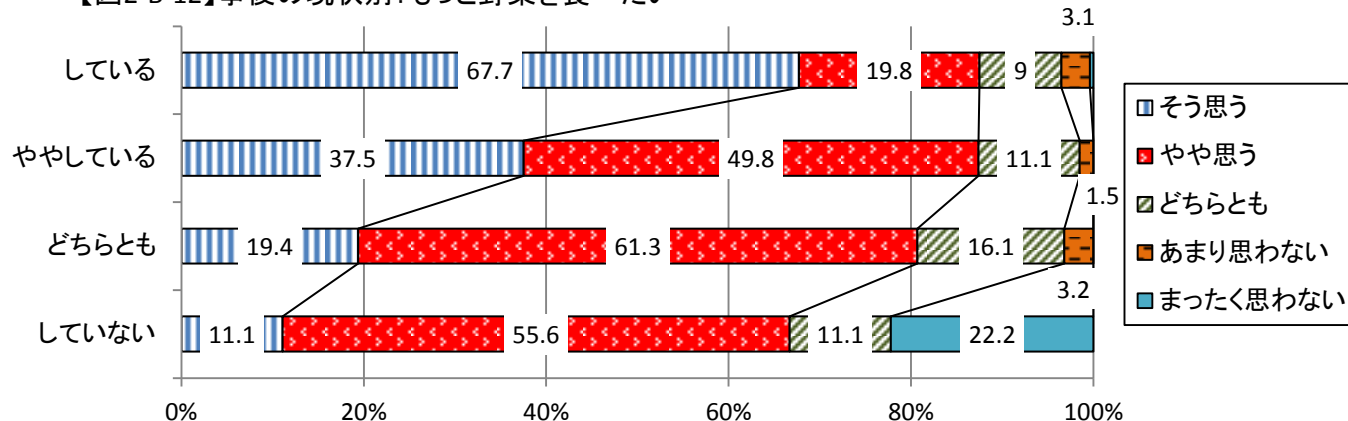


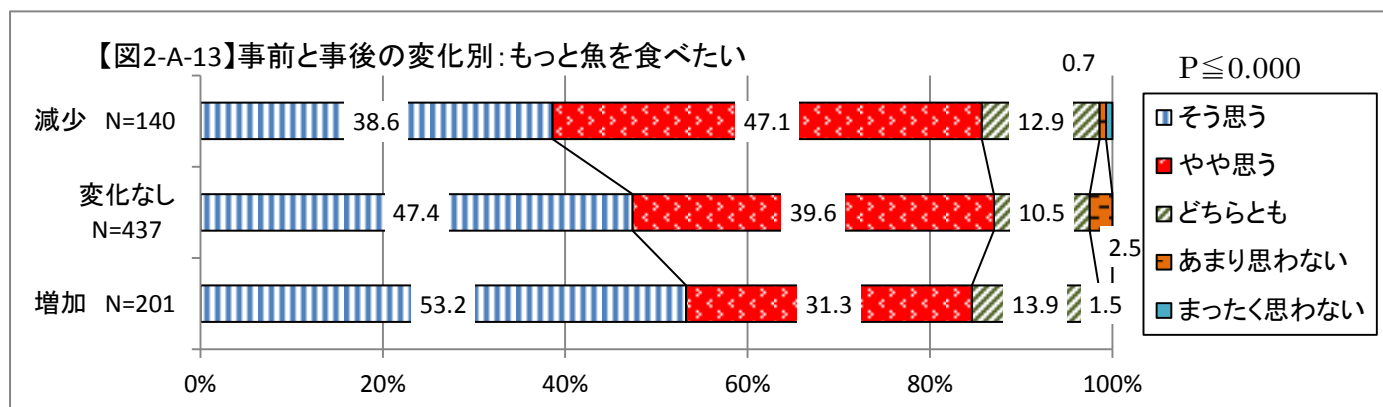
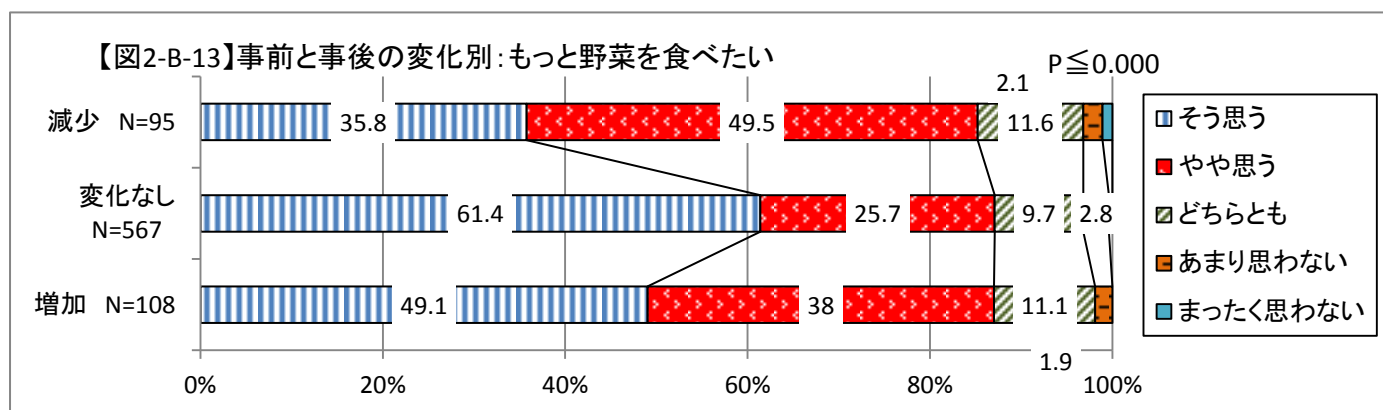
- ・念のために、事後の現状と今後の意向をクロスすると、事前同様、現状で摂取している人の方が、今後の意向も高くなっている。現状で野菜や魚の摂取を積極的にしていない人は、学習会を通してそれらが必要だと感じて、家族が好き嫌いがある、あるいは金額が高い、調理方法や調理時間の問題など、何らかの問題を抱えているものと考えられる。
- ・また、事前と事後とで実際に野菜の摂取量が増えた人では、〈もっと野菜を食べたい〉に「そう思う」と回答する人は事前より少なくなり、野菜摂取に事前と事後とで「変化なし」の人が、「そう思う」が最も多くなっている。魚も同様の分析を試みたが、有意差は見られない。つまり、現状で野菜をたくさん食べていると認識している人は、これ以上の野菜摂取は必要ないと考えているが、魚に関しては、野菜に比べると摂取回数が少ないことの表れか、1か月前より摂取量が増加しても、なお魚の摂取量が不十分と考えているとの見方もできる結果となった。

【図2-A-12】事後の現状別:もっと魚を食べたい



【図2-B-12】事後の現状別:もっと野菜を食べたい





3：食に関する考え方

・下表のような項目を挙げ、食に関する考え方を「そう思う」から「まったく思わない」までの5段階評価でたずねた。

【表 3-1】 問3の項目

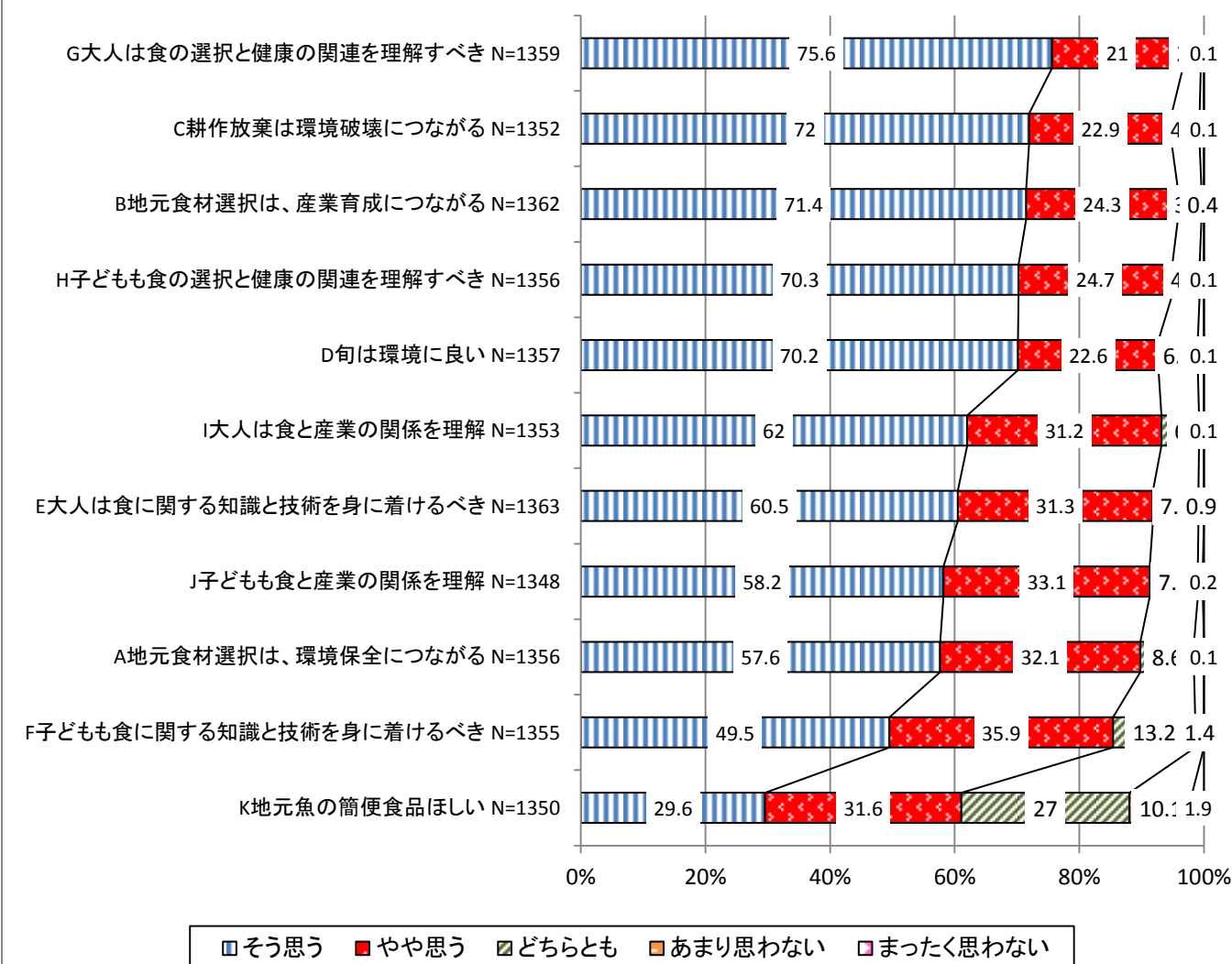
A	地元の食材を選ぶことは、環境保全にもつながっていると思う
B	地元の食材を選ぶことは、地元の農業や漁業を育てることにつながっていると思う
C	山が荒廃したり耕作放棄地が増えると、食べ物にもよくない影響が出てくると思う
D	季節の食材を食べることは、環境に良いと思う
E	大人は、男女にかかわらず栄養バランスを考えて、自分で献立を考える知識と技術を身に付けるべきだ
F	子どもも、栄養バランスを考えて自分で献立を考える技術を身に付けるべきだ
G	大人は、男女にかかわらず、食の選択が自分の健康に直結していることを知っている方がいい
H	子どもも、食の選択が自分の健康に直結していることを知っている方がいい
I	大人は、男女にかかわらず、食の選択が地域の産業に直結していることを知っている方がいい
J	子どもも、食の選択が地域の産業に直結していることを知っている方がいい
K	骨や皮が取ってあり調理しやすい、地元の魚を使った冷凍食品があるとよい

〈全体傾向〉

・「そう思う」が最も多かったのは〈G. 大人は、男女にかかわらず、食の選択が自分の健康に直結していることを知っている方がいい〉で、「やや思う」と合計した肯定意見は9割近くになっている。〈C. 山が荒廃したり耕作放棄地が増えると、食べ物にもよくない影響が出てくると思う〉〈B. 地元の食材を選ぶことは、地元の農業や漁業を育てることにつながっていると思う〉〈H. 子どもも、食の選択が自分の健康に直結していることを知っている方がいい〉〈D. 季節の食材を食べることは、環境に良いと思う〉の4項目も、「そう思う」が7割を超えている。

・「あまり思わない」と「まったく思わない」の合計が最も多いのは〈K. 骨や皮が取ってあり調理しやすい、地元の魚を使った冷凍食品があるとよい〉だが、それでも否定意見の合計は 1 割を超える程度にとどまり、他の項目はすべて 2 %にも届かないレベルとなっている。

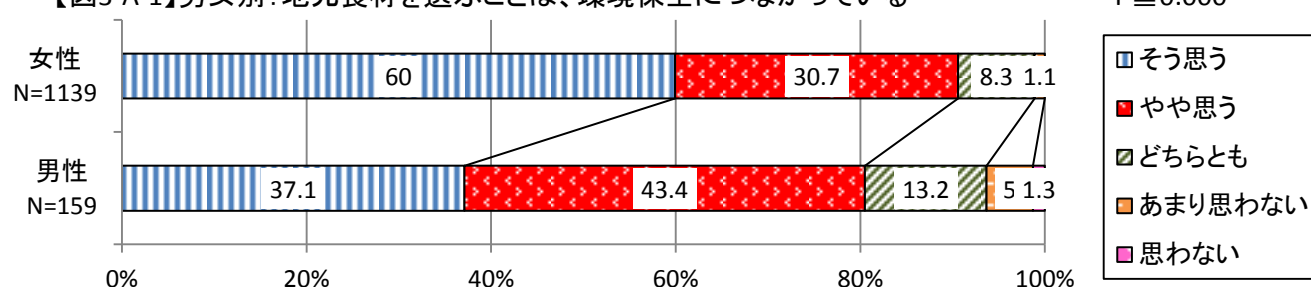
【図3-1】食を選択するときの基準



〈男女別〉

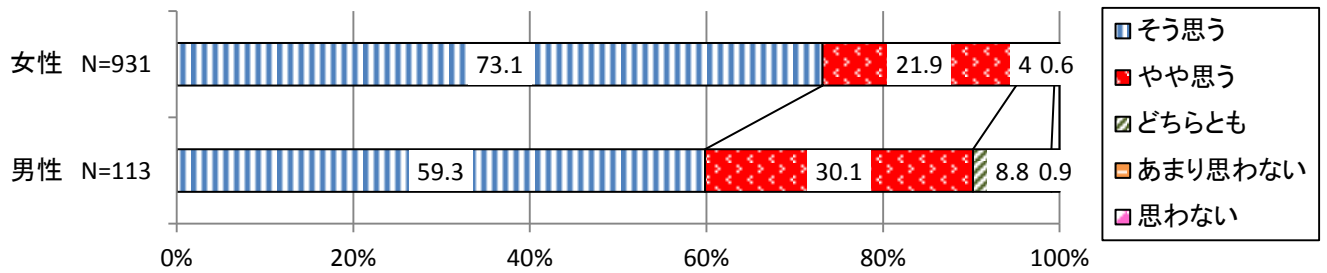
・〈K. 骨や皮が取ってあり調理しやすい、地元の魚を使った冷凍食品があるとよい〉以外のすべての項目で、男女による有意差がみられる。すべて、女性の「そう思う」が男性を上回っており、特に〈D. 季節の食材を食べることは、環境に良いと思う〉では、女性の「そう思う」が男性のそれより 3 割以上多くなっている。

【図3-A-1】男女別：地元食材を選ぶことは、環境保全につながっている



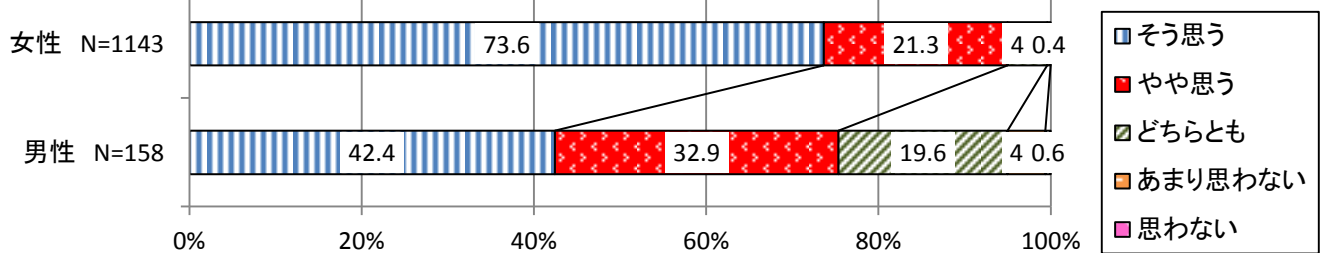
【図3-C-1】男女別：耕作放棄地が増えると、食べ物にも悪影響が出る

$P \leq 0.005$



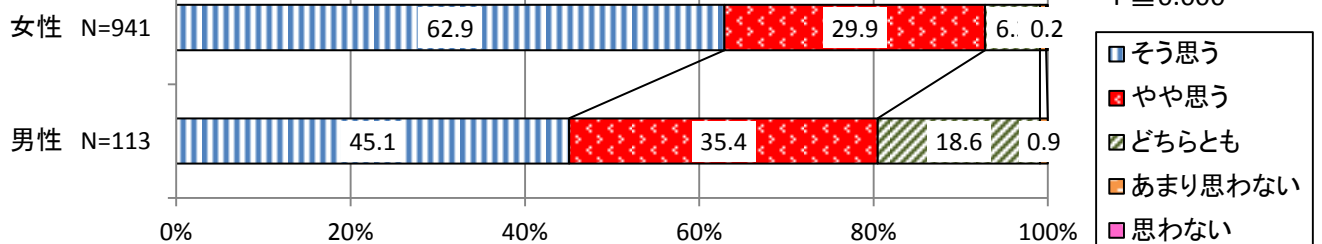
【図3-D-1】男女別：旬の食材を食べることは、環境に良い

$P \leq 0.000$



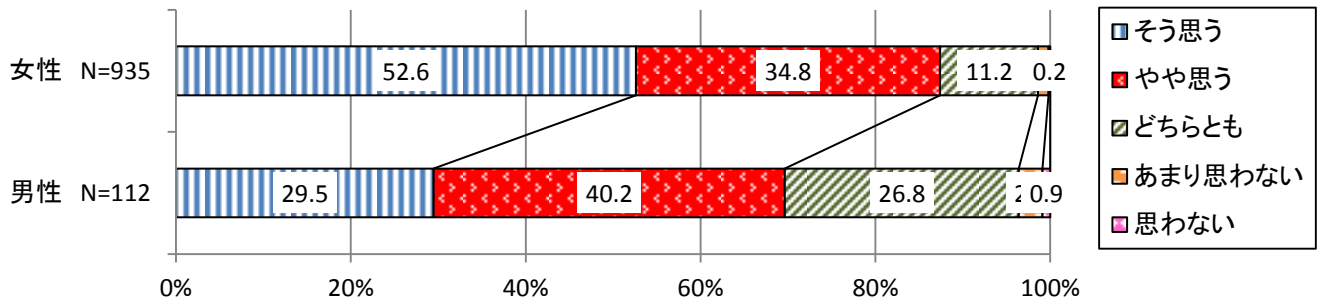
【図3-E-1】男女別：大人は男女にかかわらず栄養バランスを考え、献立を考える技術を身に着けるべき

$P \leq 0.000$



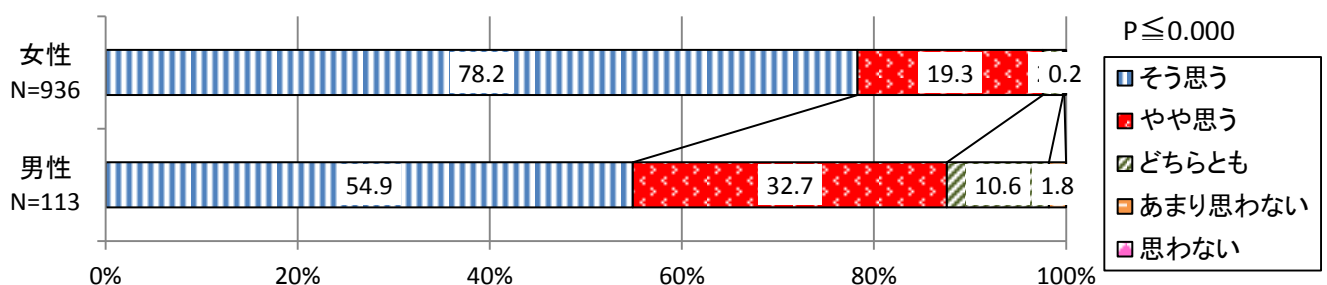
【図3-F-1】男女別：子どもも栄養バランスを考え、献立を考える技術を身に着けるべき

$P \leq 0.000$



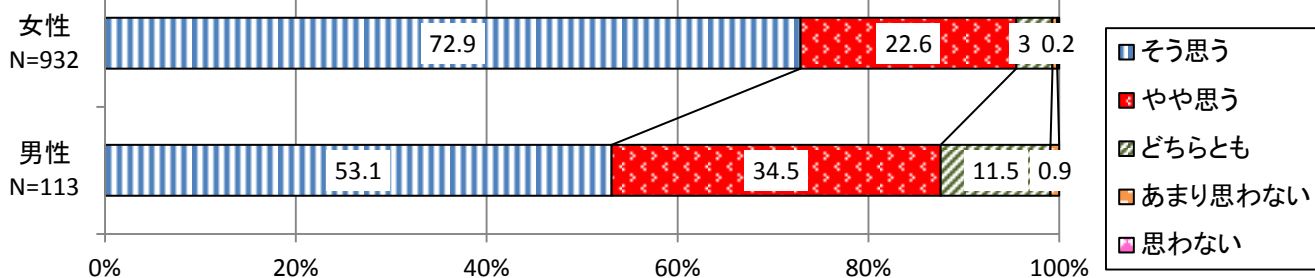
【図3-G-1】男女別：大人は男女にかかわらず食の選択が自分の健康に直結していることを知っているべき

$P \leq 0.000$



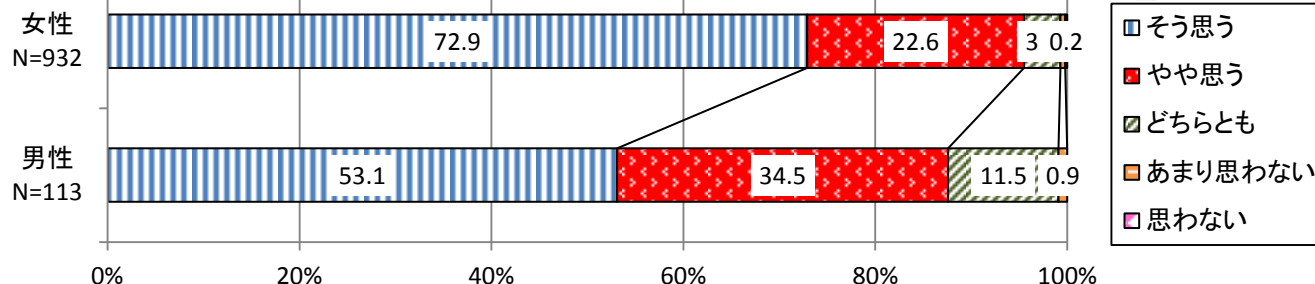
【図3-H-1】男女別：子ども食の選択が自分の健康に直結していることを知っているべき

$P \leq 0.000$



【図3-J-1】男女別：子ども食の選択が地域の産業に直結していることを知っているべき

$P \leq 0.005$

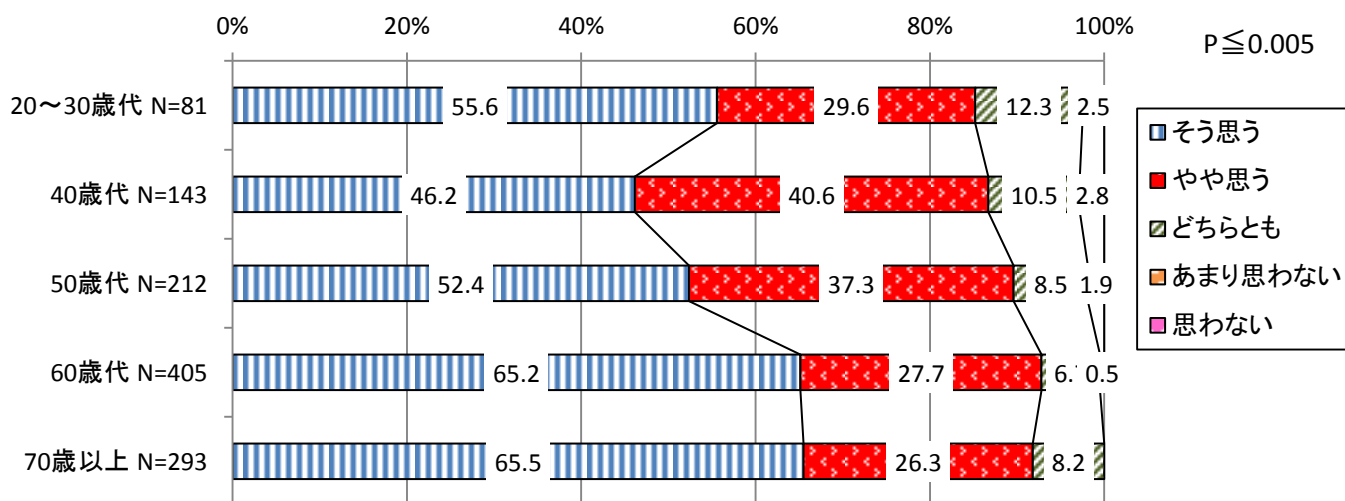


〈年齢層別〉(女性のみ)

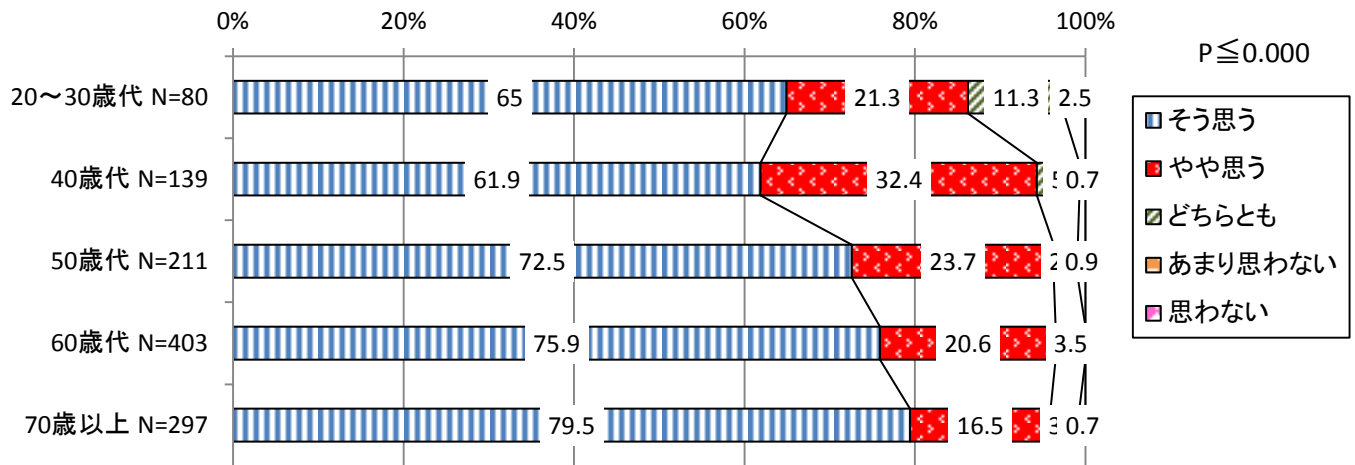
- ・〈A. 地元の食材を選ぶことは、環境保全にもつながっていると思う〉〈C. 山が荒廃したり耕作放棄地が増えると、食べ物にもよくない影響が出てくると思う〉〈D. 季節の食材を食べることは、環境に良いと思う〉〈K. 骨や皮が取ってあり調理しやすい、地元の魚を使った冷凍食品があるとよい〉の4項目で、女性の年齢層による有意差がみられる。
- ・どの項目も、40歳代の「そう思う」が最も少なく、年齢層が高くなるほど多くなる傾向がみられる。ただし、反対に年齢層が低くなるほど多くなるのは「どちらともいえない」で、「あまり思わない」などの否定意見が増加するわけではない。この傾向は、他の項目とも共通している。

【図3-A-2】年齢層別：地元の食材を選ぶことは、環境保全にもつながっていると思う(女性のみ)

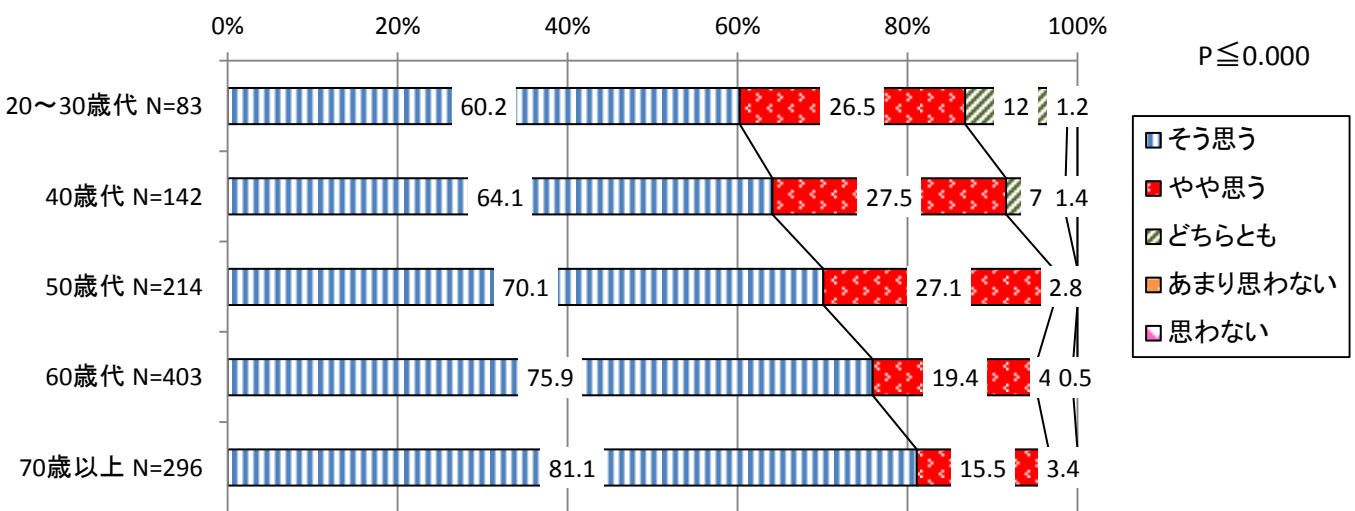
$P \leq 0.005$



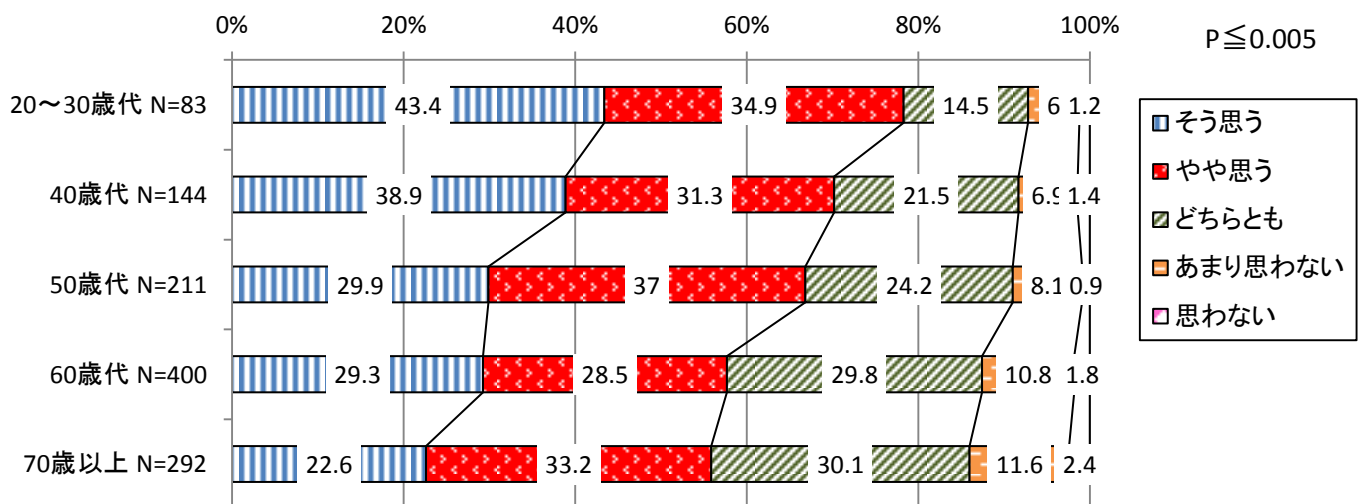
【図3-C-2】年齢層別：耕作放棄地が増えると、食べ物にも悪影響が出る(女性のみ)



【図3-D-2】年齢層別：旬の食材を食べることは、環境に良い(女性のみ)



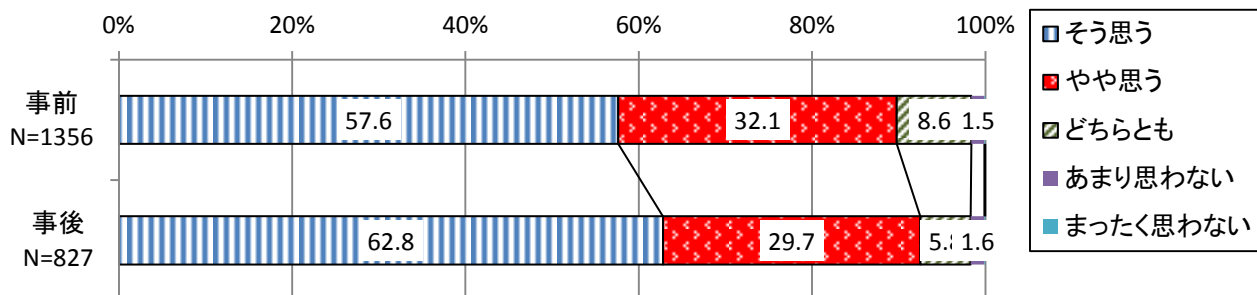
【図3-K-2】年齢層別：骨や皮がとってある地元魚の冷凍食品がほしい(女性のみ)



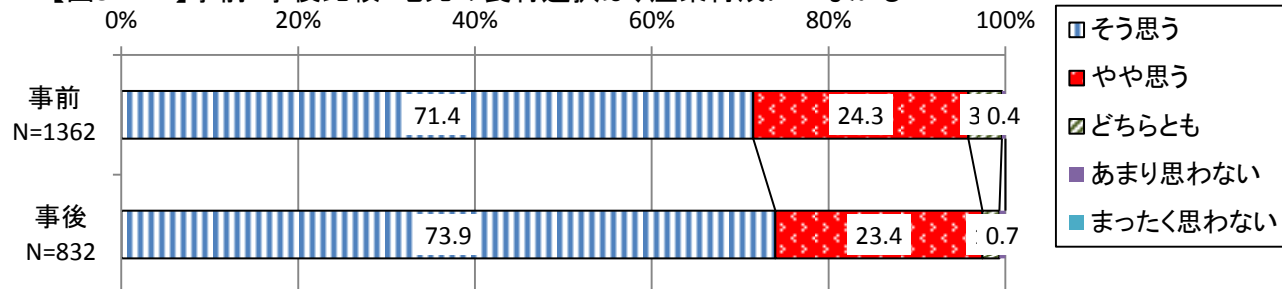
〈事後との比較〉

- ・〈F. 子どもも、栄養バランスを考えて自分で献立を考える知識と技術を身に付けるべきだ〉〈H. 子どもも、食の選択が自分の健康に直結していることを知っている方がいい〉〈J. 子どもも、食の選択が地域の産業に直結していることを知っている方がいい〉といった子ども関連の3項目では、事前調査より事後調査の方が「そう思う」が少なくなる傾向がみられる。
- ・また、〈K. 骨や皮が取ってあり、調理しやすい地元の魚を使った冷凍食品があるとよい〉は、肯定意見の合計がやや減少し、否定意見が増加している。それ以外の7項目では、事前調査より事後調査の方が「そう思う」が多くなる傾向がみられる。

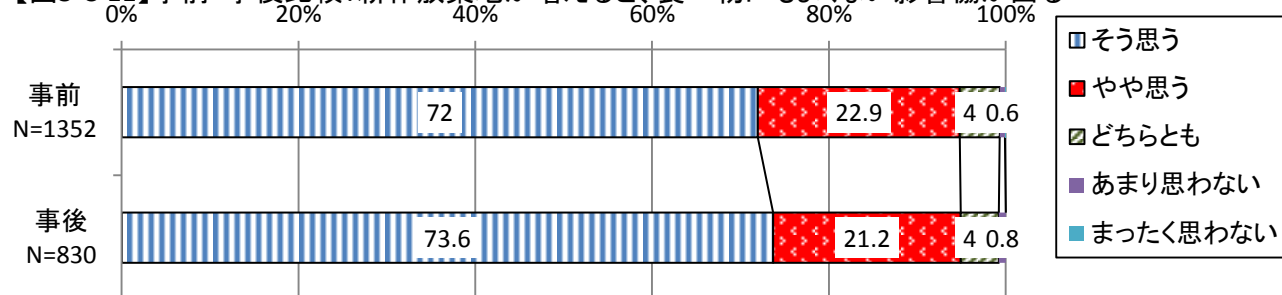
【図3-A-11】事前・事後比較：地元の食材選択は、環境保全につながる



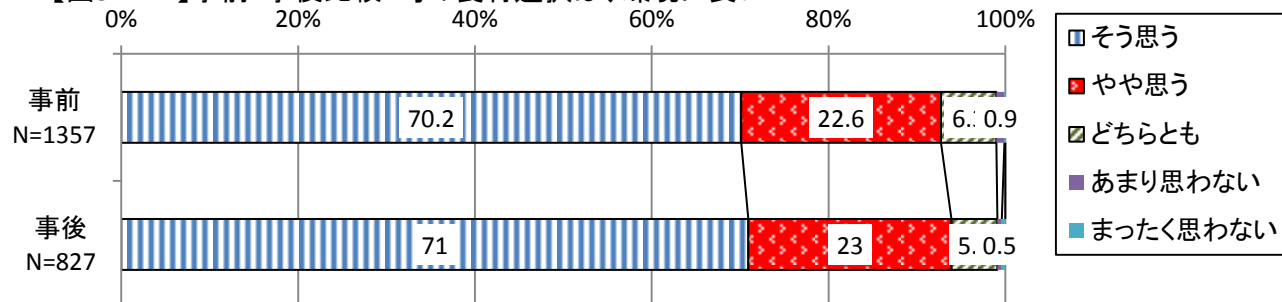
【図3-B-11】事前・事後比較：地元の食材選択は、産業育成につながる



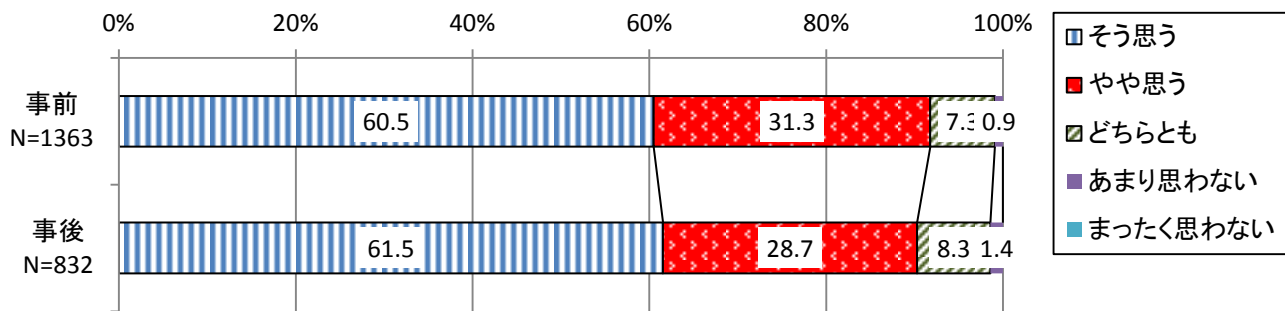
【図3-C-11】事前・事後比較：耕作放棄地が増えると、食べ物にもよくない影響協が出る



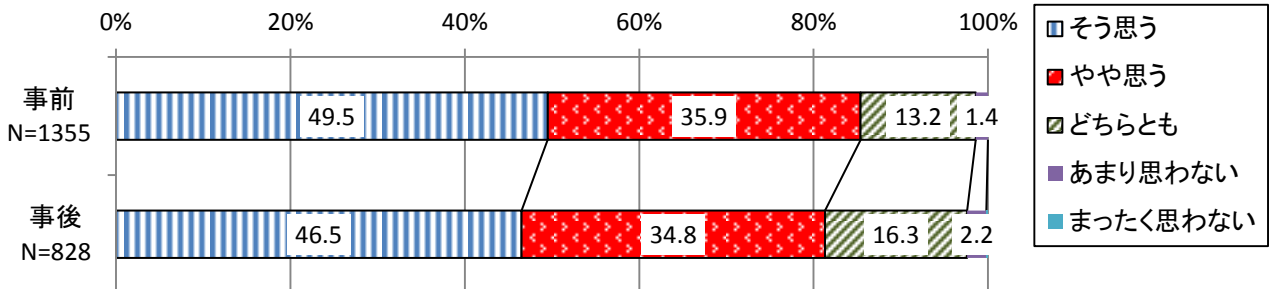
【図3-D-11】事前・事後比較：旬の食材選択は、環境に良い



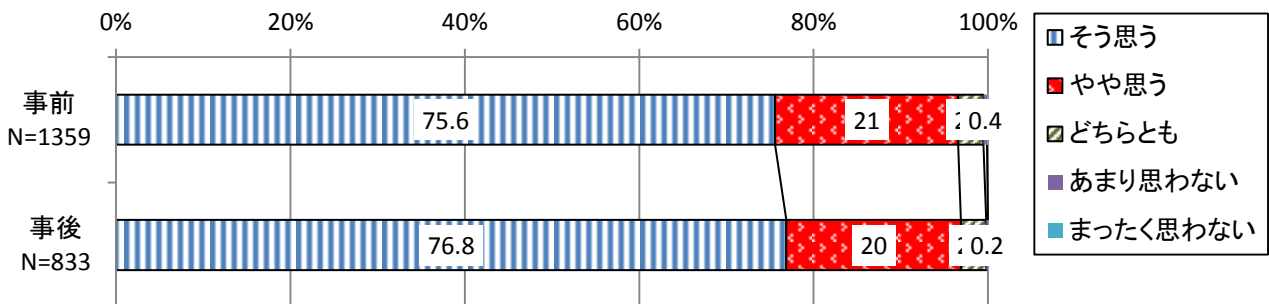
【図3-E-11】事前・事後比較:大人は、食に関する知識や技術を身に付けるべき



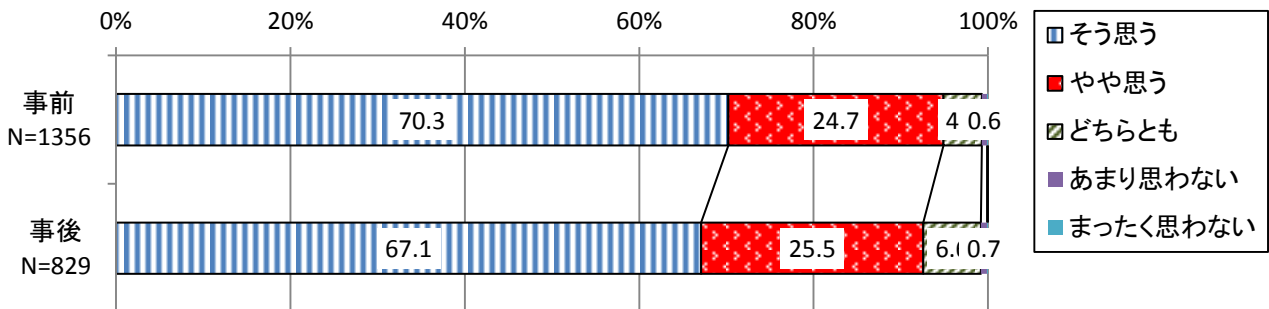
【図3-F-11】事前・事後比較:子どもも、食に関する知識や技術を身に付けるべき



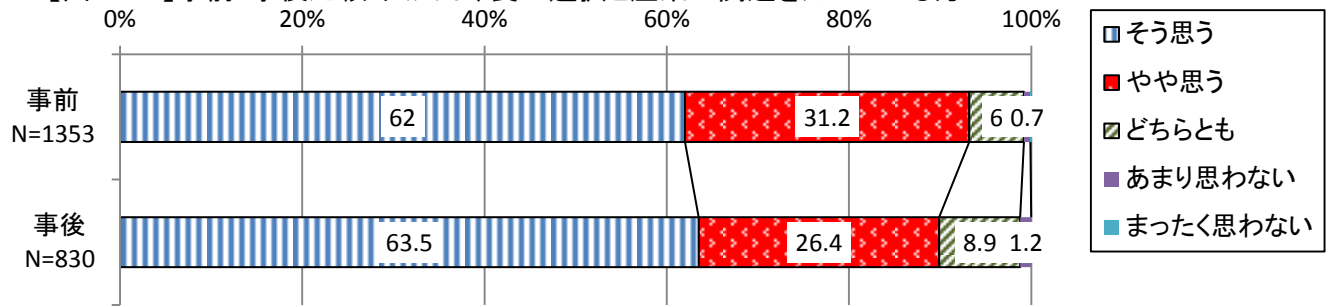
【図3-G-11】事前・事後比較:大人は、食の選択と健康の関連を理解すべき



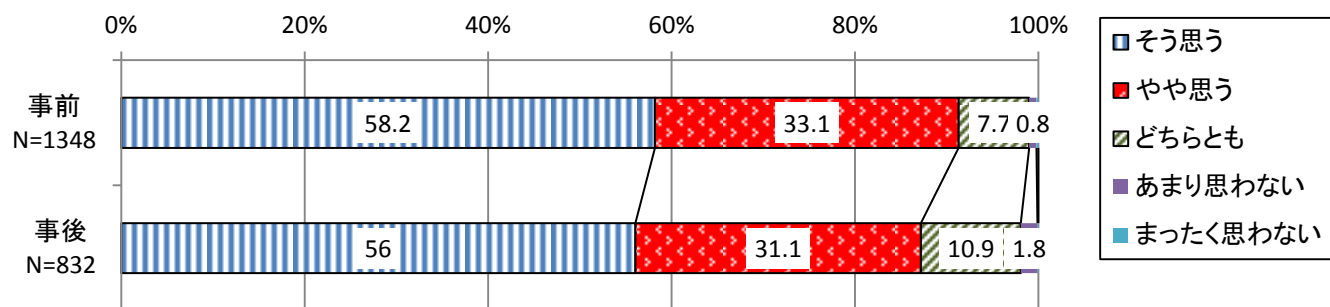
【図3-H-11】事前・事後比較:子どもも、食の選択と健康の関連を理解すべき



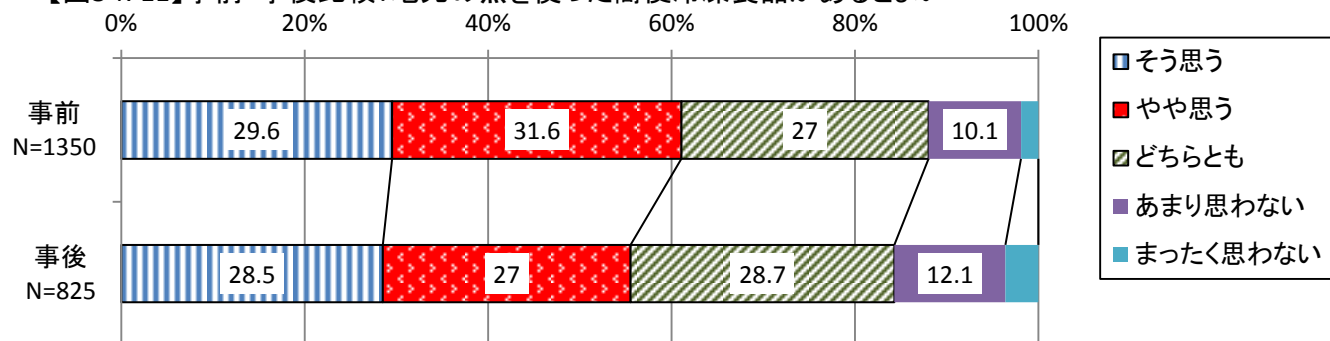
【図3-I-11】事前・事後比較：大人は、食の選択と産業の関連を知っている方がいい



【図3-J-11】事前・事後比較：子どもも、食の選択と産業の関連を知っている方がいい

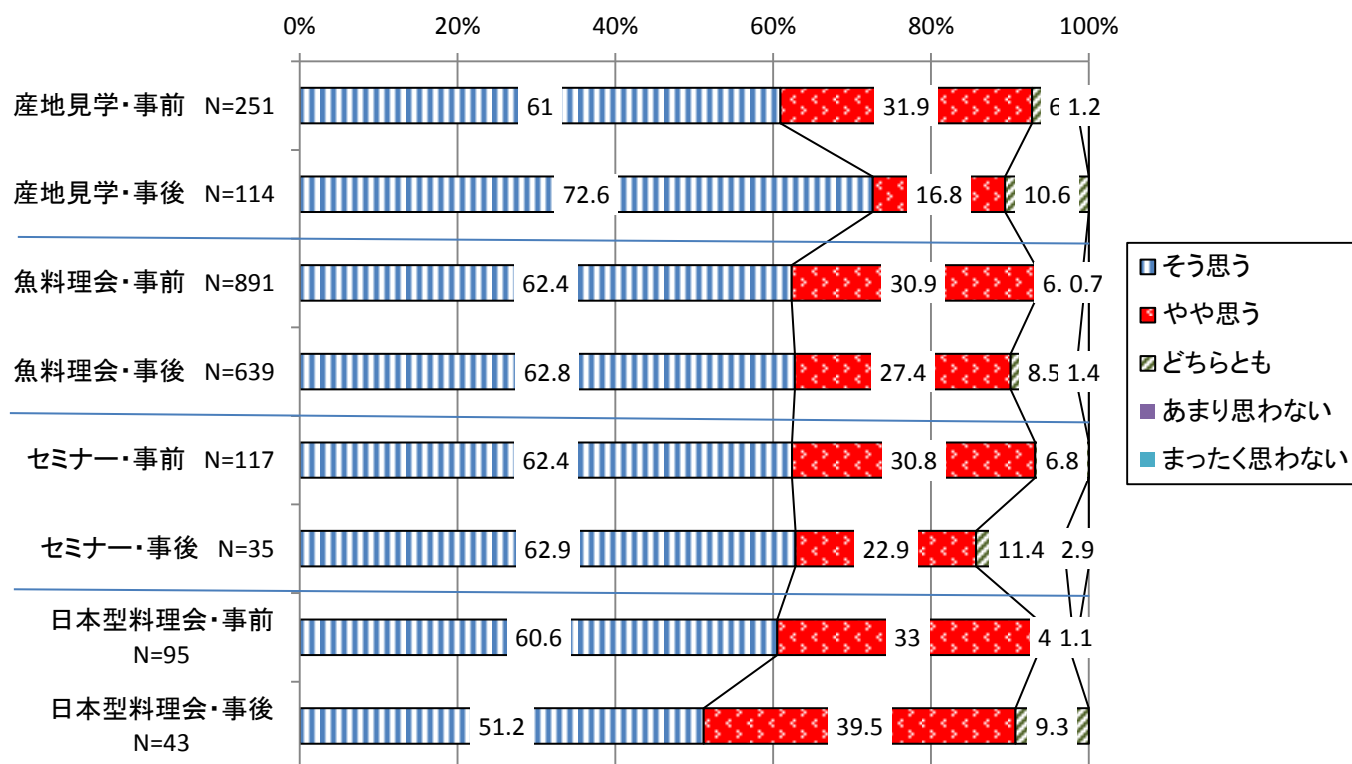


【図3-K-11】事前・事後比較：地元の魚を使った簡便冷凍食品があるとよい



- ・事後の方が肯定意見が少なくなっている原因を探るために、〈大人は、食の選択と産業の関連を知っている方がいい〉と〈子どもも、食の選択と産業の関連を知っている方がいい〉の2項目を学習会別に比較した。
- ・大人に関連した項目では、産地見学学習会後には、「そう思う」が1割以上増加しているが、他の学習機会では、「そう思う」には大きな変化は見られず、むしろ肯定意見の合計は、減少傾向がみられる。これは、産地見学以外の学習会で、農林水産省の作成した日本型食生活パンフレットを配布しており、そのパンフレットには、『日本型食生活は、海外のメニューも取り入れ、多彩なメニュー展開が必要』などといった記述がみられ、メニュー例としてハンバーグが挙げられ、自宅調理に限らず、中食や冷凍食品、レトルト食品、合わせ調味料などの活用や、外食との組み合わせも可能であるといった内容があったためとも考えられる。今後の学習会内容に、課題を残す結果となった。また、産地見学では子ども同伴の企画もあったため、このような結果につながったとも考えられる。
- ・子どもに関してみると、産地見学のほか、フォーラム・セミナーの参加者でも「そう思う」が増加している。しかし、事後アンケートを2月末までしか集計していないため、実数が35人と少なく、正確な値であるとはいえない。今後の分析を待ちたい。

【図3-I-12】学習機会別：事前・事後比較：大人は、食の選択と産業の関連を知っている方がいい



【図3-J-12】学習機会別：事前・事後比較：子ども、食の選択と産業の関連を知っている方がいい

